

石崎地区遺跡群

大 坪 遺 跡 I

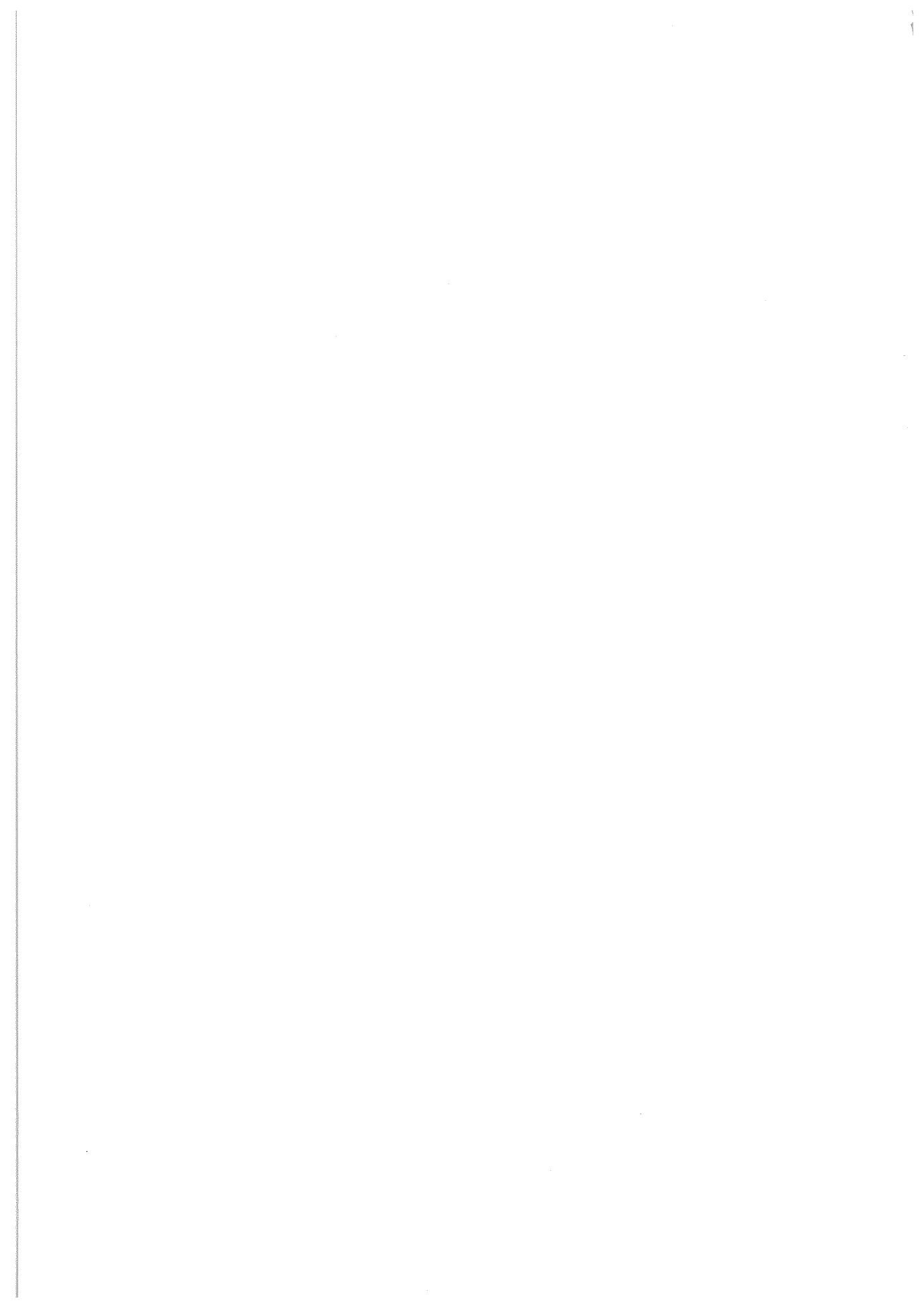
—福岡県糸島郡二丈町大字石崎所在遺跡群の発掘調査—

二丈町文化財調査報告書

第 10 集

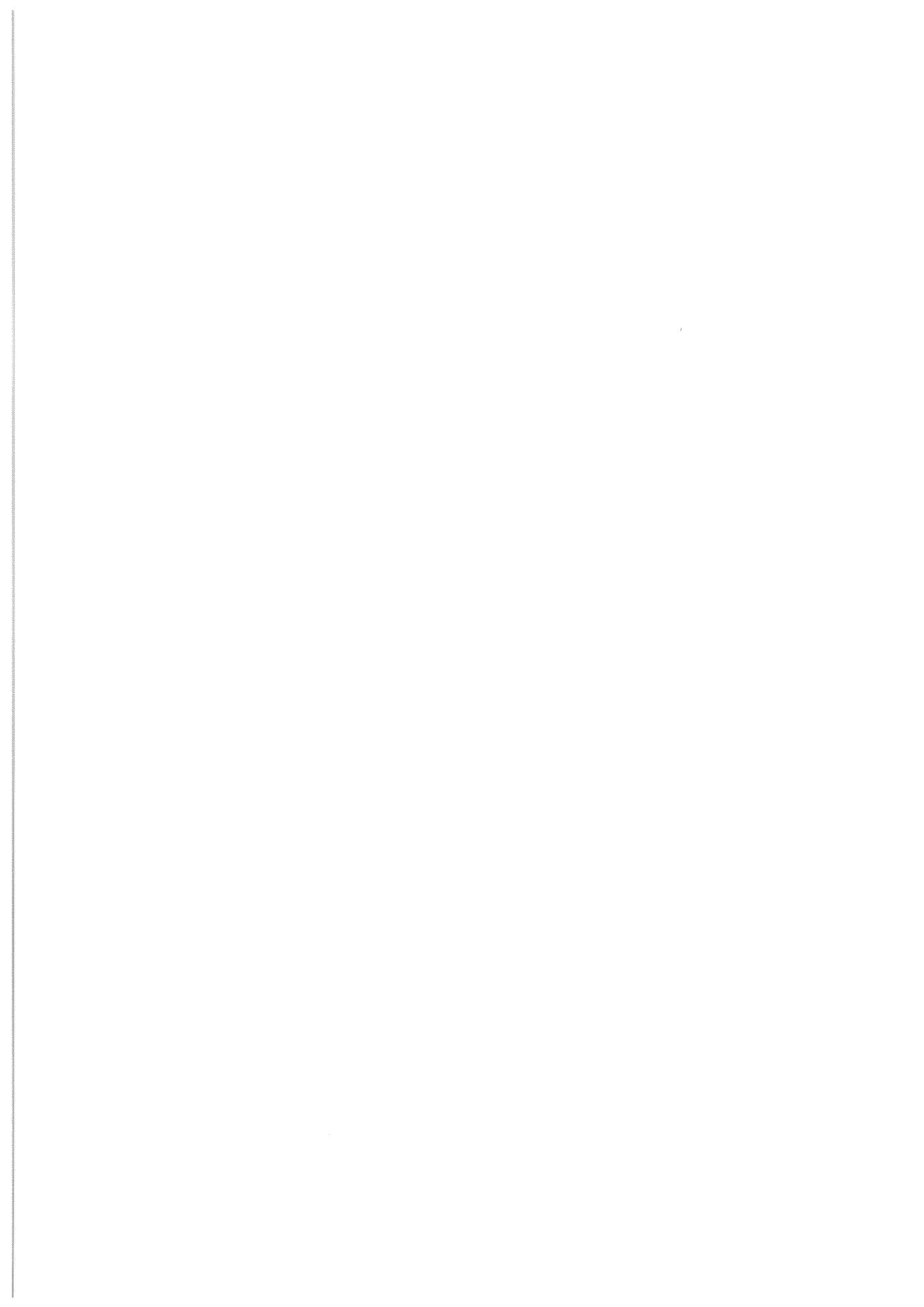
1 9 9 5

二 丈 町 教 育 委 員 会





13号甕棺墓底板に用いられた扉板



序

本書は、昭和63年度に実施した、県営ほ場整備事業一貴山地区に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回、調査された大坪遺跡は、支石墓等が検出された矢風遺跡と同一台地上の甕棺墓群であり、弥生の土器棺墓の発生を考える上で重要な地域と考えられます。又、甕棺に敷かれていた扉材は、我国最古例と考えられ、古代建築史上、貴重な発見となりました。

これらの新しい資料が、二丈町のみならず、糸島地方の考古学研究の一助となり、文化財保護活動に広く活用していただければ幸甚に存じます。

平成7年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 吉 村 昌 幸

例 言

1. 本書は二丈町石崎地区に所在する遺跡群のうち、県営一貴山地区圃場整備事業に伴って発掘調査したもののうち、1988年度調査実施分の報告書である。
2. 掲載の写真は遺構については橋口達也が撮影した他に空中写真企画に空中写真を委託した。遺物写真は九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸一が撮影した。
3. 掲載図面の製図は豊福弥生が行なった。
4. 本書はⅠ・Ⅱを橋口が、Ⅲ-1は中橋孝博、Ⅲ-2は本田光子が執筆した。
5. 本書の編集は橋口が行なった。

本文目次

	頁
Ⅰ. はじめに	1
Ⅱ. 発掘調査の記録	5
1. 試掘調査	5
2. VI地点の調査	7
1). トレンチの調査	8
a. 第1トレンチの調査	8
b. 第2トレンチの調査	9
c. 第3トレンチの調査	9
d. 第4トレンチの調査	9
2). 出土遺物	11
a. 出土土器	11
b. 出土石器	31
c. 木器	43
3). 甕棺墓群の調査	43
3. まとめ	76
Ⅲ. 自然科学的調査	77
1. 福岡県糸島郡二丈町、大坪遺跡出土の弥生時代前期人骨	77
2. 石崎大坪遺跡出土の赤色顔料について	83

図版目次

巻頭図版 13号甕棺墓底板に用いられた扉板

- 図版 1 a 一貴山・上深江地区を南側上空より望む
b 大坪遺跡上空より可也山を望む
- 2 a 遺跡全景（空中写真）
b 第2トレンチ全景（空中写真）
- 3 a 第3トレンチ全景（空中写真）
b 第4トレンチ全景（空中写真）
- 4 a 第4トレンチ杭列等出土状態
b 甕棺墓群全景（空中写真）
- 5 出土土器1
- 6 出土土器2
- 7 a 出土土器3
b 出土打製石器1
- 8 出土打製石器2
- 9 出土打製石器3
- 10 a 出土打製石器4
b 出土磨製石器1
- 11 出土磨製石器2
- 12 出土磨製石器3
- 13 出土磨製石器4
- 14 a 1号甕棺墓出土状態
b 2号甕棺墓出土状態
c 3号甕棺墓出土状態
d 4号甕棺墓出土状態
- 15 a 5号甕棺墓出土状態
b 6号甕棺墓出土状態
c 7号甕棺墓出土状態
d 8号甕棺墓出土状態
- 16 a 9号甕棺墓出土状態
b 10号甕棺墓出土状態
c 11号甕棺墓出土状態
d 12号甕棺墓出土状態
- 17 a 13号甕棺墓出土状態

- b 13号甕棺墓底板出土状態
- 18 a 14号甕棺墓出土状態
 - b 15号甕棺墓出土状態
 - c 16号墓出土状態
 - d 18号甕棺墓出土状態
- 19 a 19号甕棺墓出土状態
 - b 20号甕棺墓出土状態
 - c 21号（左）・22号（右）甕棺墓出土状態
 - d 23号甕棺墓出土状態
- 20 出土甕棺 1
- 21 出土甕棺 2
- 22 出土甕棺 3
- 23 出土甕棺 4
- 24 出土甕棺 5
- 25 出土甕棺 6
- 26 a 4号甕棺下甕の黒塗り
 - b 4号甕棺下甕内面に付着した黒色顔料
- 27 a 6号甕棺内面の調整痕
 - b 7号甕棺下甕内面の調整痕
- 28 a 10号甕棺下甕のタタキ痕ほか
 - b 15号甕棺下甕内面の調整痕
- 29 a 19号甕棺下甕内面の調整痕
 - b 2号甕棺底部付近のタタキ痕
- 30 a 13号甕棺墓底板
 - b 13号甕棺墓底板のとめ杭
 - c 出土土器
 - d 5号甕棺出土玉類
 - e 13号甕棺出土玉類

挿図目次

第 1 図	遺跡付近地形図 1 (縮尺1/5,000)	3
第 2 図	遺跡付近地形図 2 (縮尺1/5,000)	4
第 3 図	試掘調査の出土土器 (縮尺1/3)	6
第 4 図	石崎大坪遺跡トレンチ・遺構配置図 (縮尺1/600)	8
第 5 図	第 1 トレンチ東壁土層図 (縮尺1/60)	9
第 6 図	第 2 トレンチ実測図 (縮尺1/60)	10
第 7 図	第 3 トレンチ実測図 (縮尺1/60)	10
第 8 図	第 4 トレンチ実測図 (縮尺1/60)	11
第 9 図	第 4 トレンチ杭列等出土状態実測図 (縮尺1/30)	12
第 10 図	土器実測図 1 (縮尺1/3)	13
第 11 図	土器実測図 2 (縮尺1/3)	16
第 12 図	土器実測図 3 (縮尺1/3)	18
第 13 図	土器実測図 4 (縮尺1/3)	22
第 14 図	土器実測図 5 (縮尺1/3)	26
第 15 図	土器実測図 6 (縮尺1/3)	29
第 16 図	打製石器実測図 1 (縮尺1/2)	30
第 17 図	打製石器実測図 2 (縮尺1/2)	34
第 18 図	打製石器実測図 3 (縮尺1/2)	35
第 19 図	磨製石器実測図 1 (縮尺1/3)	36
第 20 図	磨製石器実測図 2 (縮尺1/3)	38
第 21 図	磨製石器実測図 3 (縮尺1/3)	40
第 22 図	磨製石器・砥石実測図 4 (縮尺1/3)	42
第 23 図	甕棺墓群等配置図 (縮尺1/60)	43
第 24 図	1号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	44
第 25 図	1号甕棺実測図 (縮尺1/6)	45
第 26 図	2号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	46
第 27 図	2号甕棺実測図 (縮尺1/8)	47
第 28 図	3号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	47
第 29 図	3号甕棺実測図 (縮尺1/6)	48
第 30 図	4号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	48
第 31 図	4号甕棺実測図 (縮尺1/8)	49
第 32 図	5号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	50
第 33 図	5号甕棺実測図 (縮尺1/6)	51

第 34 図	6号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	52
第 35 図	6号甕棺実測図 (縮尺1/8)	52
第 36 図	7号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	53
第 37 図	7号甕棺実測図 (縮尺1/8)	53
第 38 図	8号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	54
第 39 図	8号甕棺実測図 (縮尺1/6)	54
第 40 図	9号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	54
第 41 図	9号甕棺実測図 (縮尺1/8)	55
第 42 図	10号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	56
第 43 図	10号甕棺実測図 (縮尺1/8)	57
第 44 図	11号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	58
第 45 図	11号甕棺実測図 (縮尺1/8)	58
第 46 図	12号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	59
第 47 図	12号甕棺実測図 (縮尺1/8)	60
第 48 図	13号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	61
第 49 図	13号甕棺実測図 (縮尺1/8)	61
第 50 図	木器実測図 1 (縮尺1/8)	62
第 51 図	木器実測図 2 (縮尺1/3)	63
第 52 図	甕棺内出土の玉類 (縮尺1/1)	64
第 53 図	14号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	64
第 54 図	14号甕棺実測図 (縮尺1/6)	65
第 55 図	15号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	66
第 56 図	15号甕棺実測図 (縮尺1/6)	67
第 57 図	16号墓実測図 (縮尺1/20)	68
第 58 図	18号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	68
第 59 図	18号甕棺実測図 (縮尺1/6)	68
第 60 図	19号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	69
第 61 図	19号甕棺実測図 (縮尺1/6)	70
第 62 図	20号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	71
第 63 図	20号甕棺実測図 (縮尺1/8)	72
第 64 図	21号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	72
第 65 図	21号甕棺実測図 (縮尺1/8)	73
第 66 図	22号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	73
第 67 図	22号甕棺実測図 (縮尺1/6)	74
第 68 図	23号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)	74
第 69 図	23号甕棺実測図 (縮尺1/6)	75

I. はじめに

今回報告するのは県営一貴山地区圃場整備事業に伴って、1988年度に調査を実施した石崎地区遺跡群第VI地点、石崎・大坪遺跡の発掘調査の成果である。1987年度の第III地点の調査中に一貴山地区圃場整備地内の分布調査を実施し、1987年12月14日に石崎地区、松国地区の坪掘りを行ない事業地内の東西両側に遺構の存在が予測された。したがって1988年度の調査はまず石崎地区、松国地区の確認調査を6月9日～6月11日に実施した。松国地区ではイ～へまで6本のトレンチを設定して調査したが黒燐石、須恵器等の若干の遺物の包含はみられたが明確な遺構は事業地内では確認されなかった。石崎地区ではA～Eの5本のトレンチを設定して調査した結果、とくにVI地点に遺構・遺物が集中し、北側では一段低くなって遺構が存在することが判明した。Eトレンチでは表土下120cmのところで杭列・柱根等が検出され、さらに表土下300cmの砂層からは弥生前期～古墳時代初め頃までの土器が出土した。

以上の結果をもとに福岡農林事務所・町農政課・町教育委員会等と協議して、1988年度の調査地点は第VI地点とすることとなった。第VI地点の本調査は9月27日～12月24日の間に実施した。

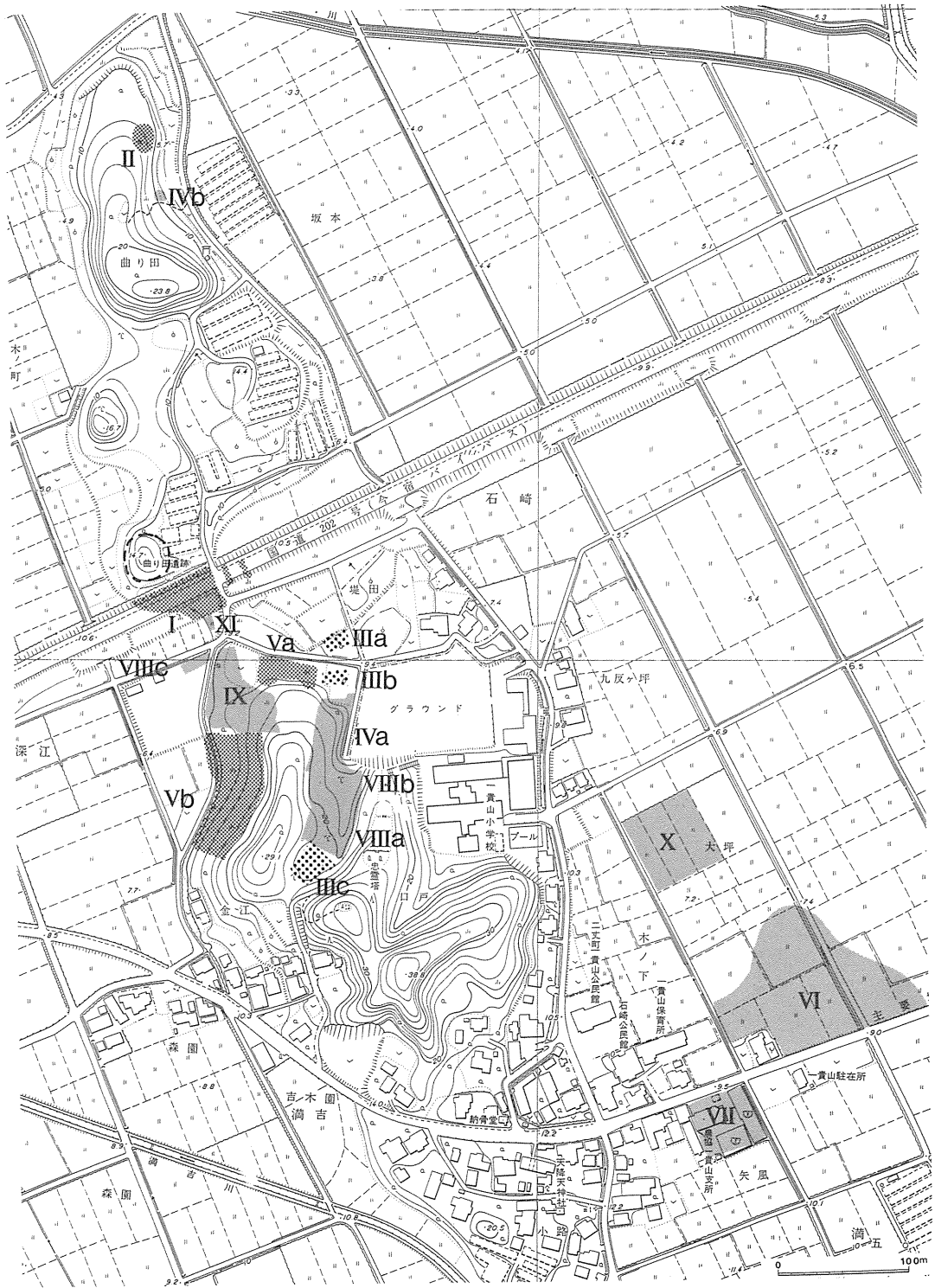
調査組織は下記のとおりである。

総括	二丈町教育委員会	教育長	永田静夫
	〃	教育課長	鬼島利隆
庶務	〃	同和教育係長	宮崎昌之
	〃	社会教育係長	松崎栄三
調査	福岡県教育庁福岡教育事務所 社会教育課	技術主査	橋口達也

なお遺物の整理・復原、遺物実測等にあたり杉原敏之・吉田東明・岩瀬正信・平田春美・原カヨ子・棚町陽子・久富美智子・坂田順子・藤原さとみ・堀之内久美子・関久江・土山真由美氏他多くの方々にお世話になった。記して謝意を表するものである。

第1表 石崎地区遺跡群発掘調査一覧

地点	遺跡名	原因	調査年度	報告書	備考
I	曲り田遺跡	国道202号バイパス 建設	1980	『石崎 曲り田遺跡』 I II III1983~1985	福岡県 教育委員会
II	曲り田遺跡	農協カントリー エレベーター建設	1985	『石崎 曲り田遺跡』 第2次調査 1986	二丈町 教育委員会
III	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1987	『曲り田周辺遺跡』 III 1993	二丈町 教育委員会
IVa	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1988	『曲り田周辺遺跡』 IV 1994	二丈町 教育委員会
IVb	曲り田周辺 遺跡	農協用地拡幅	1988	『曲り田周辺遺跡』 IV 1994	二丈町 教育委員会
V	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1989	『曲り田周辺遺跡』 I II 1991、1992	二丈町 教育委員会
VI	大坪遺跡	県営圃場整備	1988	今回報告	二丈町 教育委員会
VII	矢風遺跡	農協支所改築	1989	未報告	二丈町 教育委員会
VIII	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1990	未報告	二丈町 教育委員会
IX	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1991	未報告	二丈町 教育委員会
X	大坪遺跡	県営圃場整備	1992	『大坪遺跡』 II 1995	二丈町 教育委員会
XI	曲り田周辺 遺跡	町運動公園進入道建設	1993	未報告	二丈町 教育委員会



第 1 図 遺跡付近地形図 1 (縮尺1/5,000)



第 2 図 遺跡付近地形図 2 (縮尺1/5,000)

II. 発掘調査の記録

1. 試掘調査

試掘調査はバックホーを用いて行なった。

Aトレンチは東西に60m弱のもので西端で大きな凹みが検出された。これは後に本調査で検出した旧河川である。他の部分では表土下で板付Ⅱ式土器を主体とする土器、黒耀石、石器等が多く出土し、住居跡・包含層等の存在が確認された。

Bトレンチは南北に約35mのもので南側半分では板付Ⅱ式を主体とする土器と黒耀石、石器等が検出され住居跡・包含層等の存在が確認された。北側半分は1段下るが、これまでの調査状況からかなり低くなるので遺構面の検出は行なわなかった。

Cトレンチは南北に約30mのもので南側3分2程では板付Ⅱ式を主体とする土器と黒耀石、石器等が検出され住居跡・包含層等の存在が確認された。北側3分1程のところから1段下りBトレンチと同様の結果を得た。

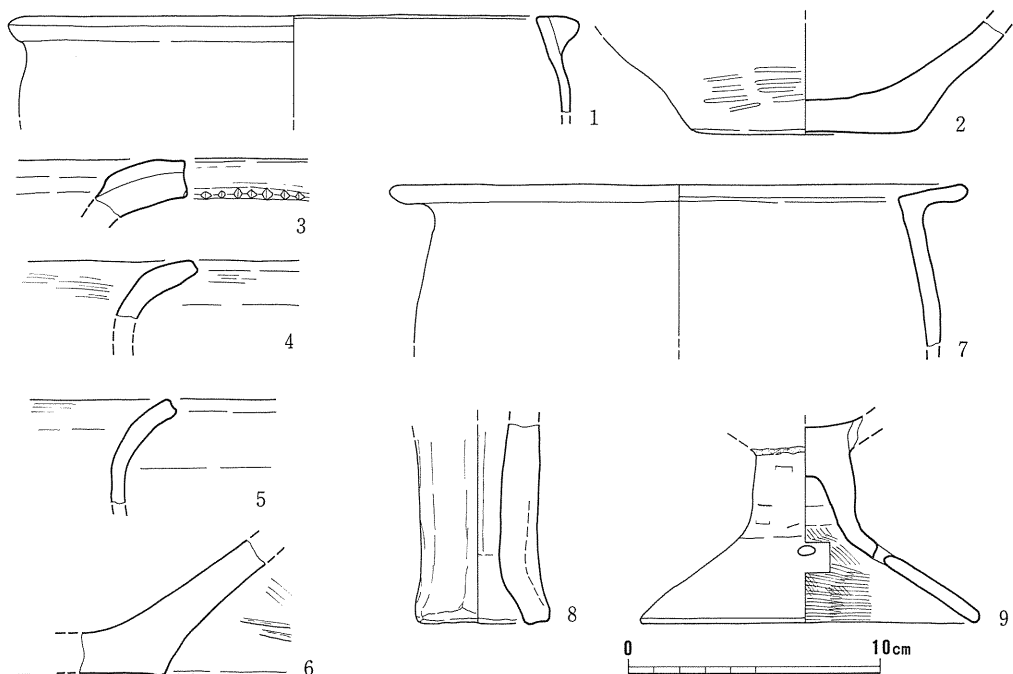
Dトレンチは南北に約45mのもので全体に板付Ⅱ式を主体とし一部夜臼式、中期初頭のものを含む土器、黒耀石、石器等が検出され、住居跡・包含層等の存在が確認された。このトレンチのほぼ中央附近からは第19図7に図示した両側に挟りをいれた無孔の石包丁が出土し注目された。

Eトレンチは東西に約20m程のもので先述したように表土下120cmのところでは杭列、柱根等が検出された。時期判定はできなかったが少くとも弥生・古墳時代には遡らないと考える。表土下300cm程の砂層からは弥生前期～古墳初期頃の土器片が出土し、さらに表土下400cm程まで掘り下げたが基盤には達しなかった。この部分は1992年度の調査ですぐ東側では弥生早～前期の水田跡等が検出されており、これまでの試掘調査等とも合わせ考えると大きく谷状の部分が南北に走っているものと考えられる。

1トレンチは東西100m程のもので西側半分では表土下で夜臼式・板付Ⅰ式等の土器とともに石剣・石斧等の石器が多く出土し、住居跡・包含層等の存在が確認された。東側半分は一段下るが基盤までは掘り下げなかった。

2トレンチは東西100m強のもので西端部分では表土下に夜臼式・板付式土器を包含する層があり遺構の存在が確認された。西から10数mのところでは一段下り、表土下約100cmまで掘り下げた。

3トレンチは南北25m程のもので南端では夜臼式、板付式土器等が出土し遺構の存在が確認されたが、他の部分は急に下っている。



第 3 図 試掘調査の出土土器 (縮尺1/3)

4 トレンチは南北20m程のものでこの部分は一段下ったところであることが確認された。

以上の試掘調査の結果第 2 図に示した部分に遺構が存在するものと判断し、調査対象地区として農政側と協議した。A～D、1～4 トレンチの地区は切盛の調整もはかりながら1988年度の調査対象地区とし、E トレンチの地区は貯水池予定地のため工事前に全面発掘することとなった。

試掘調査の出土土器 (第 3 図)

VI地点においては板付II式土器を主体として一部橋口の分類による晩期VI式、夜臼式、板付I式、中期初頭の土器が出土し、X地点の貯水池予定地からは古墳時代前期の土器を主体として弥生土器等が出土した。いま図化し得た土器について若干の説明を加えたい。

1～6はVI地点 7～9はX地点の出土である。

1は三角口縁を呈する甕で、内外ともに暗灰黄色を呈し、胎土には砂粒・金雲母等を多く含み、焼成は良い。中期初頭に位置づけられる。

2は壺の底部である。復原底径は9.2cm・灰黄色を呈し胎土には砂粒・雲母・赤褐色粒子等を多く含み、焼成は良い。板付II式に位置づけられよう。

3は1 トレンチより出土した口縁片で甕棺のものと考えられる。茶褐色を呈し、胎土には砂粒・

雲母・赤褐色粒子等を含み、焼成は良い。KIa～KIb式に位置づけられる。

4 は 3 トレンチより出土した甕口縁片である。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤褐色粒子を含み、焼成は良い。板付II式に位置づけられる。

5 は 3 トレンチより出土した甕口縁片である。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤褐色粒子等を含み、焼成は良い。板付II式に位置づけられる。

6 は底部片で、復原径は17cm程によることから甕棺の底部と考えられる。黄褐色を呈し、胎土には砂粒、雲母・赤褐色粒子等を含み、焼成は良い。KIa～b式の底部であろう。

7 は甕で復原口径は23cm。暗茶褐色を呈し、胎土には細粒の砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒子等を含み、焼成は良い。中期前半～中頃に位置づけられる。

8 は器台片で、灰黄色を呈し、胎土には細粒の砂粒がやや多く、雲母・角閃石等も含む。焼成は良い。2分1周程の残り、孔径は1.5cm程でやや片方に寄っている。中期に属するものと考えられる。

9 は高坏脚で、復原底径は13.5cmである。内面にはハケ目が残るが、外面はハケ目をナデ消している。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、雲母・角閃石・赤褐色粒子等も含まれる。焼成は良い。古墳時代前期の土師器である。

2. VI地点の調査

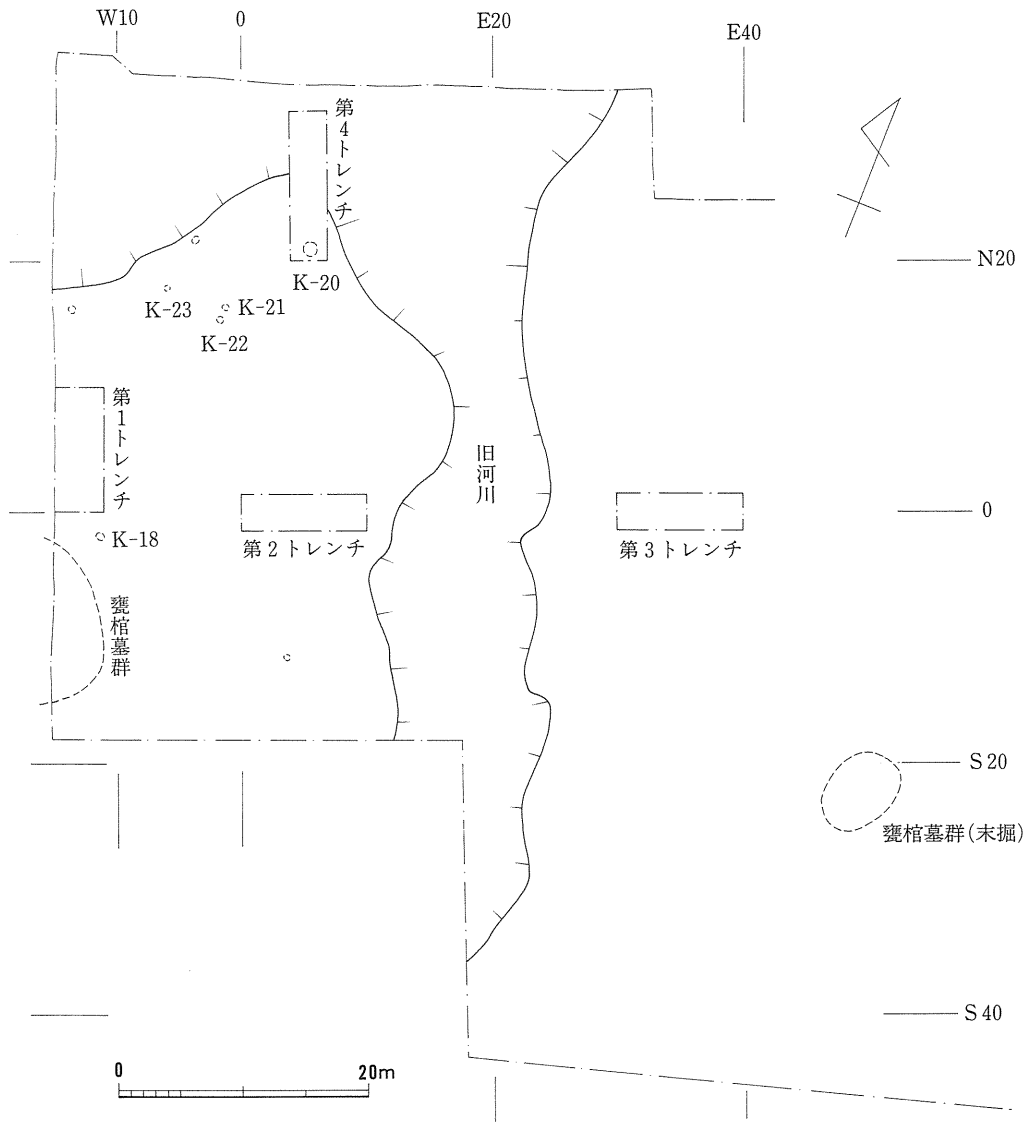
VI地点の東側部分すなわち試掘1～4トレンチを設定した部分は福岡農林事務所・町農地整備課との協議による切盛調整等によって埋蔵文化財に影響を及ぼさないと判断されたので調査区から除外した。

西側3分の2程は全面に表土を剥いで調査を実施することとした。まず表土を除去するとほぼ中央部に南から北へと流れる幅10m前後の旧河川状の水路があり、試掘調査で確認していた段落は、その延長状の段落ちであることが判明した(第4図)。表土下ではすぐに黒色包含層があり、板付II式を主体として一部橋口の分類による縄文晩期VI式、夜白式、板付I式等の土器、それらに伴うとみられる石器群等がみられ、前期の甕棺墓群が何ヶ所かみえていた。全面に発掘すると長期間になるのは必至であり、条件としては稲作開始期の遺跡である石崎曲り田遺跡よりも好条件の地区であり、出土遺構も曲り田と同時期のもの、さらには縄文晩期に遡る遺構の存在も予測されたので、南北方向のトレンチ2本、東西方向のトレンチ2本を設定して遺構の状態を把握することと、とくに西側に集中していた甕棺を調査して取り上げるという最低限の調査で、あとは盛土して保存するという処置を、福岡農林事務所、町農地整備課と協議して行なった。当時の関係者の御努力に感謝するものである。

1) トレンチの調査

a. 第1トレンチの調査 (第5図)

第1トレンチは調査区西端のほぼ中央部に東西幅4m,南北長10mで設定した(第4図)。トレンチ東北隅には黒色包含層下の黄褐色土から掘り込んだ住居跡の一端が検出された。黒色包含層は25cm程の厚さで板付II式土器を主体として一部縄文系の条痕土器片等もみられ、抉入石斧等も出土した。黄褐色土層は15cm弱の厚さで一見地山に見えたが堆積層であった。遺物は皆無



第4図 石崎大坪遺跡トレンチ・遺構配置図 (縮尺1/600)

に近かった。砂層は7～8cm程で遺物は皆無に近かった。青色粘質土層は下まで掘り下げているが、一部下層の砂層が露出しており、下層はまた砂層になるものと思われた。青色粘質土層は無遺物層であった。

b. 第2トレンチの調査 (第6図)

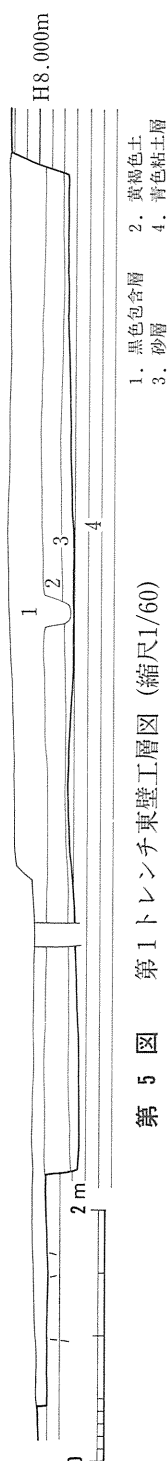
第2トレンチ調査区中央部の旧河川の西側に南北幅3m,東西長10mで設定した(第4図)。黒色包含層を10cm弱掘り下げると西側半分および東北部で住居跡らしきもの、土壙墓らしきもの、柱穴等が検出された。西側半分の住居跡と思われるものは遺構検出面からほぼ15cm程で床面に達し、柱穴等を検出し、これらも完掘した。壁に沿って径10cm前後の柱穴がいくらか検出された点については注目したが、すきまなくならぶということにはなかった。トレンチ北壁に近く柱穴の底に礎板らしき石と根じめ石5個を置く穴と、土壙墓と思われる穴を切る方形の柱穴2個には柱根が残っていたが、時期的にはかなり新しい穴と思われた。完掘した住居跡と思われる遺構から出土した土器は板付I(新)式のものと考えられる。他に第2トレンチの黒色包含層中からは縄文前期の曾畑式らしき土器片等も出土している。

c. 第3トレンチの調査 (第7図)

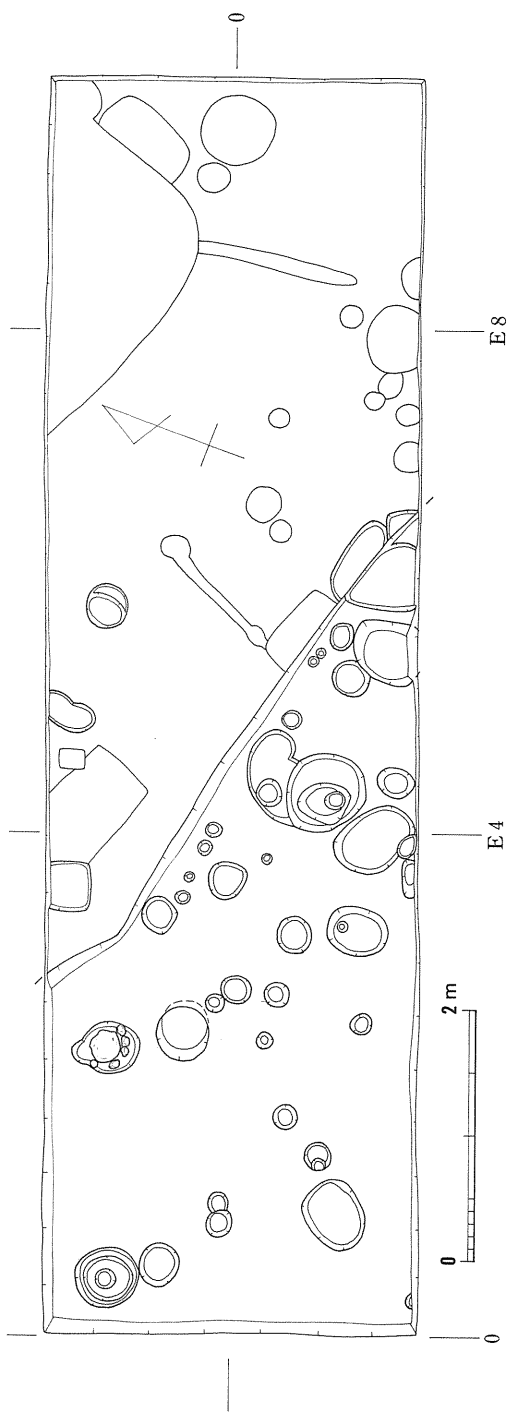
第3トレンチは調査区中央部の旧河川の東側に南北幅3m,東西長10mで設定した(第4図)。黒色包含層を15～20cm程掘り下げると柱穴等の遺構が検出できたが、西南隅の貯蔵穴および東北隅に近い70cm×100cm程の穴は黒色包含層から掘り込んだ穴であった。西南隅の貯蔵穴については完掘した。貯蔵穴は170cm×190cm程のやや隅丸方形を呈し、深さは55cm程のものである。貯蔵穴内からの出土土器は曲り田(新式)、板付II式等を含んでいる。したがってこの貯蔵穴の時期は板付II式のものと考えられる。第3トレンチの黒色包含層からは板付II式を主体として、縄文晩期土器片、曲り田(新)式、板付I式土器等が出土している。他の穴については未掘のままである。

d. 第4トレンチの調査 (第8, 9図)

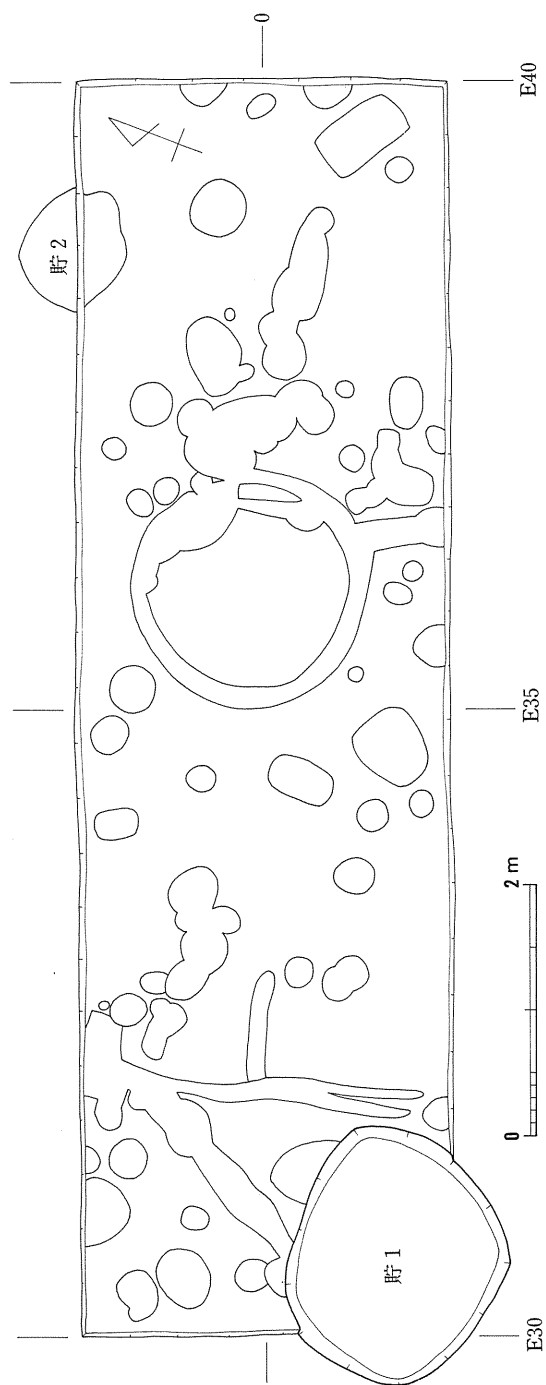
第4トレンチは調査区の北端に近く旧河川が東西に開口する左岸にあたる部分に東西幅3m,南北長12mで設定した(第4図)。トレンチ南端では甕棺1基(20号甕棺)が検出され、トレンチのほぼ中央部では20～25cm程の段落が東西に走り、その段落より100cm程のところ約30cm間隔で径7～8cmの杭を打ち、径10cmの丸



第5図 第1トレンチ東壁工層図(縮尺1/60)



第 6 図 第 2 トレンチ実測図 (縮尺1/60)



第 7 図 第 3 トレンチ実測図 (縮尺1/60)

太を横に置き、幅2～3cm、長さ80～90cm程の板材、杉皮様の樹皮等を用いた遺構を検出した。部分的な検出のため水路なのか、旧河川の護岸なのか判断には苦しむが、さらに西側につづくことは確実である。杭列の北側は砂層となっていたが下までは掘り下げていない。砂層からは弥生前期末頃から中期中頃までの土器が出土したが主体は中期前葉～中頃といってよい。杭列内からは曲り田(新)～板付II式の土器等が出土している。黒色包含層中からは縄文前期曾畑式土器片、後期中頃の土器片等、弥生土器としては曲り田(新)式、板付II式等、他に布留式の甕口縁片、時期不明のつぼもしくは取瓶片等が出土している。

2). 出土遺物

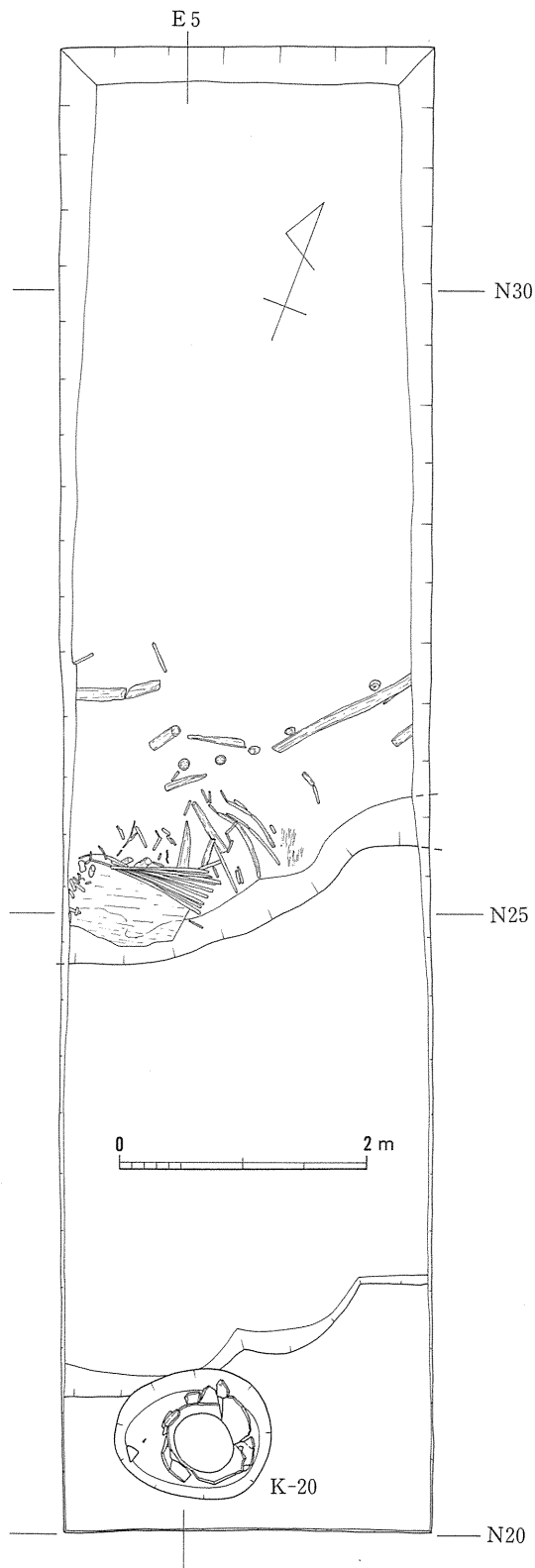
a. 出土土器 (第10～15図)

1～4は旧河川の最上層からの出土である。

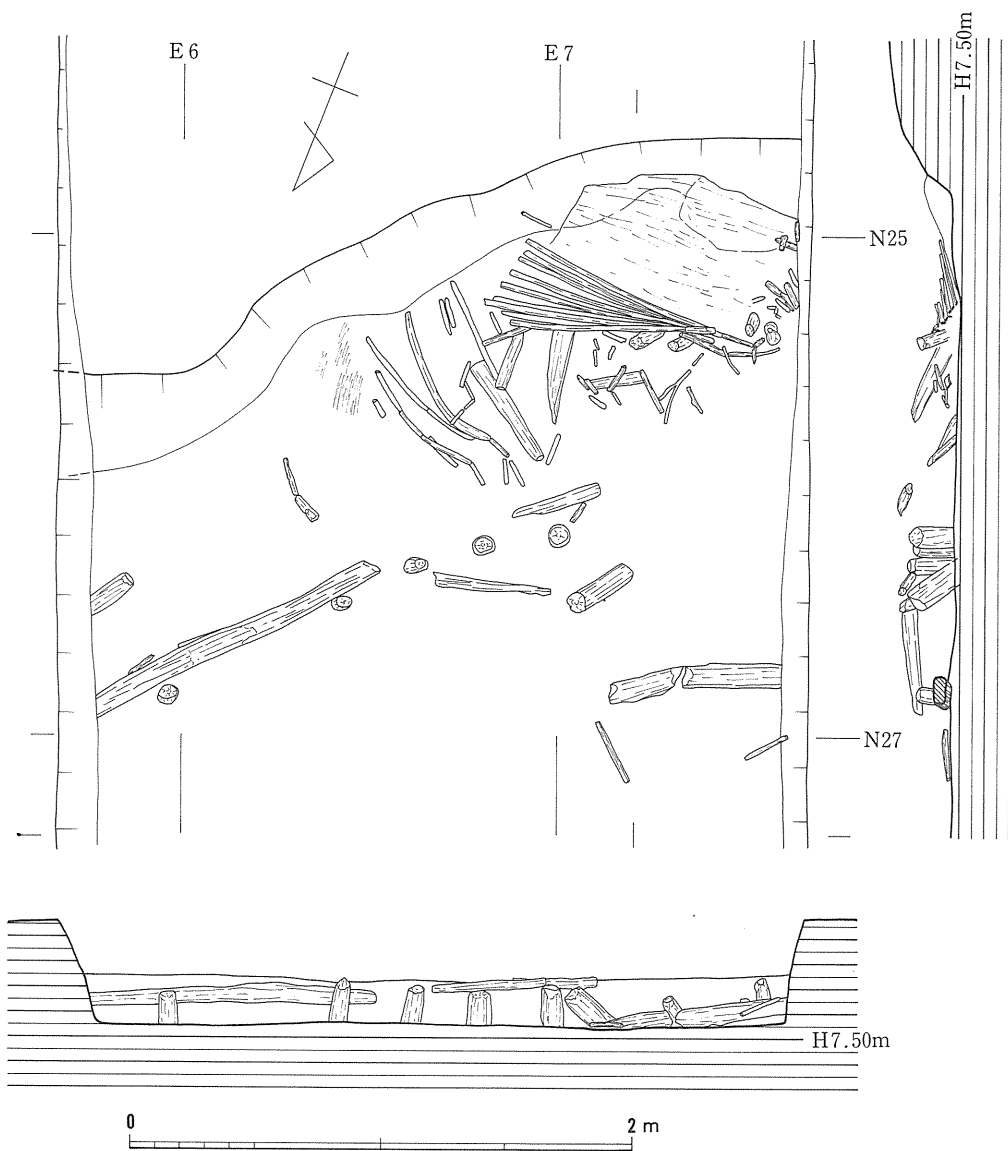
1は土師器甕口縁片で復原口径は16cm。口縁内外はハケ目、内面胴部はケズリを施す。茶褐色を呈し、胎土には石英・雲母・赤褐色粒子等を多量に含み、焼成は良。

2は土師器小形丸底壺片である。復原口径は5.5cm。外面はハケ目の後ナデ、内面および口縁部はナデ。灰黄褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母等を少量含み、焼成は良。

3は土師器高坏脚片である。内外ともにナデ仕上げ。底径は13.0cm。灰黄褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母、角閃石等を含み、焼成は良。



第 8 図 第 4 トレンチ実測図 (縮尺1/60)

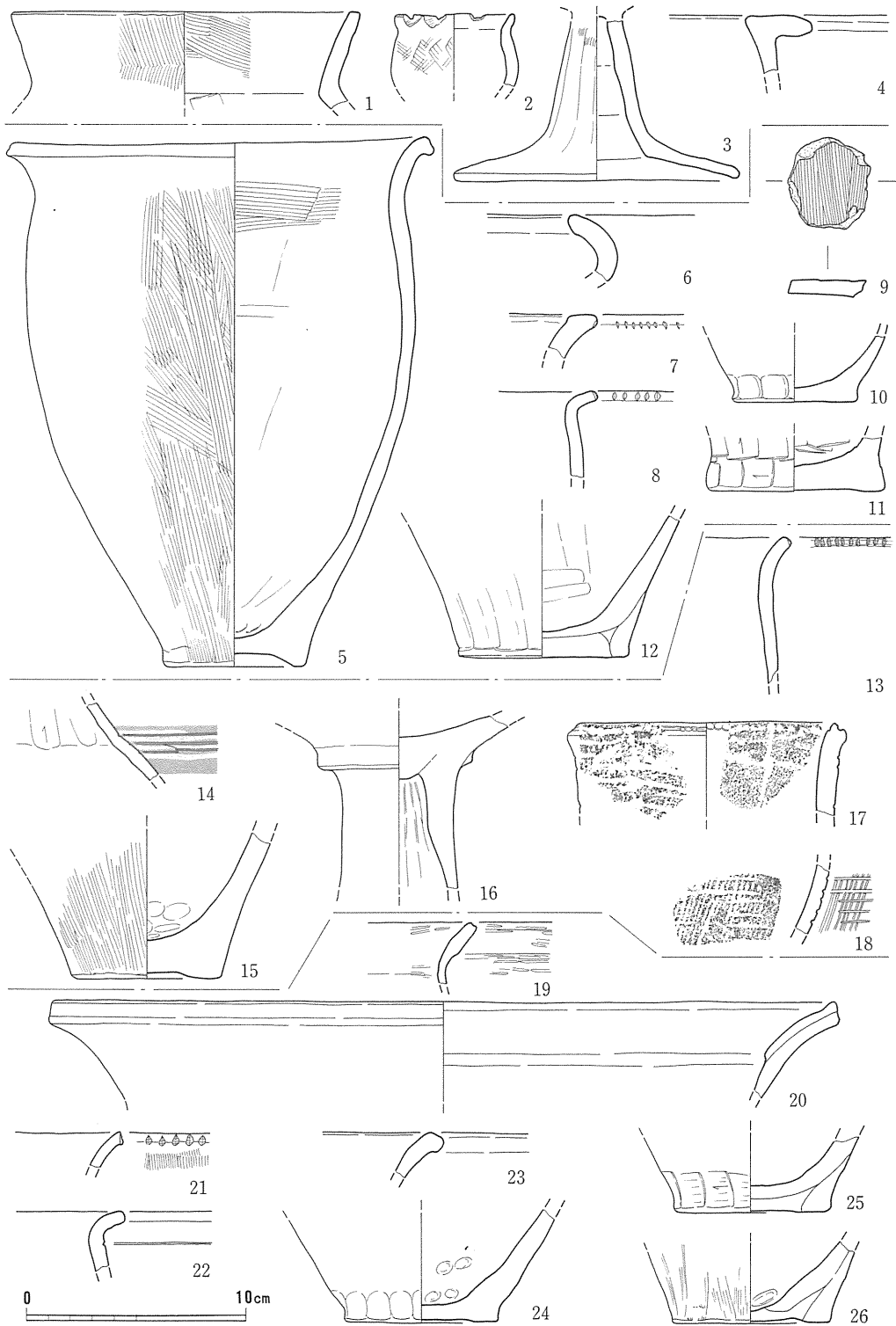


第 9 図 第 4 トレンチ杭列等出土状態実測図 (縮尺1/30)

4 は弥生中期の逆L字状を呈する甕口縁片である。内外ともにヨコナデ。淡橙色を呈し、砂粒、角閃石等を多く含み、焼成は良。

旧河川は未掘なので時期はわからないが図示した土師器の示す 5 世紀前半頃の段階には完全に埋没したことは確実といえる。旧河川としたが自然流路なのか、人工の水路であるのかも確認はしていない。

5 ~12 は第 1 トレンチ黒色包含層中からの出土である。



第 10 图 土器実測図 1 (縮尺1/3)

5は口縁の一部を欠くがほぼ完形に復原できる板付II式の甕である。口径は19.5cm、器高24cm、胴部最大径18.5cm、底径6.5cmである。口縁はいわゆる如意形口縁で、底部は6mm程の上げ底である。口縁内外はヨコナデ、外面はハケ目、内面はハケ目の後ナデを加えて仕上げる。内外ともに灰黄褐色を呈するが内面の2ヶ所には黒斑がある。外面の下半は二次的火熱によって赤褐色に赤変している。胴部上半にはススが付着している。胎土には石英粒少量の他、雲母・角閃石・赤褐色粒子等を含み、焼成は良好。

6は弥生中期後半の袋状口縁壺の口縁片である。灰黄色の地色の上に丹塗りをほどこす。胎土には石英粒・角閃石・雲母等を含み、焼成は良好。

7は板付II式の壺口縁片である。口縁内側には粘土帯を貼付し、口縁下端には刻目をほどこす。灰色もしくは灰黄色を呈し、胎土には石英粒を含み、焼成は良好。

8は板付I(新)式の甕口縁片である。如意形を呈し、口唇部には刻目をほどこす。胴部はややふくらみを持ち、新しい要素といえる。内外ともにヨコナデ調整。内面は暗灰黄色、外面は黒褐色を呈し、胎土には石英、金雲母等を含み、焼成は良好。

9は土器片を利用した円板である。4.2cm×3.5cm、厚さは6～7mm。内面はナデ、外面は細かいハケ目。内面は淡黄色、外面は暗褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。

10は壺底部片で底径5.7cm。内面、外底はナデ、外面は擦過の後ナデを加えている。灰黄色もしくは黒色を呈する部分があり、胎土には砂粒・金雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

11は径8.1cm程の甕の底部でその形態から夜臼式に属するものと考えられる。内底は擦過の後ナデ、外底はナデ、外面は擦過の起点痕がよく残る。胎土には砂粒・金雲母等を含み、焼成は良好。

12は底径7.8cm程の甕の底部である。底部から直に外に開くその形態から板付I式に属するものとする。内底・外底はナデ、外面は擦過の後ナデを加える。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・金雲母、赤褐色粒子等を含み、焼成は良好。

13～16は第2トレンチ1号住居跡から、17、18は黒色包含層からの出土である。

13はいわゆる如意形口縁の甕で、口縁端に刻目を施こすが、刻目がやや繊細となり胴部で張りがみられることから板付I式の範疇ではあるが新しい傾向、すなわち板付I(新)式に属する。内外ともにナデ仕上げ。茶褐色もしくは黒色を呈する部分があり、胎土には細粒の砂を多く含み、雲母・角閃石・赤色粒子等を含む。焼成は良好。

14は壺の頸から肩にかけての小片である。内面はナデ、外面はミガキの後ナデを加えている。外面は肩の部分に細い3条の沈線をめぐらしているが、その部分は黒塗りをベースとし、沈線下には朱で3条の線も施している。内面は黒褐色、外面の地色は茶褐色を呈する。胎土には砂粒・金雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

15は径7cm程の甕の底部である。底から直に外に開く形態は板付I式に属するものと考えられ

る。内底、内底はナデ、外面はハケ目を施す。灰黄色を呈するが一部黒っぽい部分もある。胎土には砂粒が多く、雲母・角閃石、赤色粒子等も含まれる。焼成は良好。

16は高坏の坏・脚部の破片である。坏・脚の境界部には1条の三角凸帯をめぐらす。内面にはしぼり痕が明瞭であるが他の部分は器面風化のため調整法の観察は困難である。内面は黄橙色、外面は二次的火熱によって全体に赤変しており赤褐色を呈する。胎土には砂粒をやや多く含み他に雲母・角閃石・赤色粒子等もみられる。焼成は良好。

13～16からすると第2トレンチ1号住居跡は板付I(新)式に属するものと考えられる。

17は縄文土器で曾畑式に属する。内面の口縁端には爪跡様の刺突文、口縁部には円形刺突文と凹線、外面は格子目文様があり、沈線の間はすり消している。黒褐色を呈し、胎土には細粒の金の雲母・石英等を含み、焼成は軟質で不良。

18も曾畑式で17と同一固体の可能性が強い。内面はナデ、外面は格子目文といてよい。黒褐色を呈し、胎土には細粒の金雲母・石英等を含み、焼成は軟質で不良。

19～28は第3トレンチ1号貯蔵穴からの出土、29～54は黒色包含層からの出土である。

19は壺口縁片である。口縁外側は段を形成している。内外ともにミガキ。暗褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・角閃石等を含み、焼成は良好。器形的にはやや新しい感じがするが、口縁部に段をつくっていることから板付I(新)～板付II(古)式といてよからう。

20は復原口径36cm程の大形壺の口縁片である。口縁内側には粘土帯を貼付して段を形成する。口縁内側に粘土帯を貼付するのは板付II式の大形壺の特徴であるが、その傾斜は強く古い要素を示す。すなわち板付II(古)式に属する。黄褐色を呈するが一部に黒斑が認められる。胎土には砂粒の他、雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

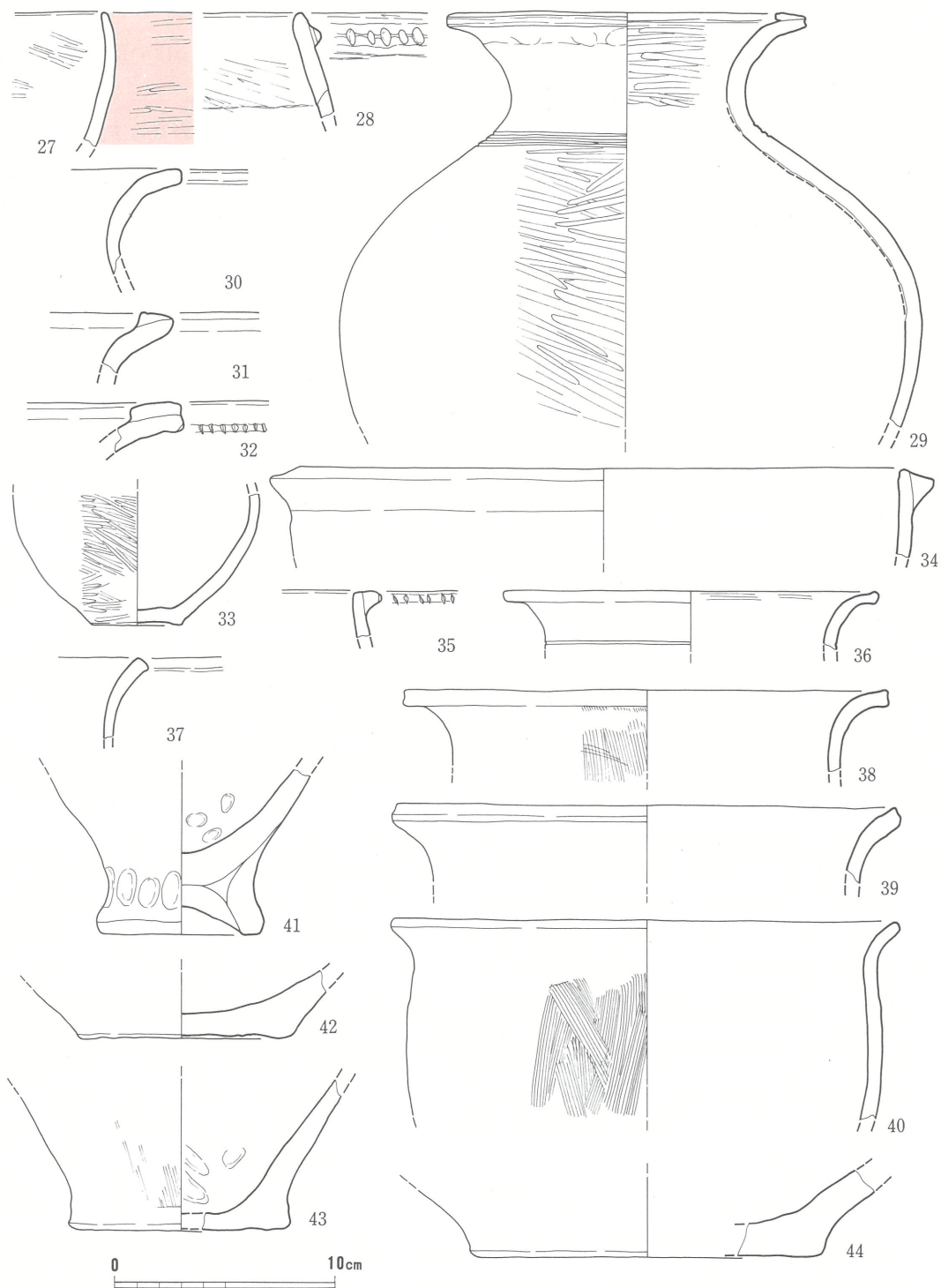
21はいわゆる如意形を呈する甕口縁片である。ハケ目工具によって口縁に刻目を施すが口縁一杯に近いがいわゆる板付I式の典型的刻目と比べるとやや力強さに欠ける。板付I式の新しいところか板付II式の古いところに位置付けられよう。暗褐色を呈し、胎土には砂粒、雲母等を含み、焼成は良好。

22はいわゆる如意形を呈する甕口縁片である。刻目はない。口縁下に細い沈線状のものがはしるが。あるいはヨコナデの際の石の動いた痕跡かもしれない。茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

23は甕もしくは鉢の口縁片と考えられるが小破片のため決め難い。内外ともにヨコナデ。黒褐色を呈し、胎土には細粒の砂・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

24は壺の底部かと思われる。復原底径は6.8cm。内底はナデ、外底は板木口によるカキトリでやや上げ底を呈する。外面はナデ。茶褐色で一部黒色を呈する部分もみられる。胎土には砂粒および雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

25は甕の底部と思われる。復原底径は6.6cm。内底・外底はナデ、底部側面は横方向擦過、外面



第 11 図 土器実測図 2 (縮尺1/3)

はナデ。黄褐色を呈するが外面には部分的にススが付着し、内面には黒色有機物が付着する。胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

26は甕の底部である。復原底径は6.9cm。内底・外底はナデ、外面はハケ目。茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

27は甕の破片で、内外ともにミガキを加え、外面には丹塗りの痕跡が認められる。地色は黄褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を含み、焼成は良好。弥生早期のものと思われる。

28は曲り田(新)式の肩で屈曲し、口縁・肩に刻目凸帯をめぐらす甕の口縁片である。刻目は棒状工具によって施されている。内面は擦過、内面口縁直下および外面はナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

第3トレンチ1号貯蔵穴には27・28等の弥生早期の遺物の混入も一部みられるが全体として板付II(古)式に位置付けられる。

29は口縁内側に粘土帯を貼付する壺である。肩には3条の沈線をめぐらす。胴部内面は器壁の風化いちぢるしく調整法の観察は困難である。頸部内面および外面はミガキを加える。口縁の一部はヨコナデ。灰黄褐色を呈し、胎土には石英・雲母・角閃石・赤色粒子等をやや多く含み、焼成は良好。板付II(中)式に属する。

30は壺の口縁片である。口縁内外はヨコナデ、他は内外ともにナデ。暗灰黄色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

31は口縁上端に粘土帯を貼付する板付II式の壺口縁片である。内外ともにヨコナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み焼成は良好。

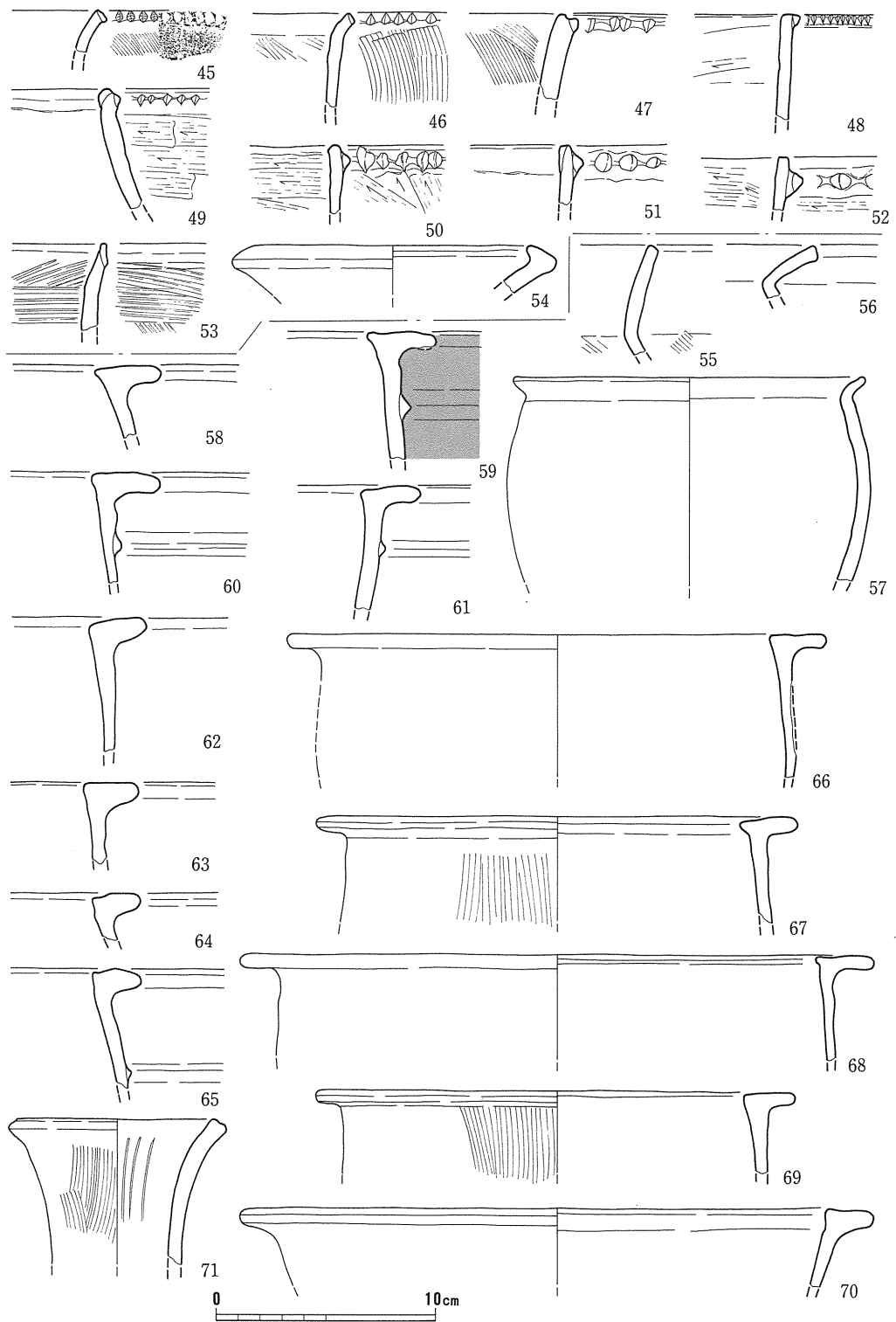
32は口縁上端に粘土帯を貼付し、口唇部下端に刻目を施す板付II式の大形壺口縁片であるが、おそらくKIb式甕棺の破片と思われる。内外ともにヨコナデ。黄白色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子の他黒燿石も混入している。焼成は良好。

33は黒色磨研壺の下半部である。底径は3.9cm。内面および外底はナデ、外面はミガキ。内面は黄褐色、外面は黒褐色ないしは黒色を呈する。胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。夜臼式の壺の可能性が強い。

34は口縁外側に粘土帯を貼付するいわゆる三角口縁の甕である。内外ともにヨコナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を含み、焼成は良好。前期末～中期初頭に位置付けられる。

35は口縁に刻目凸帯をもつ甕の破片である。内外ともにヨコナデ。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を少量含み、焼成は良好。口縁は発達しており、板付II(古)式に属する刻目凸帯文系の甕といえよう。

36は板付II式の甕口縁片で、復原口径は17cm。内面はハケ目の後ナデ、外面はヨコナデ。淡橙



第 12 図 土器実測図 3 (縮尺1/3)

褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母等を含み、焼成は良好。

37は如意形を呈する板付Ⅱ式の甕口縁片である。口縁内外はヨコナデ、他は内外ともにナデ。内面は淡茶褐色、外面は灰黒色を呈し、胎土には細砂粒・雲母等を含み、焼成は良好。

38は如意形を呈する板付Ⅱ式の甕口縁片で、復原口径は22cm。口縁内外はヨコナデ、内面はハケ目の後ナデ、外面はハケ目。暗茶褐色を呈し、胎土には細砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

39は如意形を呈する板付Ⅱ式の甕口縁片で、復原口径は23cm。口縁内外はヨコナデ、他は内外ともにナデ。内面は淡黄褐色、外面は淡茶褐色を呈し、胎土には細砂粒が多く、他に雲母等を含む。焼成は良好。

40は如意形口縁の甕上半部の破片で約 $\frac{1}{3}$ 周程の残りである。復原口径は23cm。口縁内外はヨコナデ、内面はナデ、外面はハケ目。褐色を呈するが外面には全体的にススの付着が認められる。褐色を呈し、胎土には細砂粒やや多量その他雲母・角閃石等を含み、焼成は良好。板付Ⅱ式である。

41は甕底部片で、復原底径は7.1cm。内外ともにナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

42は壺底部片と思われる。復原底径は8.9cm。内底はナデ、外面は風化いちぢるしく調整法不明。淡茶褐色を呈するが外面は二次的火熱を受けて赤変している。胎土には多くの砂粒・赤色粒子を含み、焼成は良好。

43は甕の底部片で、復原底径は10cm。内・外底はナデ、外面はハケ目の後ナデ。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

44は甕棺の底部片で、復原底径は16cm程のものと思われる。内外ともにナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。KI期の甕棺と思われる。

45は如意形を呈する板付Ⅰ式甕の口縁片である。口唇部一坏にハケ目工具による刻目を施す。内面はナデ、外面はハケ目。茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。

46は如意形を呈する板付Ⅰ式甕の口縁片である。口唇部一坏にへらによる刻目を施す。内面はハケ目の後ナデ、外面は粗いハケ目。赤褐色を呈し、胎土には微量の石英・雲母等を含み、焼成は良好。

47はやや外傾する甕の口縁片である。口縁外側にはへらによる刻目を施す。内面はハケ目、口縁端内面はヨコナデ、外面はナデ。暗褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。器形的には板付Ⅰ式に近づいているが、まだ口縁が外反せず、夜臼式の最終末のものと考えてよい。

48は直立し、口縁外側に刻目凸帯を貼付する甕の口縁片である。刻目はへらによって施されている。内面は擦過の後ナデ、外面はナデ。内面から口縁は暗黄褐色を呈するが外面はスス付着

のためまっ黒になっている。砂粒・雲母等を微量に含み、焼成は良好。夜臼式に属する。

49は肩で屈曲する甕の口縁部片である。口縁は端部で外反し、内側には粘土帯を貼付している。また外反した部分にへらによる刻目を施している。外見上は刻目凸帯と同様に感じられる。内面はナデ、口縁部はヨコナデ、外面はミガキ風の擦過。内面は黒褐色、外面は茶褐色を呈し、胎土には細粒の雲母片等をわずかに含み、焼成は良好。夜臼式に属する。

50は直立し、口縁直下に刻目凸帯を貼付する甕の口縁片である。刻目は爪によって力強く施されている。内外ともに擦過。黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。曲り田(新)式に属する。

51は直立し、口縁直下に刻目凸帯を貼付する甕の口縁片である。刻目は爪によって施された力強いものである。内外ともにナデ。内面から凸帯の上部までは黒色、外面は灰黒色を呈する。胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は良好。曲り田(新)式に属する。

52は直立し、口縁直下に刻目凸帯を貼付する甕の口縁片である。刻目は爪によって施された力強いものである。口縁端および凸帯部はナデ、他は内外ともに擦過。淡灰黄色を呈し、胎土には微量の砂粒を含み、焼成は良好。曲り田(新)式に属する。

53はわずかに外反する甕の口縁片である。口縁端には粘土帯を貼付しその接合部が一見凸帯状にみえるが凸帯ではない。口縁端部はナデ、他は内外ともに条痕を施す。暗褐色を呈し、胎土には微量の砂粒、雲母片等を含み、焼成は良好。橋口編年による縄文晩期V～VI期のものと考えられる。

54は外反する頸部と短く内彎する口縁をなし、晩期V式の浅鉢の類かと思われる。内面はナデ、口縁部はミガキ、外面は擦過の後ナデ。黒褐色を呈し、胎土には石英・雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

55～95は第4トレンチからの出土で、そのうち55～76は砂層、77～87は黒色土層、88～95は杭列内からの出土である。

55はく字形を呈する甕口縁片である。口縁内外はヨコナデ、胴部内面はハケ目、胴部外面はハケ目。明茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母等を多めに含み、焼成は良好。弥生終末もしくは古墳時代初頭頃のもののか。

56はく字形を呈する甕口縁片である。内外ともにヨコナデ。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を含み、焼成は良好。後期前半頃のもののか。

57はく字形口縁の甕片で、復原口径は16cm。口縁内外はヨコナデ、他は内外ともにナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒、雲母等をわずかに含み、焼成は良好。口縁部およびその直下にススが部分的に付着する。後期前半に比定できる。

58は逆L字状を呈する甕口縁片である。内外ともにヨコナデ。内面は橙褐色、外面は暗灰黄色を呈し、胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を少量含み、焼成は良好。

59は逆し字を呈する甕口縁片で、口縁下には三角凸帯1条をめぐらす。内面はナデ、口縁内面および外面はヨコナデ。地色は暗黄褐色を呈するが外面には黒塗りが施されている。砂粒多量・雲母等を含み、焼成は良好。

60は逆し字状を呈する甕口縁片で、口縁下には三角凸帯1条をめぐらす。内面はナデ、口縁から凸帯周辺はヨコナデ。内面は灰黄色、外面の地色は茶褐色を呈するが黒塗りの痕跡明瞭。胎土には石英・角閃石を含み、焼成は良好。

61は逆し字状を呈する甕口縁片で、口縁下には三角凸帯1条をめぐらす。内面はナデ、口縁から凸帯周辺はヨコナデ、外面はナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。

62は逆し字状を呈する甕口縁片である。口縁内外はヨコナデ、他は内外ともにナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。

63は逆し字状を呈する甕口縁片である。口縁内外はヨコナデ、他は内外ともにナデ。暗灰黄色を呈し、細砂粒・雲母・赤色粒子等を少量含み、焼成は良好。

64は逆し字状を呈する甕口縁片である。内外ともにヨコナデ。内面は暗灰褐色、外面は淡橙褐色、胎土には細砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

65は逆し字状を呈する甕口縁片で、口縁下4.5cmのところに三角凸帯1条をめぐらしている。口縁内外・凸帯周辺はヨコナデ、内面はナデ。淡橙色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。

66は逆し字状口縁の甕片で、復原口径は24.6cm。内面はナデ、口縁内外はヨコナデ、外面は器面風化のため調整法不明。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。

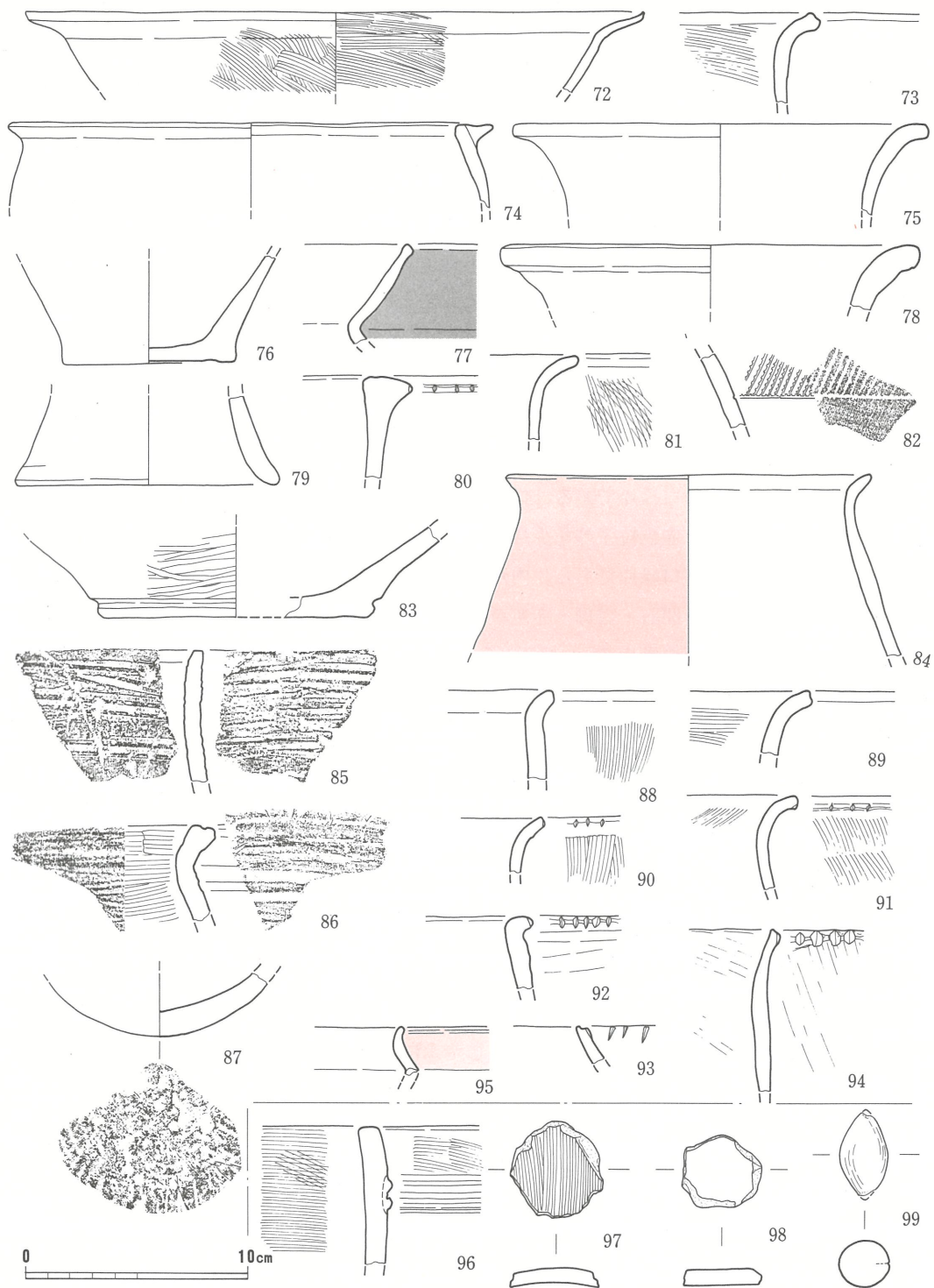
67は逆し字状口縁の甕片で、復原口径は22cm。口縁内側はわずかに突出する。内面はナデ、口縁内外はヨコナデ、外面はハケ目。灰黄色を呈し、胎土には細砂粒・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。口縁下にススの付着が認められる。

68は逆し字状口縁の甕片で、復原口径は29cm。口縁内側はわずかに突出している。口縁内外はヨコナデ、他は内外ともにナデ。灰黄色を呈し胎土には細砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。外面には部分的にススの付着が認められる。

69は逆し字状口縁の甕片で、復原口径は22cm。内面はナデ、口縁内外はヨコナデ、外面はハケ目。灰黄色および淡橙褐色を呈し、胎土には細砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

70は逆し字状口縁の鉢片で、復原口径は29cm。口縁内外はヨコナデ、他は内外ともにナデ。灰黄色を呈し、胎土には細砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を少量含み、焼成は良好。

71は器台片で、復原口径は10cm。内面はへらによる調整の後ナデ、口縁内外はヨコナデ、内面



第 13 图 土器实测图 4 (縮尺1/3)

はハケ目。橙褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

72は鉢の破片で、復原口径は28cm。内面はハケ目、口縁内面はさらにナデを加える。口縁外面はナデ、外面はハケ目。内面は灰黒色、外面は暗灰黄色を呈し、胎土には細砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を少量含み、焼成は良好。

73は如意形口縁の甕片である。内面はハケ目の後ナデ、口縁内外はヨコナデ、外面はハケ目の後ナデ。内面は茶褐色、外面は灰黄色、胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。板付Ⅱ式の甕である。

74は三角口縁の甕で、復原口径は22cm。口縁内外はナデ、他は内外ともにナデ。灰黄色もしくは灰色を呈し、胎土には細砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を多量に含み、焼成は良好。口縁下に部分的にススの付着が認められる。中期初頭頃のものと思われる。

75は如意形口縁の小形甕と思われる。復原口径は19cm。内外ともにナデ。暗茶褐色を呈し、胎土には細砂粒・雲母等を多量に含み、焼成は良好。板付Ⅱ式に属する。

76は甕底部片で、復原底径は7.8cm。内外ともにナデ。内面は暗黄褐色、外面は淡茶褐色、胎土には細砂粒・雲母・赤色粒子等を多く含み焼成は良好。

砂層の土器は一部前期末、後期の土器が含まれているが、大部分は逆L字状口縁を呈する甕で中期前半～中期中頃のもので主体である。

77は土師器甕口縁である。口縁はわずかに内彎ぎみで布留式の特徴を示している。内外ともにヨコナデ。内面は灰黄色、外面は黒塗りの痕跡が認められる。胎土には細砂粒・雲母等を少量含み、焼成は良好。

78はるつぼあるいは取瓶の類の破片と考えられる。復原口径は18.2cm。二次的の火熱を受けて器面が荒れているため調整法は不明。内面は黄褐色、外面は灰褐色を呈し、胎土には石英粒を多く含み、焼成は良好。全体に軽い感じを受ける。時期は不明。

79は器台片である。復原脚径は12cm。内外ともにナデ。灰黄色もしくは茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母等を含み、焼成は良好。

80は三角口縁を呈する甕口縁片である。口縁外側にはヘラによる刻目が施されている。内外ともにヨコナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・赤色粒子等を含み、焼成は良好。前期末に属する。

81は如意形口縁の甕口縁片である。内面および口縁部はヨコナデ、外面はハケ目。灰黄色を呈し、胎土には石英・角閃石・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。板付Ⅱ式に属する。

82は板付Ⅱ式の壺肩部片である。肩部には貝描きの有軸羽状文を施文している。内面はナデ、外面はミガキ。淡灰黄色を呈し、胎土には砂粒も少量含み、焼成は良好。

83はKIa～KIb式の甕棺底部片である。復原底径は12.6cm。内底・外底はナデ、外面はミガキ。内面は灰黄色、外面は暗灰黄色を呈し、胎土には細砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良

好。

84は曲り田(新)式の丹塗磨研壺口縁片で、復原口径は16.5cm。内面はナデ、口縁内面から外面はミガキ。内面は黒褐色、外面の地色は淡黄色、丹は暗赤色を呈する。胎土には石英粒等をやや多めに含み、焼成は良好。

85は縄文後・晩期の深鉢口縁片である。内外ともに条痕を施こすが、口縁内面直下および口縁端は板木口によるカキトリ。明茶色を呈し、胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好。

86は縄文後期中頃の深鉢口縁片である。内面は条痕と思われる。口縁端のまん中は沈線状を呈する。外面口縁下は板木口による擦過と思われる。肩の部分は条痕もしくは板木口による条痕風の擦過と思われる。茶褐色を呈し、胎土には石英・雲母等を少量含み、焼成は良好。

87は曾畑式土器の底部片である。内面はナデ、外面には曾畑式特有の幾何学文があるが全体の文様構成は不明。内面は黒褐色、外面は黒色で二次的火熱を受けている。胎土には細粒の砂を多く含み、焼成は軟質にして不良。

以上黒色包含層は板付Ⅱ式を主体として縄文前期・後・晩期、弥生早期、古墳時代初期の遺物を包含している。

88は如意形口縁の甕口縁片である。内面から口縁直下まではヨコナデ、外面はハケ目。内面は灰黄色、外面は褐色を呈し、胎土には砂粒・角閃石・雲母等をやや多く含み、焼成は良好。板付Ⅱ式に属する。

89は如意形口縁の甕口縁片である。内面はハケ目、口縁内外はヨコナデ。内面は黒色、外面は黒色もしくは暗灰黄色を呈し、胎土には石英・雲母・角閃石等をやや多く含み、焼成は良好。板付Ⅱ式に属する。

90は如意形口縁の甕口縁片で、口唇部下端にはへらによる小さな刻目を施している。内面から口縁直下まではヨコナデ、外面はハケ目。内面は灰黄色、外面は褐色を呈し、胎土には石英・雲母・角閃石等をやや多く含み、焼成は良好。板付Ⅱ式に属する。

91は如意形口縁の甕口縁で、口唇部下端にはへらによる小さな刻目を施している。内面はナデ、口縁直下にはハケ目が残る。口縁内外はヨコナデ、外面はハケ目。内面は黒色、外面は暗茶褐色もしくは黒色を呈する部分あり。胎土には石英・角閃石・雲母等をやや多く含み、焼成は良好。板付Ⅱ式に属する。

92は口縁に刻目凸帯をめぐらす甕口縁片である。刻目はへらによって施されている。内面から口縁にかけてはヨコナデ、外面はナデ風の擦過。灰黄色を呈し、胎土には石英・角閃石等の細粒をわずかに含み、焼成は良好。夜臼式に属するものと思われる。

93は肩で屈曲し、口縁にはへらによる刻目を施こす夜臼式の甕口縁片である。内外ともにナデ。内面は灰褐色、外面は黒色を呈し、胎土には石英・雲母等を微量に含み、焼成は良好。

94は直立する甕の口縁外側に爪による力強い刻目を施した曲り田(新)式の甕口縁片である。口

縁はわずかに外反し、如意形に近い形態を示す。内外ともに擦過の後ナデ。内面は暗茶褐色、外面は淡褐色を呈し、胎土には石英・雲母・角閃石等の細粒をやや多く含み、焼成は良好。

95は夜臼式の浅鉢口縁片である。内外ともにミガキ。内面は暗褐色、内面は丹塗りを施す。胎土には石英・雲母等を微量に含み、焼成は良好。

以上、杭列内の出土土器は早期～板付Ⅱ式に属するもので、あるいは杭列のできた時期も弥生早～前期の可能性もある。

96は中世の火舎口縁片である。口縁下に2条の凸帯をめぐらす。内面はハケ目、口縁端はナデ、口縁下はハケ目、凸帯より下はナデ。黒灰色を呈し、胎土には砂粒・雲母を若干含み、焼成は良好。

97は土器片利円の円板である。内面はナデ、外面はハケ目。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好。時期不明。

98は土器片利用の円板である。内面はナデ、外面はミガキであり壺片と思われる。黄白色を呈し、胎土には細粒の砂を微量に含み、焼成は良好。時期不明。

99は土製投弾である。残存長3.8cm、復原長4.0cm、径は2.2～2.3cm、重量13.8g。断面には粘土板をまるめて重ねた痕跡が認められる。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好。時期は不明。

100はるつぼの類の口縁片で、復原口径は25cm程のものである。器壁は1.5cm程で分厚い。全体に二次的の火熱を受けて変色しているが、内面は灰褐色、外面は灰褐色および黄褐色の部分がある。胎土には石英粒を多く含み、焼成は良いが、全体に軽い感じを受ける。時期は不明。

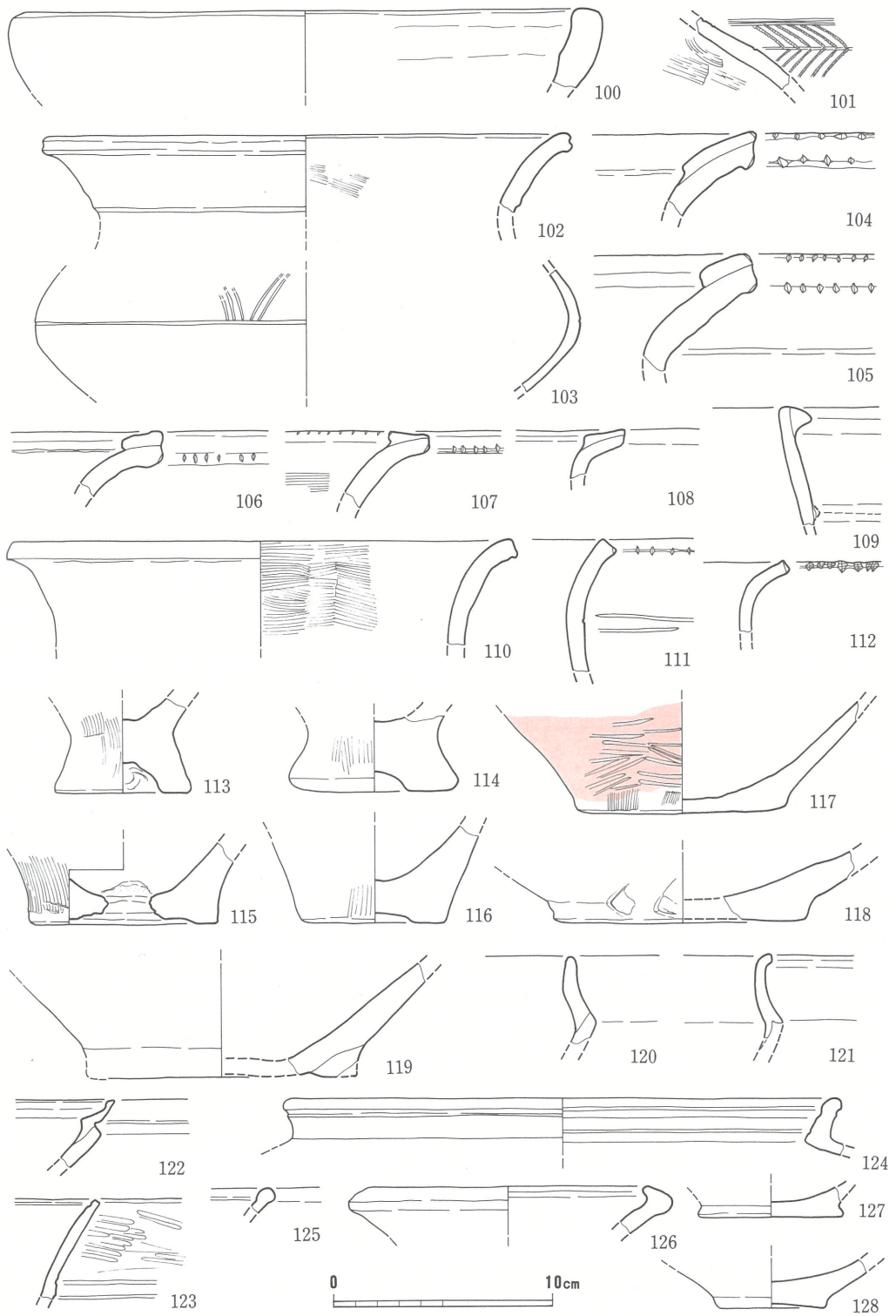
101は板付Ⅱ式壺の肩部片である。肩部には貝描きの有軸羽状文を施す。内面はナデ風の擦過、外面はミガキ。明茶色を呈し、胎土には石英等を微量に含み、焼成は良好。

102は壺口縁片で、復原口径は23.4cm。内面はナデ、外面はミガキ。黄褐色を呈するが、外面の一部には淡赤橙色の丹塗りの痕跡が認められる。胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。口縁下に段をつくり古い要素を示すが板付Ⅰ(新)～板付Ⅱ(古)式に位置づけられる。

103は壺胴部片で、復原胴部最大径は25cm。胴部中央に沈線1条と重弧文を施す。内面はナデ、外面もナデ仕上げ。内面は黄茶色、外面は灰黄色を呈する。胴部中央には黒斑がある。胎土には石英・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。重弧文からいえば板付Ⅰ式に位置づけられる。

104はKIa～KIb式の甕棺口縁片である。口縁内側には粘土帯を貼付し、口縁端の上下にはへらによる刻目を施す。内面はナデ、口縁外側はヨコナデ、外面はナデ。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

105は口縁下にわずかに段の痕跡を残すことからKIa式の甕棺片と思われる。口縁内側には粘土帯を貼付し、口縁端の上下にはへらによる刻目を施す。内外ともにナデ。淡黄褐色を呈し、



第 14 图 土器実測図 5 (縮尺1/3)

胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

106はKIa～KIb式の甕棺口縁片である。口縁端には粘土帯を貼付し、口縁外側の下端にはへらによる刻目を施す。内外ともにナデ、口縁内外はヨコナデ。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒・角閃石・雲母等を含み、焼成は良好。

107は大形甕もしくはやや小さ目の甕棺口縁片である。口縁上端に粘土帯を貼付し、口縁内側および口縁外側の下端にへらによる刻目を施している。内面はハケ目、外面はナデ、口縁内外はヨコナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。板付II式、甕棺であればKIb式かと思われる。

108は壺口縁片である。口縁上端には粘土帯を貼付する。内外ともにナデ。口縁には淡赤橙色の丹塗りもしくは化粧土の痕跡が残る。黄白色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。板付II式に属する。

109は三角口縁の甕口縁片である。口縁下には三角凸帯をめぐらす。調整法は器面風化のため不明。暗黄褐色もしくは黒色を呈する部分があり、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。中期初頭に位置付けられる。

110は如意形口縁の甕口縁片で、復原口径は23cm。内面はハケ目、外面はナデ。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。板付II式に属する。

111は如意形口縁の甕口縁片である。口縁下端にはへらによる刻目、口縁下には2条の沈線を施す。内外ともにナデ。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。板付II式に属する。

112は如意形口縁の甕口縁片である。口唇部一坏にハケ目工具による刻目を施す。口縁内外はヨコナデ、内面は横ハケの後ナデ、外面はナデ。橙褐色もしくは黒色を呈する部分があり、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。板付I式に属する。

113は甕底部片で、底径は5.7cm。1.4cm程の上げ底を呈する。内底はナデ、外底には指紋・爪跡等が残る。外面はハケ目の後ナデ。内面は黒色、外面は黄褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。前期末～中期初頭頃に位置付けられる。

114は甕底部片で、底径は7.8cm。9mm程の上げ底を呈する。内底・外底はナデ、外面はハケ目。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。前期末～中期初頭に位置付けられる。

115は甕底部に穿孔を施し甌として使用したものの底部片である。底径は8.3cm。3mm程の上げ底を呈する。孔径は2cm程のものである。内底・外底はナデ、外面はハケ目。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

116は甕底部片で、底径は6.5cm、4mm程の上げ底を呈する。内底・外底はナデ、外面はハケ目。橙褐色を呈するが、外面は二次的火熱を受けて赤変している。胎土には細粒の砂・雲母・赤色

粒子等を多量に含み、焼成は良好。

117は大形壺の底部片で、底径は9.6cm。内底・外底はナデ、外面はハケ目の後ミガキを加えている。内面は黄白色、外面には丹塗りを施している。胎土には細粒の砂・角閃石・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。前期のものと思われる。

118は、前期の大形壺もしくはKI期の甕棺底部片である。復原底径は11.7cm。内底はナデ、外面はナデかと思われる。内面は灰黄色、外面は茶褐色を呈し、焼成は良好。

119は前期の大鉢かと思われる。復原底径は12.4cm。内外ともにミガキ。内面は黒褐色、外面は灰黒色を呈し、胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良好。

120は夜臼式の浅鉢口縁片である。内外ともにミガキ。内面は黒褐色、外面は黒色を呈し、胎土には細粒の砂をわずかに含み、焼成は良好。

121は夜臼式の浅鉢口縁片である。内外ともにミガキ。内面は黒色、外面は暗褐色を呈し、胎土には雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

122は、橋口の分類による縄文晩期VI式の浅鉢の口縁片である。肩でくの字に屈曲し、口縁端でも屈曲している。内外ともにミガキ。内面および坏部の一部は黒褐色、他は灰黒色を呈する。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好。

123は晩期VI式の精製深鉢かと思われる口縁片である。内面はミガキ風の擦過、外面は擦過。内面は黄褐色、外面は灰黒色および黄褐色を呈する部分がある。胎土には砂粒・雲母等を少量含み、焼成は良好

124は2号甕棺墓墓壇内埋土中から出土したものでいわゆる黒川式(橋口の分類による晩期VI式)の浅鉢口縁片である。復原口径は25.6cm。内外ともにミガキ。口縁端は茶褐色を呈するが、他は内外ともに黒色を呈する。細粒の雲母片等を含み、焼成は良好。

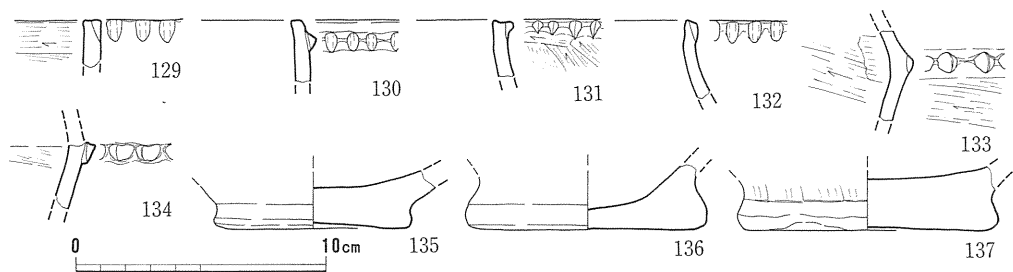
125は晩期V式の浅鉢の口縁の小破片である。内外ともにミガキ。灰褐色を呈し、胎土には細粒の雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

126は晩期V式の浅鉢口縁片である。口径は12.6cm。内面はナデ、口縁内外はミガキ、外面は擦過の後ナデ。黒褐色～黒色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好。

127は夜臼式の浅鉢底部で、底径は6.8cm。内外ともにミガキ。淡黒色を呈し、胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好。

128は夜臼式もしくは板付I式の浅鉢底部片で底径は5cm。内面、外底はミガキ、外面は風化のため調整法不明。内面は黒褐色、外面は暗茶褐色を呈し、胎土には細粒の砂を含み、焼成は良好。

129は直立して口縁外側に刻目を施す曲り田(新)式の甕口縁片である。刻目は棒状工具による力強いものである。内面、口縁端は擦過、外面はナデかと思われる。茶褐色を呈し、胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良好。



第 15 図 土器実測図 6 (縮尺1/3)

130は直立し、口縁直下に刻目凸帯を施こす曲り田(新)式の甕口縁片である。刻目は棒状工具による力強いものである。口縁から凸帯にかけてはヨコナデ、他は内外ともにヨコナデ。内面は黒色、外面は黒色～黒褐色を呈し、胎土には細粒の砂・雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

131は肩で屈曲し、口縁外側・肩に刻目を施こす甕の口縁片である。刻目はへらによる力強いものであり、曲り田(新)式に位置付けられる。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はナデ風の擦過。内面は茶褐色、外面は暗褐色を呈し、胎土には石英・雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

132は肩で屈曲し、口縁・肩部に刻目を施こす曲り田(新)式の甕の口縁片である。刻目は棒状工具による力強いものである。内外ともにナデ。内面は褐色、外面は黒色を呈し、胎土には細粒の雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

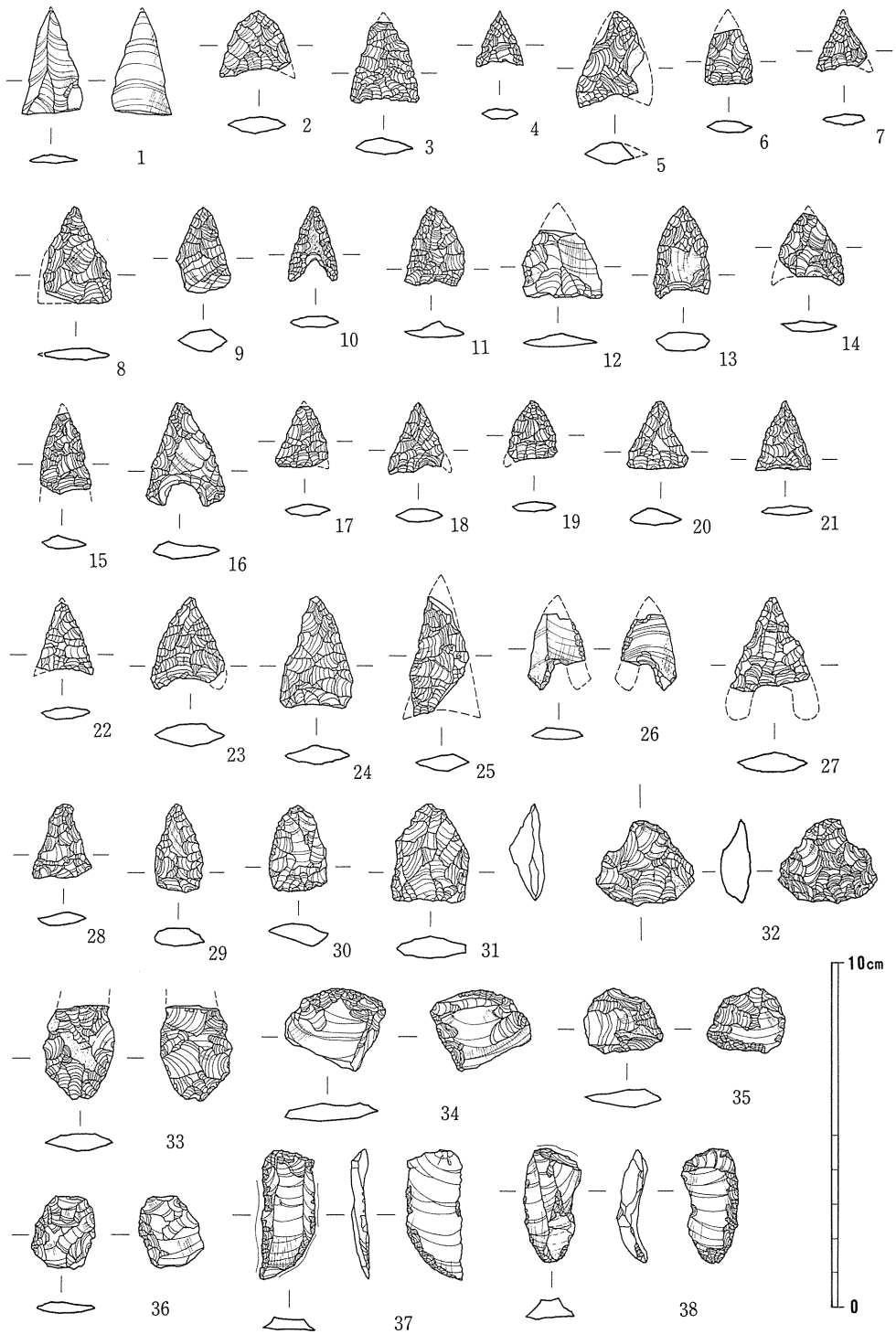
133は肩で屈曲する甕片で、肩には爪による力強い刻目を施こしている。曲り田(新)式に位置付けられる。内面は擦過、頸部外面はナデ、胴部外面は擦過。内面は黒色、頸部外面は茶色、胴部外面は褐色を呈する。刻目まではススの付着によって上記の色調のちがいがああるものと考えられる。胎土には石英・雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

134は肩で屈曲する甕で、肩部には刻目凸帯を施こす。刻目は爪による力強いもので、曲り田(新)式に位置付けられる。内面は擦過、外面はナデ。内面は茶褐色、外面は黒色を呈し、胎土には石英・雲母等をわずかに含み、焼成は良好。

135は壺底部片で底径は7.8cm。内底はナデ、外底は板木口によるカキトリで2mm程上げ底を呈する。外面はナデ。内面は暗褐色、外面は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。夜臼式に属すると思われる。

136は壺底部片で、底径は89.6cm。内底はナデ、外底には木葉痕らしきものがある。外面はナデ。淡黄褐色を呈し、胎土には細粒の砂を少量含み、焼成は良好。弥生早期に位置付けられる。

137は壺底部片で、底径は10.5cm。内面は擦過の後ナデ、外底はナデ、外面は擦過。内面は茶色、外面は明茶色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。弥生早期に位置付けられる。



第 16 图 打製石器実測图 1 (縮尺1/2)

b. 出土石器 (第16図～第22図)

打製石器 (第16図～第18図)

1は第2トレンチ1号住居跡から出土した黒耀石製剥片鏃である。長さ3.0cm, 幅は1.8cm, 厚さは2.3mm, 重量は0.75g。

2は第2トレンチ1号住居跡出土の黒耀石製鏃である。長さは1.9cm, 現存幅は2.0cm, 復原幅は2.2cm, 重量は1.2g。

3は第2トレンチ1号住居跡出土の黒耀石製鏃である。全体に黒色を呈するがわずかに白色粒子を混じている。残存長は2.4cm, 幅は2.0cm, 厚さは4.7mm, 重量は1.6g。

4は第1トレンチ黒色包含層出土の黒耀石製鏃である。長さは1.6cm, 幅は1.4cm, 厚さは2.9mm, 重量は0.35g。

5は第1トレンチ黒色包含層から出土した黒耀石製鏃である。わずかに白色粒子を混じている。長さ2.8cm, 復原幅2.2cm, 厚さ6.2mm, 重量は2.05g。

6は第1トレンチ黒色包含層から出土した黒耀石製鏃である。先端を欠き, 現存長は1.6cm, 幅は1.4cm, 厚さは3.3mm, 重量は0.75g。

7は第2トレンチ黒色包含層から出土した黒耀石製鏃である。白色粒子1個を含んでいる。現存長は1.6cm, 復原長は1.8cm, 厚さは3.7mm, 重量は0.5g。

8は第2トレンチ黒色包含層から出土した黒耀石製鏃である。長さは2.8cm, 復原幅は2.2cm, 厚さは3.8mm, 重量は1.85g。

9は第2トレンチ黒色包含層から出土した黒耀石製の鏃と思われる。基部をのぞく両側は使用によるつぶれた痕跡が認められ, スクレーパー的な使い方もされたものかと考えられる。長さは2.5cm, 復原幅は1.6cm, 厚さは6.4mm, 重量は2.1g。

10は第4トレンチ杭列周辺から出土した黒耀石製鏃である。基部の抉りが大きい。長さは2.2cm, 幅は1.45cm, 厚さ3mm, 重量は0.5g。

11は第4トレンチ杭列周辺から出土した黒耀石製鏃である。長さは2.3cm, 幅は1.7cm, 厚さは5mm, 重量は1.95g。

12は第4トレンチ杭列周辺から出土した黒耀石製鏃である。先端を欠いており, 現存長は2.0cm, 幅は2.3cm, 厚さは4mm, 重量は1.4g。

13は第4トレンチ杭列周辺から出土した黒耀石製鏃である。長さは2.7cm, 幅は1.6cm, 厚さは5.4mm, 重量は2.25g。

14は第4トレンチ黒色包含層から出土した黒耀石製鏃である。わずかに先端を欠き現存長は2.1cm, 復原長は2.3cm, 復原幅は2.1cm, 厚さは3mm, 重量は0.8g。

15は第4トレンチ黒色包含層から出土した黒耀石製鏃である。先端・基部の両側を欠失してお

り、現存長は2.4cm、幅は1.5cm、厚さは4mm、重量は0.95g。

16は2号甕棺内埋土から出土した黒燐石製鏃である。基部の抉りは大きい。長さは3cm、幅は2.25cm、厚さは5mm、重量は2.55g。形態的には古いもので甕棺内の副葬品ではないと思う。

17は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。先端・基部の両端をわずかに欠いている。現存長1.75cm、現存幅1.6cm、厚さ3.4mm、重量は0.65g。

18は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。長さは2.1cm、復原幅は1.6cm、厚さは3.8mm、重量は0.75g。

19は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。基部の両端を欠くが、一端には折れたあとと調整した痕跡がある。現存長は1.8cm、現存幅は1.5cm、厚さは2.7mm、重量は0.55g。

20は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。長さは2.0cm、幅は1.8cm、厚さは5.0mm、重量は0.95g。

21は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。全体としては黒色透明であるが一部灰白色透明な腰岳産黒燐石である。長さは2.0cm、幅は1.6cm、厚さは2.4mm、重量は0.6g。

22は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。先端と基部の一端をわずかに欠く。現存長は2.0cm、現存幅は1.75cm、厚さは3.8mm、重量は0.85g。

23は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。基部の一端を欠く。長さは2.7cm、復原幅は2.2cm、厚さは6.5mm、重量は2.2g。

24は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。長さは3.2cm、幅は2.1cm、厚さは5.5mm、重量は3.1g。

25は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。先端・基部の両端を欠く。現存長3.5cm、現存幅1.7cm、厚さは4.8mm、重量は2.3g。白色粒子を含む。

26は黒色包含層から出土した黒燐石製剥片鏃である。先端・基部の一端を欠く。基部の抉りは大きい。現存長は2.2cm、現存幅は1.6cm、厚さは3.1mm、重量は0.55g。

27は黒色包含層から出土した黒燐石製の大型鏃で、基部の両端を欠く。基部の抉りはかなり大きいものと考えられる。現存長2.8cm、現存幅2.4cm、厚さ6mm、重量は2.15g。

28は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。長さは2.15cm、幅は1.8cm、厚さは4mm、重量は0.95g。

29は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。長さは2.6cm、幅1.4cm、厚さは5.5mm、重量は1.9g。

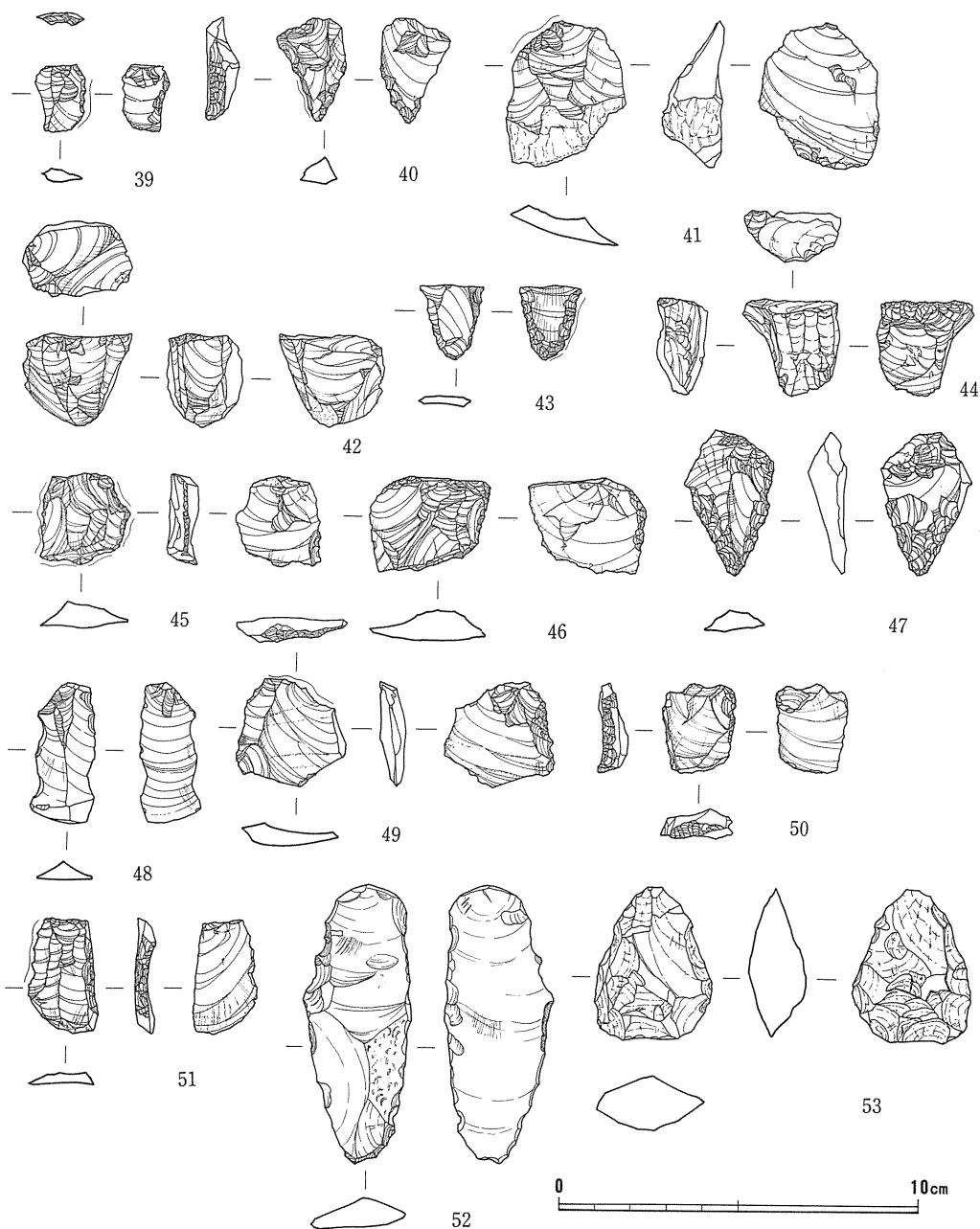
30は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。長さ2.45cm、幅1.7cm、厚さ5.5mm、重量は1.95g。

31は黒色包含層から出土した黒燐石製鏃である。長さは2.8cm、幅は2.2cm、厚さ6.5mm程であるが、最も厚い部分は9.5mm、重量は4.05g。

- 32は第1トレンチ黒色包含層から出土した黒燐石製のスクレーパーである。2.5×2.9cm, 厚さは8.5mm, 重量は4.75g。
- 33は第1トレンチ黒色包含層から出土した黒燐石のスレーパーもしくは尖頭器の基部かとも思われる。一端を欠き, 現存長は2.75cm, 幅は2.1cm, 厚さ最大6.3mm, 重量は3.9g。
- 34は第4トレンチ黒色包含層から出土した黒燐石製のスクレーパーである。2.4×2.9cm, 厚さは5mm。
- 35は第4トレンチ黒色包含層から出土した黒燐石製のスクレーパーである。1.9×2.3cm, 厚さは5.5mm。
- 36は黒色包含層から出土した黒燐石製のスクレーパーである。2.1×1.8cm, 厚さは3mm。
- 37は黒色包含層から出土した黒燐石製の使用痕のある剥片で, スクレーパーとして使用されたものであろう。長さ3.75cm, 幅1.6cm, 厚さ5mm。
- 38は黒色包含層から出土した黒燐石製の使用痕ある剥片で不定形のスクレーパーとして使用されたものであろう。長さ3.25cm, 幅1.65cm, 厚さ0.85g。
- 39は第2トレンチ1号住居跡から出土した黒燐石製の使用痕のある剥片である。長さ1.8cm, 幅1.3cm, 厚さは0.45mm。
- 40は第2トレンチ1号住居跡から出土した黒燐石製のスクレーパーかドリルかと思われる。長さは2.85cm, 幅は1.95cm, 厚さは9.5mm。
- 41は第2トレンチ1号住居跡出土の黒燐石製の使用痕のある剥片でスクレーパーとして用いられたものと思われる。長さ4.05cm, 幅3.25cm, 厚さ17.0mm。
- 42は第2トレンチ1号住居跡から出土した黒燐石の石核である。2.50×2.90cm, 厚さは2.08cm。
- 43は第2トレンチ黒色包含層から出土した黒燐石製の不定形のスクレーパーである。長さ2.05cm, 幅1.75cm, 厚さ4.5mm。
- 44は第2トレンチ黒色包含層から出土した黒燐石の石核である。縦長剥片をとったものと思われるが, この剥離面はかなり風化しており古い石核を再度用いたものかとも思われる。長さ2.65cm, 幅2.25cm, 厚さ1.45cm。
- 45は第4トレンチ砂層から出土した黒燐石製の使用痕のある剥片でスクレーパーとして用いられたものと思われる。長さ2.55cm, 幅2.40cm, 厚さは8.5mm。
- 46は第4トレンチ杭列外の砂層から出土した黒燐石製の不定形のスクレーパーである。2.65×3.3cm, 厚さは10mm。
- 47は第4トレンチ杭列外の砂層から出土した黒燐石製のスクレーパーである。先端部はすりへっておりドリルとしても使われた可能性がある。長さ4.0cm, 幅2.5cm, 厚さは10.5mm。
- 48は黒色包含層から出土した黒燐石製の使用痕のある剥片である。長さ3.9cm, 幅1.6cm, 厚さは5mm。

49は黒色包含層から出土した黒耀石製の不定形スクレーパーである。2.9×2.95cm，厚さは7.0mm。

50は旧河川最上層から出土した黒耀石製の使用痕のある剥片でスクレーパーとして用いられたものと思われる。3.0×1.95cm，厚さは8.5mm。



第 17 図 打製石器実測図 2 (縮尺1/2)

51は試掘調査で出土したもので、黒燐石製の使用痕のある剥片でスクレーパーとして用いられたものと思われる。長さ3.15cm、幅は1.75cm、厚さ5.5mm。

52は黒色包含層から出土した黒燐石製の使用痕のある縦長剥片である。全体に風化がはげしい。長さは7.7cm、幅は3.0cm、厚さ8mm。

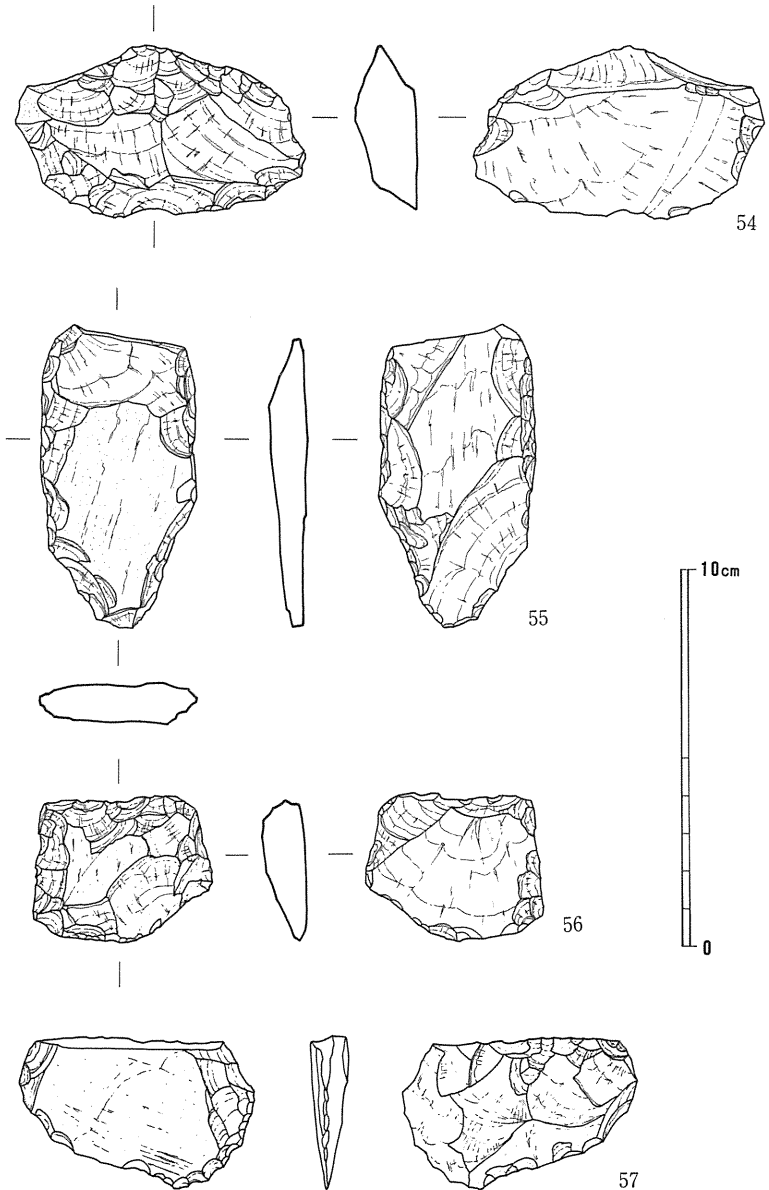
53は第3トレンチ黒色包含層から出土したサヌカイト製の尖頭器状石器である。黒色を呈する。長さは4.2cm、幅は3.3cm、厚さは1.6cm。

54は黒色包含層から出土したサヌカイト製のスクレーパーである。黒色を呈する。4.6×7.7cm、厚さ16.5mm。

55は黒色包含層から出土したサヌカイト製のスクレーパーである。長辺の両側を使用している。黒色を呈する。長さ8.0cm、幅4.1cm、厚さ10mm。

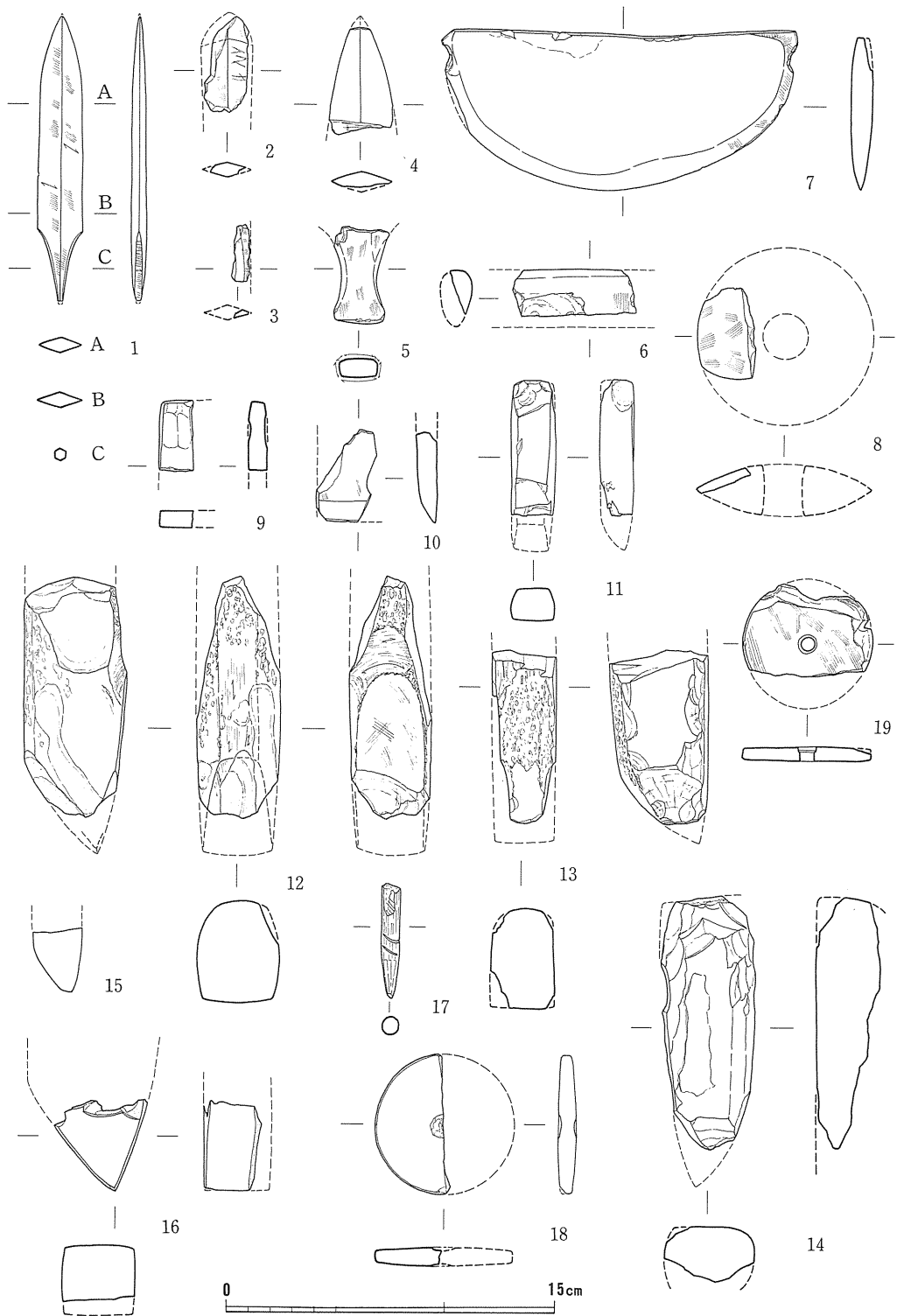
56は黒色包含層から出土したサヌカイト製のスクレーパーである。黒色を呈する。3.8×4.8cm、厚さは10.1mm。

57は試掘調査の際に出土したサヌカイト製のスクレーパーである。6.3×3.9cm、厚さ10mm。



打製石鏃等の原材

第 18 図 打製石器実測図 3 (縮尺1/2)



第 19 図 磨製石器実測図 1 (縮尺1/3)

料として用いられている黒耀石はいわゆる腰岳産といわれているものを主体としている。出土した黒耀石はかなりの量であるが、製品のなかにもあるいは図示できなかった他のものにも白色粒子を含んだものがあり、これらも腰岳産のものか、あるいは腰岳とは異なる産地のものか検討を要する課題ではないかと考える。

磨製石器（第19図～第22図）

1は表土剥ぎ中に採集したもので黒色包含層の最上部から出土したものと考えられるが遺構等に伴うものか否かの確認はできなかった。灰白色を呈する良質の粘板岩質の柳葉系磨製石鏃である。先端、茎尻をわずかに欠く。現存長は13.0cm。先端部の厚さ1.2mm、断面Aの部分での幅1.93cm、厚さ6.4mm、身の基部で幅1.99cm、厚さ7.2mm、茎は六角形を呈し、断面Cの部分で幅6.5mm、厚さ6.0mm、茎尻で幅2.1mm、厚さ1.9mm。重量は18.15g。

2は黒色包含層から出土した磨製石鏃片である。材質は黒色を呈する粘板岩を用いている。残存長は4.4cm、残存幅は1.95cm、厚さは7mm。

3は黒色包含層から出土した黒色粘板岩製の磨製石鏃片である。残存長2.6cm。

4は黒色包含層から出土した磨製石剣切先である。灰白色の粘板岩を用いたものである。残存長は4.9cm、幅は3cm程、厚さは一面が風化して剥落しており現存で7.5mm、復原して10mm程のものと思われる。

5は第4トレンチ杭列北側の砂層から出土した石剣茎である。灰色の粘板岩を用いている。残存長は4.4cm、幅は1.6～2.3cm、厚さは9.5mm。

6は黒色包含層から出土した。暗灰色の粘板岩製のものであるが、断面の形態からすれば石刀と考えられる。残存長5.6cm。

7は試掘調査中に黒色包含層中から出土したものである。灰色粘板岩製の半月形の穂摘具である。孔はなく、肩の両側に幅1.2～1.3cm程の袂りをつくる。長さ16.3cm、幅は7.1cm、厚さ9.7mmである。両刃につくる。弥生早期以前の可能性が強い。

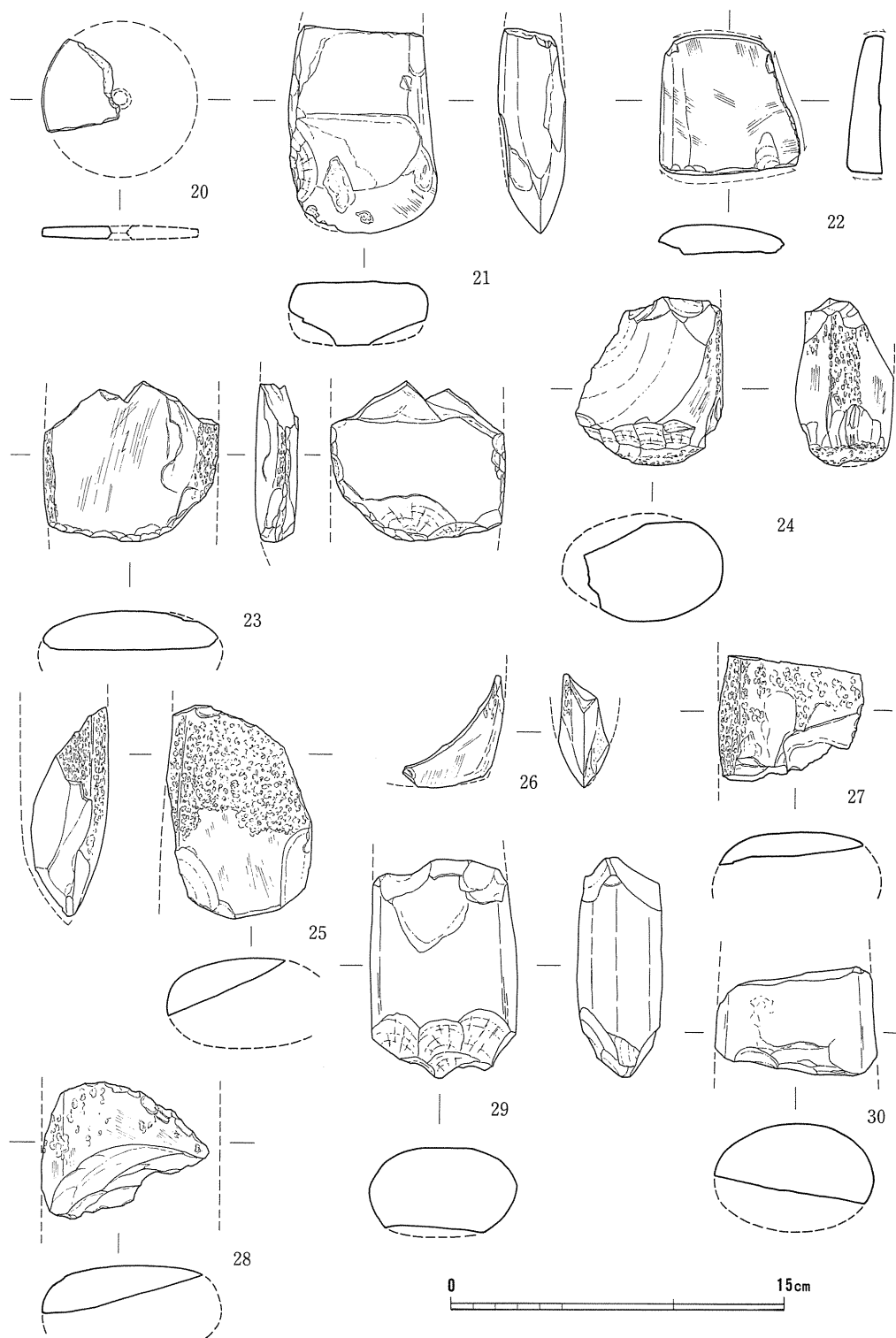
8は黒色包含層から出土したものである。形態からいえば環状石斧の破片と思われる。黒色を呈する石材でサヌカイト製かと思われる。復原径は8cm。

9は第3トレンチ黒色包含層から出土した。扁平片刃石斧の破片である。灰白色の頁岩を用いたものである。残存長3.2cm、残存幅は1.6cm、厚さは8mm。

10は黒色包含層からは出土した扁平片刃石斧片である。灰白色頁岩を用いたものである。残存長4.1cm、残存幅2.5cm、厚さ9.5mm。

11は黒色包含層から出土した柱状片刃石斧片である。灰緑色の頁岩を用いているがやや斜めに白い縞がはいる。残存長6.2cm、幅2.05cm、厚さ1.5cm。

12は黒色包含層から出土した袂入石斧片である。灰黒色粘板岩を用いたもので、刃部、上・下



第 20 图 磨製石器实测图 2 (縮尺1/3)

面の下半部、袂部は研磨、他の部分は敲打段階で終わっている。残存長11cm、幅3.8cm、厚さ4.7cm。

13は黒色包含層から出土した袂入石斧片である。灰白色を呈し緑の縞の入る頁岩を用いている。刃部・下面・両側面は研磨、上面は敲打段階で終る。刃部は欠損した後、敲きつぶれたようになっており再利用したものと思われる。残存長7.9cm、幅2.9cm、厚さ4.55cm。

14は黒色包含層から出土した袂入石斧片である。灰白色の頁岩を用いている。上面が敲打段階で終わっているほかは、頭部・下面・側面ともに研磨を施している。残存長11.5cm、もともとの幅は3cmをこえると思われる。厚さは4.2cm。

15は第3トレンチ黒色包含層から出土したものである。灰白色頁岩製の柱状片刃石斧もしくは袂入石斧の刃部が層に沿って3mm程の厚さに割れたものである。残存長2.9cm、厚さ2.25cm。

16は第1トレンチ黒色包含層から出土したもので袂入石斧の刃部と思われる。灰色の頁岩質砂岩を用いたもので全面研磨を施している。断面形状からいえば古いものである。残存長4.1cm。

17は黒色包含層から出土したものである。一端を尖らせた棒状製品で暗赤褐色を呈した片麻岩で春日市大谷遺跡出土の銅鐸鑄型に用いられた石材と同質のものである。残存長5.2cm、径は8.2×8.3mm。用途・時期等については不明。

18は黒色包含層から出土した石製紡錘車未製品の破片である。やや灰色を帯びた黒色を呈する閃緑岩質の片岩である。中央孔は敲打段階で終り貫通していない。径は6.4cm、厚さは縁で4.8mm、中央部で8.2cm。大きさからいって弥生早期に位置づけられよう。

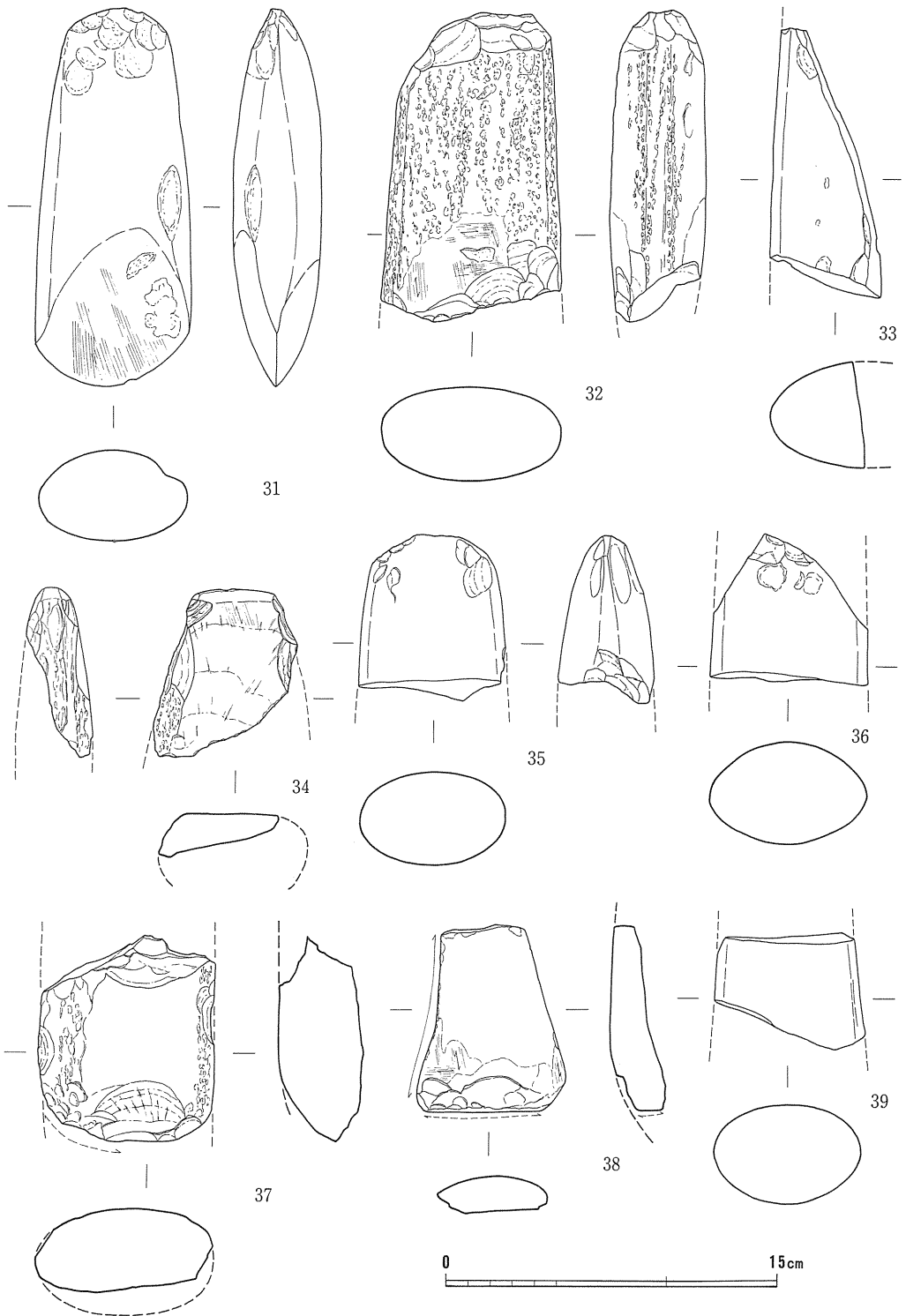
19は黒色包含層から出土した紡錘車片である。黒色を呈する滑石質の石材を用いたもので径は5.8cm、孔は穿面穿孔で孔径6～8mm、厚さは5.7～6.2mm。大きさ等からいって弥生早期のものと思われる。

20は第2トレンチ黒色包含層から出土した紡錘車片である。灰黒色を呈する閃緑岩質の片岩を用いたものである。復原径は7.1cm、復原孔径は7mm程で、孔は両面穿孔である。厚さは縁で3.3mm、中央部で5.8mm。大きさからいって弥生早期のものと考えられる。

21は第1トレンチ黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。灰黒色の粘板岩を用いたもので、頭部を欠損している。刃部は左右対象ではなくわずかに一方に寄っている。残存長9.4cm、幅は6.5cm、厚さは2.9cm。ほぼ全面に研磨を施している。

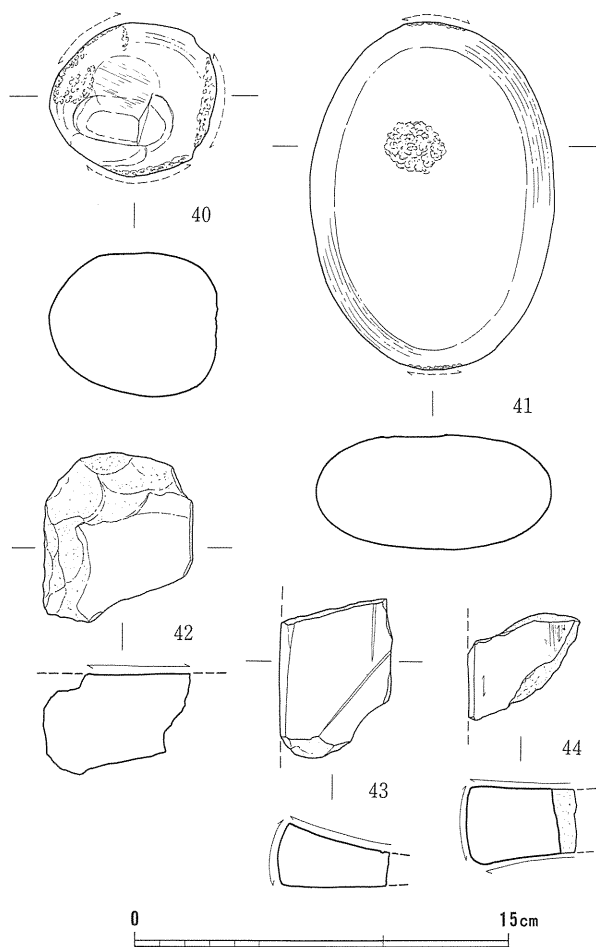
22は第1トレンチ黒色包含層から出土した磨製石斧片である。濃灰色の粘板岩を用いた石斧が破損した後、側面に刃部を形成してスクレーパーとして用い、下面は敲きつぶして再利用した痕跡が認められる。長さ6.3cm、幅6.3cm、厚さは8～10.3mm。

23は第1トレンチ黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。太型蛤刃の側面の破片の両側には刃部を形成してスクレーパーとし、下面は敲きつぶして使用した痕跡が認められる。黒色粘板岩製。残存長7.2cm、残存幅7.95cm、厚さは1.8cm。



第 21 図 磨製石器実測図 3 (縮尺1/3)

- 24は第2トレンチ黒色包含層から出土したものである。灰黒色の硬質砂岩を用いた太型蛤刃石斧の破片の一端に剝離を加えて整え、敲き石として再利用したものである。石斧としては上・下両面ともに研磨、側面は敲打段階で終わっている。
- 25は第3トレンチ1号貯蔵穴から出土した太型蛤刃石斧破片である。黒色安山岩質の石材を用いたものである。刃部は研磨、他の部分は丁寧な敲打段階で終わっている。刃部は敲きつぶして再利用した痕跡がある。残存長9.6cm、残存幅は6.5cm程、厚さは1.5cm程。
- 26は第3トレンチ黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧の刃部片である。黒色粘板岩製のもので刃部は研磨、側面の一部には敲打痕が残る。残存長は5.1cm、残存幅は4cm程、厚さは2.3cm。
- 27は第3トレンチ黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。黒色粘板岩質のもので残存する部分は敲打段階で終わっている。6.6×5.7cm、厚さは1.1cm程の破片である。
- 28は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。暗灰色の硬質砂岩質のものである。敲打のち研磨を加えている。7.6×6.2cm、厚さ1.8cm程の破片である。
- 29は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。灰色の硬質砂岩質のもので全面研磨を施している。頭部・刃部を欠損した後、刃部側に剝離を加え、刃部を形成しようとしている。残存長は9.9cm、幅は6.7cm、厚さは3.9cm。
- 30は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。硬質砂岩質のもので全面研磨を施しているが、側面には敲打の痕跡も若干残る。残存長4.9cm、幅は7.4cm、残存の厚さは3.1cm。
- 31は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧である。灰色の硬質砂岩質のもので長さ17.0cm、幅は頭部で4.5cm、刃部で7.0cm、厚さは4.1cm。全面研磨を施こすが頭部には敲打痕が残る。刃部にはやや斜方向の使用痕が残る。
- 32は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。黒色の粘板岩質のもので、頭部の一部と刃部側を欠く。残存長は13.9cm、頭部側の幅7.2cm、刃部側での幅8.2cm、厚さは4.3cm。刃部側は研磨を施しているが、他の部分は敲打段階で終わっている。
- 33は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。残存長は12.2cm、残存幅は5cm程、厚さは4.8cm。灰色の硬質砂岩質のものであるが、火熱を受けて灰桃色に変色した部分が多い。
- 34は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片を再加工してスクレーパー等に再利用したものである。黒色粘板岩質のもので、石斧の一面の大きな剝離面には研磨を加え、刃部側の割れて細くなった側は再加工して使用した痕跡が認められる。残存長7.6cm、幅5.7cm、厚さ2cm程。
- 35は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧の頭部片である。灰色の硬質砂岩質のもので、全面に研磨を加えるが頭部には敲打痕が残る。残存長7.5cm、幅は5.4～6.6cm、厚さは4.2cm。
- 36は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。残存長は6.7cm、幅は7.2cm、厚さは4.6cm。半面は火熱を受けて灰桃色に変色している。
- 37は黒色包含層から出土した太型蛤刃石斧片である。残る部分は敲打段階で終わっている。淡灰



第 22 図 磨製石器・砥石実測図 4 (縮尺1/3)

6.6×6.0×5.8cm程の大きさである。

41は第2トレンチ黒色包含層から出土した凹石・敲き石両様に用いられたものである。白色の花崗岩円礫を用い平坦面の一面には凹んだ部分と磨れた部分があり、長軸の両端には敲いた痕跡が認められる。長さ13.9cm、幅9.8cm、厚さは4.6cm。

42は黒色包含層から出土した砥石片である。原材は鑄型に用いられるものと同一のものと思われる。全体に熱を受けて白桃色を呈している。6.8×5.8cm、厚さは4cm程の破片である。

43は黒色包含層から出土した砥石片である。白色のやや粗い砂岩を用いた荒砥である。磨りへった部分および側面も砥面として使用している。残存長6.4cm、残存幅4.5cm、厚さは1.4~2.5cm。

44は黒色包含層から出土した砥石片である。一見ち密な砂岩質の石材であるが細粒の金雲母片

色の粘板岩質のもので、残存長9.3cm、幅は8.0cm、残存の厚さは3.8cm。38は黒色包含層から出土したもので、大型蛤刃石斧片を側面は再加工してスクレーパーに、刃部側は敲きつぶして磨石もしくは敲石として利用している。灰色の硬質砂岩質のもので、一部研磨、他は敲打仕上げ。残存長8.4cm、幅は3.9~6.8cm、厚さは1.6cm。

39は黒色包含層から出土した大型蛤刃石斧片で、硬質砂岩質のものである。頭部・刃部の両側を欠くが全面研磨を施す。残存長5.3cm、幅は6.3~6.7cm、厚さは3.9~4.7cm。

40は第3トレンチ黒色包含層から出土したもので、灰黒色の閃緑安山岩質の石材を用いた磨石あるいは槌の類と考えられる。円礫を敲打して整え、一部は研磨を加えている。使用された部分は磨った部分、および研磨と敲いた痕が同時にみられざらざらした部分が2ヶ所に認められる。

を多く含有している。側面も含めて
 砥面として使用しているが、全体に
 熱を受けている。仕上砥である。残
 存長4.2cm，残存幅4.4cm，厚さは2.
 5～3.1cm。

c. 木器 (第51図4)

旧河川上面から出土したもので器
 種・用途等はわからない。底面は7.
 7×6.6cm上面は6.5×5.4cmの扁円形
 を呈し，中央部に底面3.4×2.8cm，
 上面3.7×3.2cmの扁円形の孔を穿っ
 ている。材質は針葉樹と思われるが
 専門家の鑑定は得ていない。

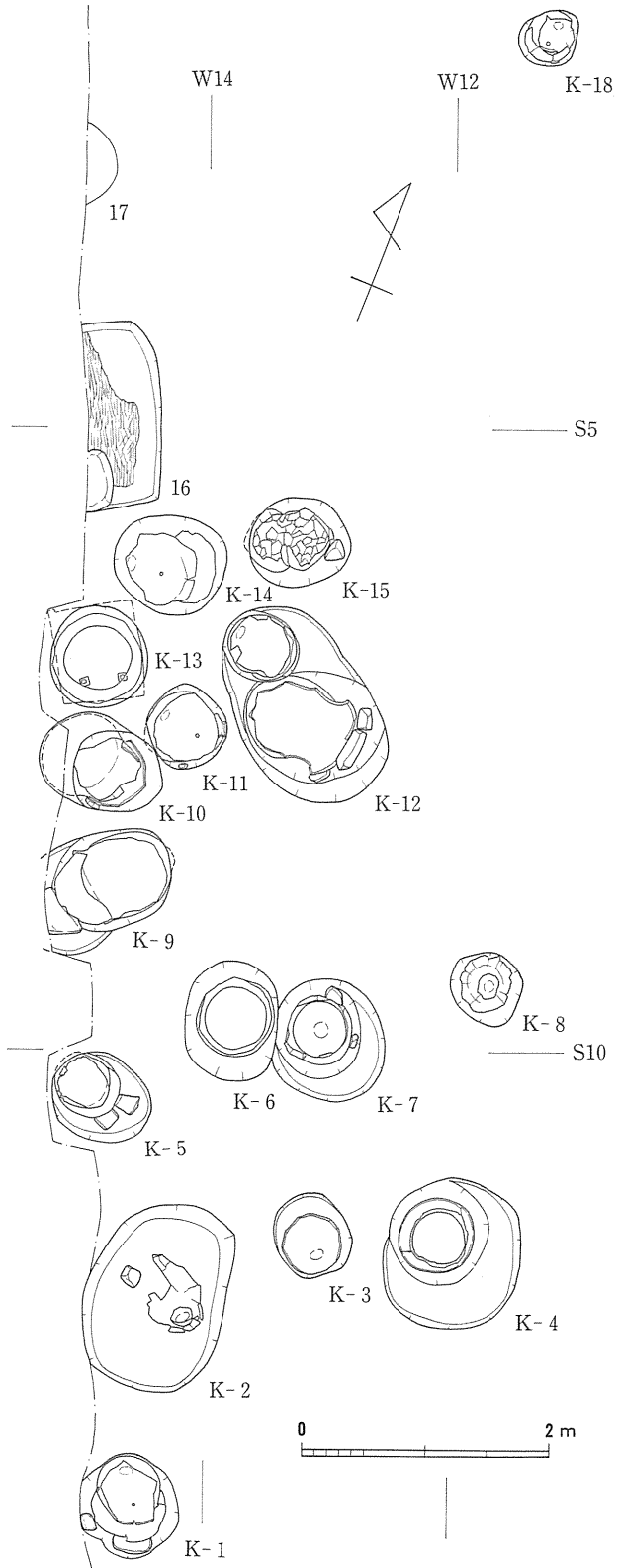
3) 甕棺墓群の調査

表土剥ぎを行なった段階で調査区
 西端と調査区東部のやや南寄りのと
 ころに甕棺墓群があり，他にも調査
 区の各所に散見できた(第4図)。こ
 れらのうち調査区西端の甕棺墓群と
 第4トレンチ内から甕棺を検出した
 のでその周辺の甕棺墓については調
 査を実施することとした。

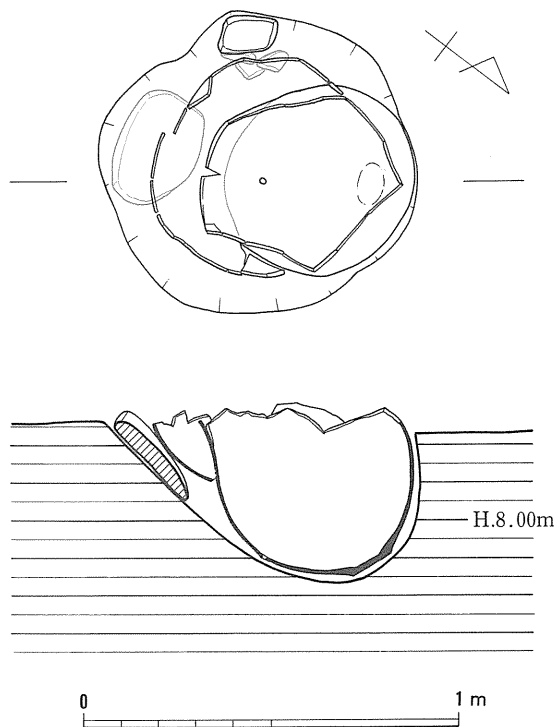
調査区西端の甕棺墓群は18基と土
 壙墓1基を検出し，うち17号甕棺は
 発掘しなかった(第23図)。他に第4
 トレンチとその周辺で甕棺4基を調
 査した。以下順次説明を加える。

1号甕棺墓 (第24図)

1号甕棺墓の主軸はN-38°-W，



第23図 甕棺墓群等配置図 (縮尺1/60)



第 24 図 1号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

粘土帯を貼付し、口縁外側にも粘土帯を貼付し段をつくり、板付I式的な古い特徴を残している。肩部には3条の沈線をめぐらす。内面の大半はナデ、頸部内面はハケ目の後ナデ、口縁内外はヨコナデ、頸部はナデ、肩より以下はミガキ。灰黄色もしくは灰白色を呈するが一部に黒褐色の部分があり黒塗りの痕跡かと思われる。又胴部にはやや大きな黒斑もある。胎土には細粒の砂、雲母、赤色粒子等を含み、焼成は良好。口縁外側の段等に古い要素がみられ、板付II(古)式の大壺を甕棺として転用したものと考えられる。

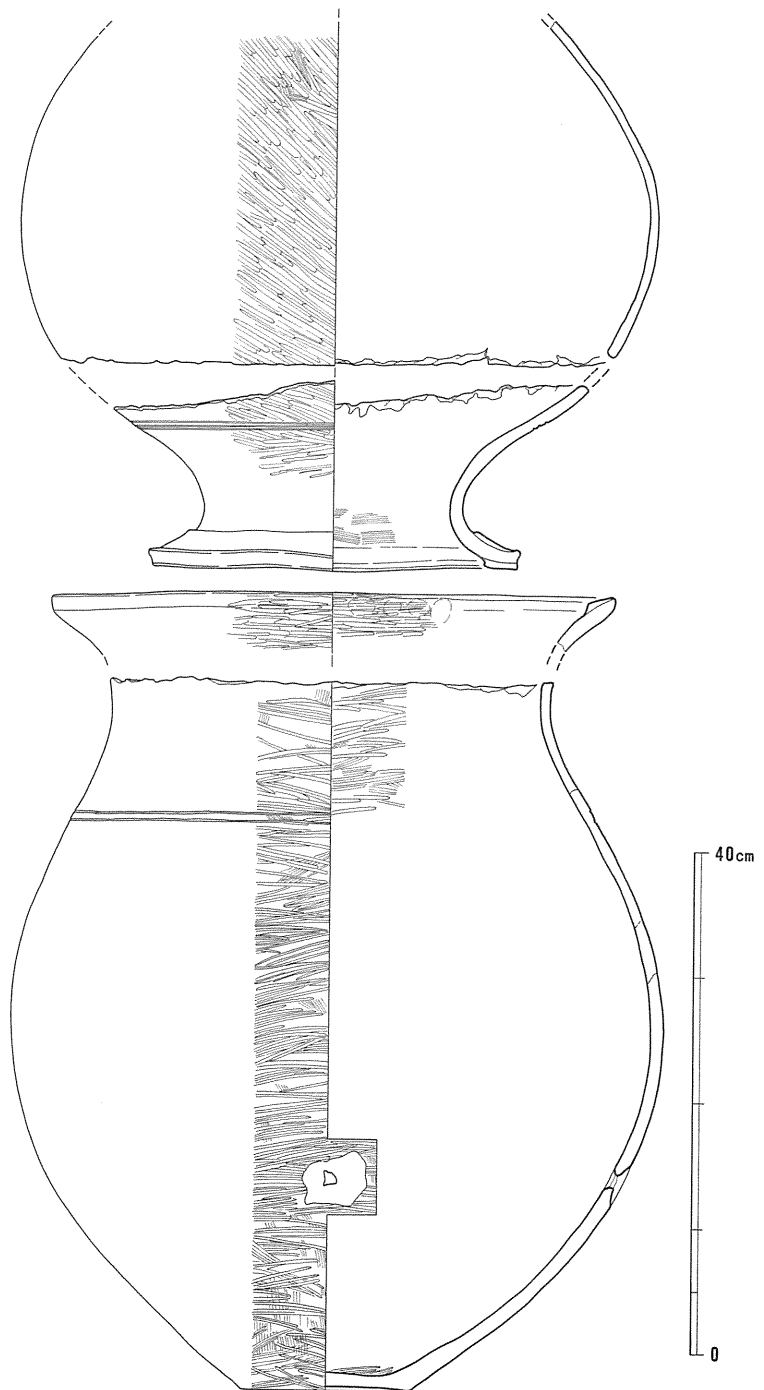
下甕は口縁部を打ち欠いている。打ち欠き部までの高さは56.2cm、復原器高は63cm前後、復原口径は35.4cm、底径は13.5cm。打ち欠き部の径は35.6cm、胴部最大径は52.3cm。口縁内側には粘土帯を貼付し段をつくる。肩には2条の沈線をめぐらす。口頸部のすばまりが小さく甕棺用として製作されたものと考えられ、KIa式と位置付けられよう。内底部はミガキ、胴部内面はナデ、頸部内面はハケ目の後ミガキ、口・頸部内面はミガキ、外面はハケ目の後ミガキ。淡茶褐色を呈するが、内面に大黒斑が、外面にはそれよりも小さな黒斑がある。胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を多めに含み、焼成は良好。胴下半部に内から外に向けて穿孔した孔1個がある。

傾斜角は60°ときつい。現状での墓壇の大きさは80×85cm程で上甕の大半と下甕の一部が削平を受けている。覆口式の甕棺で、下甕の口縁部、上甕の口頸部を打欠いている、図は略したがその打欠いた口頸部を甕の支えとして置いていた。又上甕を個定するかのようには花崗岩5個を置いている。この部分に石を置くのはこの地域では板付I式およびKIa式頃の甕棺墓によくみられることである。

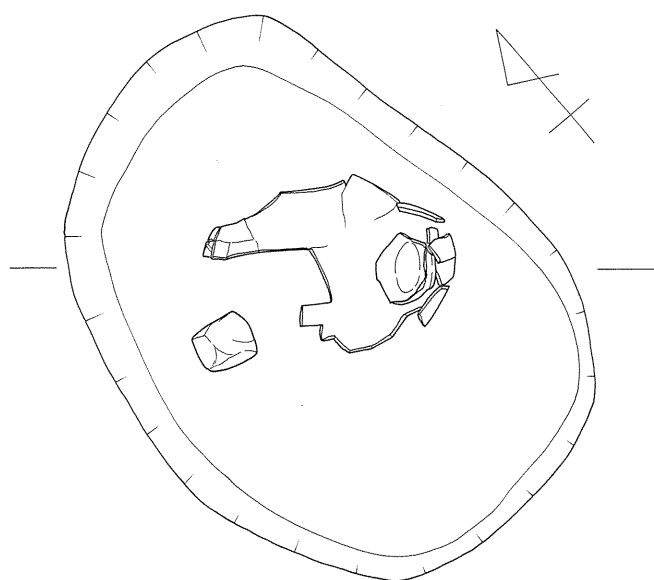
人骨は歯冠のみしか取上げられなかつたが、中橋氏の鑑定では小児期末(10~11歳)頃でおそらくは男性という結果が出ている。

1号甕棺 (第25図)

上甕は口頸部を打欠き、下半部は欠失している。口径29.2cm、打ち欠き部の径は44.3cm、胴部最大径は51cm。器高は復原して55cm前後のものと考えられる。口縁上端には

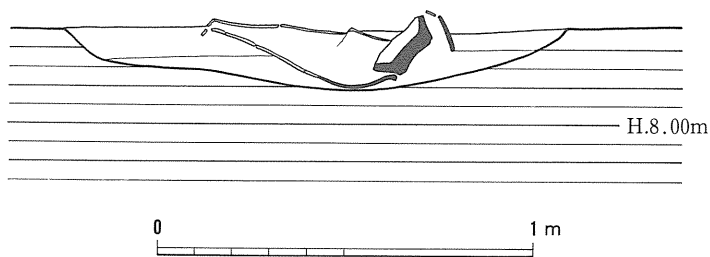


第 25 図 1号甕棺実測図 (縮尺1/6)



2号甕棺墓 (第26図)

2号甕棺墓は単棺で主軸はN-49°-W、傾斜角は残りが悪く正確ではないがおよそ20°程のものかと思われる。現状での墓壇の大きさは160×115cm程の隅丸長方形を呈する。深さは20cm弱で甕棺の残りも悪い。口縁部分に甕棺を個定するためのものと思われる15cm程の粘板岩の角礫が置いてあった。人骨等は検出できなかった。



第 26 図 2号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

2号甕棺 (第27図)

底部および口縁部しか図示できなかった。底径は18.0cm。復原口径は63cm。口縁外側には粘土帯を貼付し、段をつくり、古い要素を残している。内面はナデ、外面はハケ目の後ナデ、底部近くの一部には横方向の擦過を施したところがあり、底部の最下部にはタ

キ痕が残る。外底はナデ。内面は灰色、外面は灰黄色もしくは黒褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。KIa式に位置づけられる。

3号甕棺墓 (第28図)

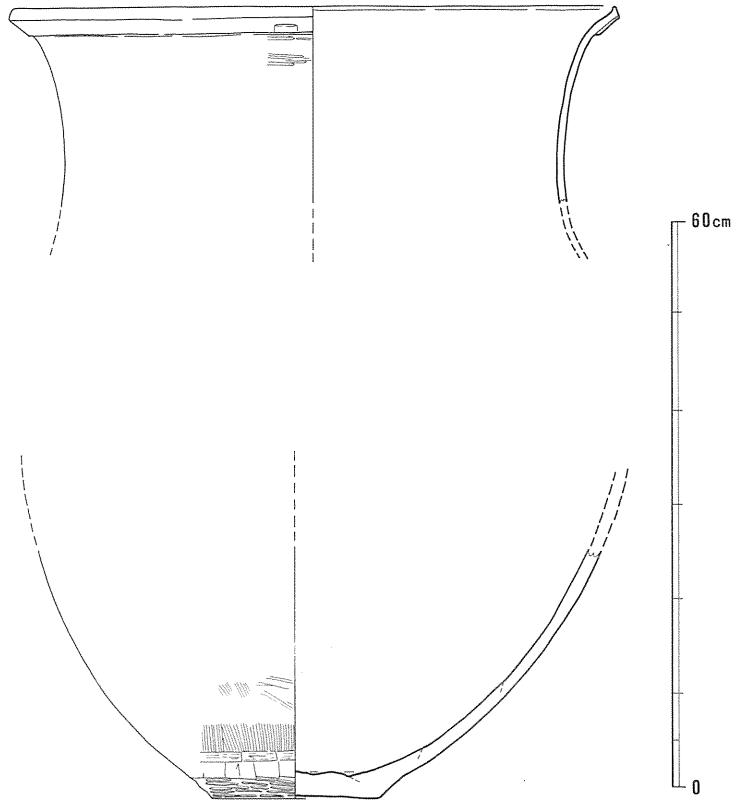
3号甕棺の主軸はN-40°-W、傾斜角は62.5°ときつい。上部を削平されており単棺か合口甕棺かわからないが、墓壇が傾斜している側に広がることからいって上甕があった可能性が高いと思われる。現状での墓壇の大きさは67×59cmで、下甕はほとんど甕の大きさとあわせた掘方を掘って埋置している。

人骨は歯冠のみしか取上げられなかったが、中橋氏の鑑定では4～5歳の幼児で性別は不明

との結果がでている。

3号甕棺 (第29図)

肩から上を欠失している。現存高は36.6cmであるが、復原高は55cm程のものであろう。日常容器の大形壺を転用したものである。底径は13.5cm、胴部最大径は48.8cm。内面は板木口によるハケ目もしくは擦過の起点痕が残るがナデ仕上げと思われる。外面は底部近くをのぞきミガキ、底部近くはミガキ風の擦過、外底は板木口によるカキトリの後ナデ。内面は淡茶褐色、外面は褐色で部分的に赤変部がある。胎土には細粒の砂、赤色粒子等を含み、焼成は良好。板付II(古～中)式に位置付けて大過なかろう。

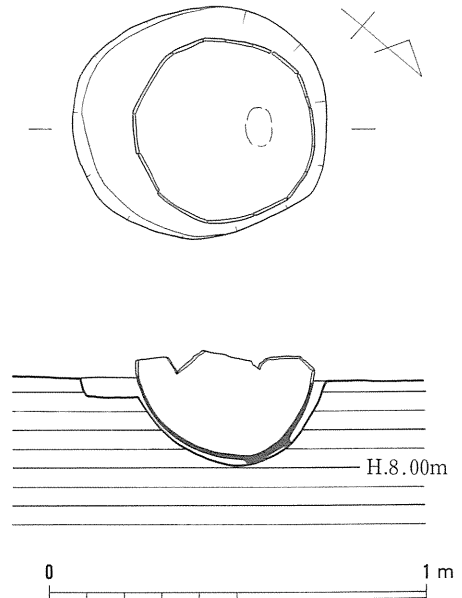


第 27 図 2号甕棺実測図 (縮尺1/8)

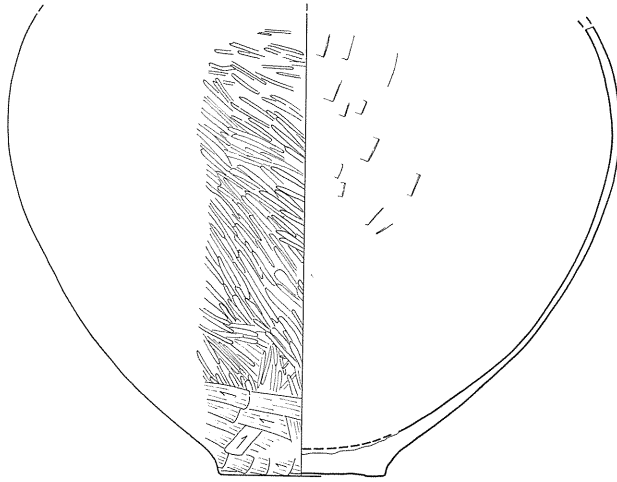
4号甕棺墓 (第30図)

4号甕棺は直立棺といってもいい程、傾斜角がきつい。傾斜角は72°、主軸はN-20°-W。現状での墓壇の大きさは121×110cmのほぼ円形で、その東南に甕よりやや大きな掘方があり甕棺を埋置している。下甕は口縁を打ち欠き、上甕は一まわり大きな甕を被せた覆口式の甕棺である。上甕は上半を削平されており肩から以下を欠失している。

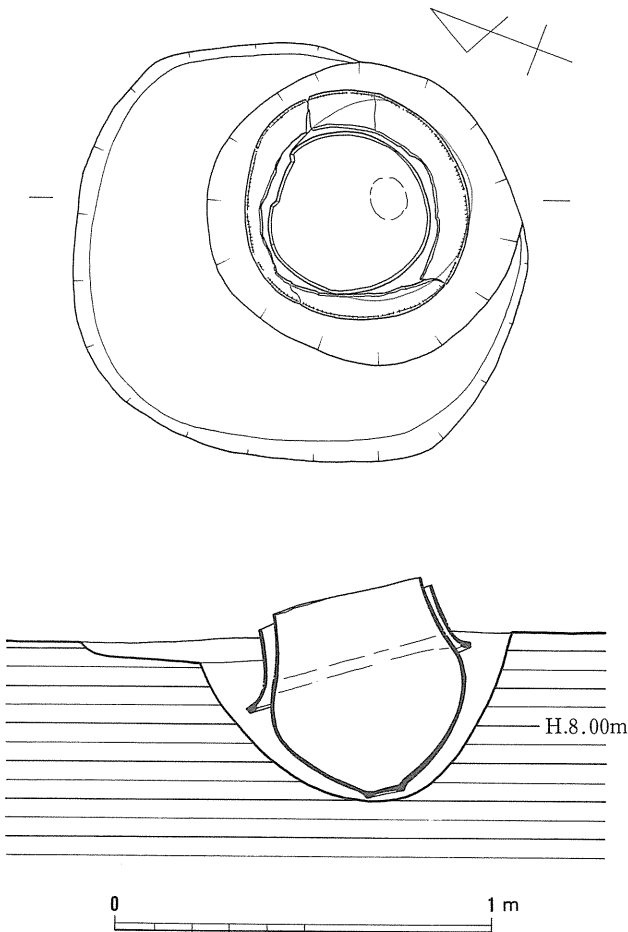
人骨は歯の薄片のみしか取り上げられなかったが、中橋氏の鑑定では成人で性別不明との結果が出ている。



第 28 図 3号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)



第 29 図 3号甕棺実測図 (縮尺1/6)



第 30 図 4号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

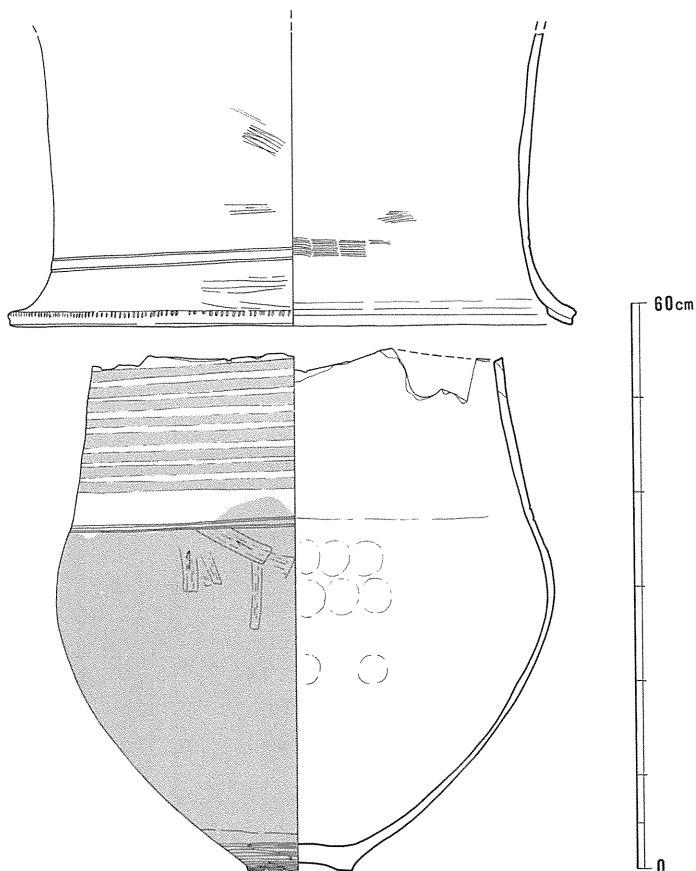
4号甕棺 (第31図)

上甕は肩部以下を欠失する。現在存高は31cm、口径は60.1cm。口縁内面には粘土帯を貼付し段をつくる。口縁の下端にはヘラによる刻目を施こし、口縁下には2条の沈線をめぐらす。肩からは外に開き始めており胴部は張る形態のものと考えられ、

下甕との関係からもKIb式に位置付けられる。頸部内面はナデ、口縁下内面はハケ目の後ヨコナデ、口縁内外はヨコナデ、口縁下はミガキ、頸部外面はナデ仕上げであるが部分的にミガキの痕跡が認められる。内面は灰黄色、外面は黄褐色を呈し、胎土には砂粒、金雲母等を多く含み、焼成は良好。

下甕は口縁を打ち欠いている。現存高55.5cm、底径11.25cm、最大胴径53.2cm、打ち欠き部分口径は43.8cm。肩部には2条の沈線をめぐらす。頸部には8条の縞状の黒塗りが施される。縞の上下には設計線状に細い不明瞭な沈線らしきものが観察される。肩部沈線以下は全面に黒塗りを施こし、特に胴部最大径以下はまっ黒であるが、黒斑の黒さとは異なる。内面の底近くには暗黒褐色のものが塗られたように円形に残っているが、これは脂肪と黒塗りの顔料が沈着し

たものかと思われる。淡茶色を呈するが胴部とその反対側の頸部から胴部にかけて大きな黒斑が認められる。内面はナデ仕上げであるが、胴部内面には径4cm前後の円形のアテ具痕かと思われる凹みが連続して観察される。外面はナデ仕上げであるが、肩部には擦過痕が残り、底部にはミガキ、タタキ痕等が残っている。底部は1cm程の上げ底を呈する。胎土には砂粒・金雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。KIb式に属する。



第 31 図 4号甕棺実測図(縮尺1/8)

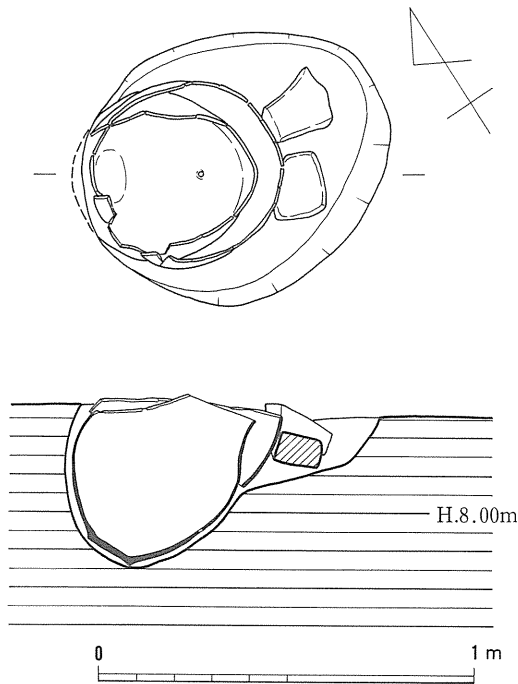
5号甕棺墓(第32図)

5号甕棺墓の主軸はN-57°-W, 傾斜角は60°

ときつい。現状での墓壙の大きさは83×71cmでその東側に甕棺とほぼ同大の掘方があり下甕を裾え、上甕を被せた覆口式の合せ口甕棺である。下甕は日常容器の大形壺の口縁部を打ち欠き、上甕は同じく日常容器の大形壺の口、頸部を打ち欠いている。上甕を被せた後、合せ口部に15cm程の角礫を置き安定をはかっている。人骨は歯のみしか取上げられなかったが、中橋氏の鑑定によれば4~5歳の幼児の歯であるが歯冠サイズがかなり大きく、男性の可能性も考えられている。また棺内からは碧玉製管玉15個が検出された。被葬者の着用品と考えられるが、4~5歳の幼児が着装していたことの意義は大きい。

5号甕棺(第33図)

上甕は口・頸部を打ち欠き、底部は欠失している。現在器高25cm, 打ち欠き部の口径40.0cm, 胴部最大口径は48.5cm。肩には1条の沈線をめぐらす。内面はナデ、外面の胴部上半は削り風



第 32 図 5号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

第 2 表 碧玉計測表

	材質	色	計 測 値			備 考
			長さ	径	孔径	
1	碧玉	暗緑色	3.6~3.8 ^{mm}	2.2 ^{mm}	1.2~1.3 ^{mm}	両面穿孔
2	碧玉	青緑色	2.8~3.9 ^{+α}	3.0	1.5	両面穿孔
3	碧玉	暗緑色	5.8+α	3.1	1.5	両面穿孔
4	碧玉	暗緑色 しま有	5.2+α	3.5	1.7	両面穿孔
5	碧玉	緑色	5.9	3.1	1.8	両面穿孔
6	碧玉	暗緑色	6.6	3.2	2.0	両面穿孔
7	碧玉	青緑色	7.0	3.4	1.9	両面穿孔
8	碧玉	暗緑色	7.6	3.2	1.9~2.2	両面穿孔
9	碧玉	青緑色	7.5~8.0	3.5	2.0~2.1	両面穿孔
10	碧玉	青緑色	8.9~9.2	3.7	2.0~2.1	両面穿孔
11	碧玉	緑色	8.7~9.0	3.8	1.9~2.0	両面穿孔
12	碧玉	青緑色	9.0	3.8	1.8~1.9	両面穿孔
13	碧玉	青緑色	5.8~6.3	4.5	2.0~2.3	片面穿孔
14	碧玉	青緑色	7.8	4.3	2.3~2.8	両面穿孔 断面に磨加工
15	碧玉	暗緑色 しま有	15.3	5.5	2.3~2.7	両面穿孔

の擦過の後、一部へラナデ、胴下半はハケ目を施す。内面は灰黄色、外面は灰黄色を呈するが、胴部の上下に黒斑があり、その周辺は淡赤色を呈している。胎土には砂粒、雲母・角閃石を多く含み、焼成は良好。

下甕は口縁を打ち欠いている。現存高49.4cm、底径13cm、打ち欠き部口径33cm、胴部最大は44.3cm。頸のすばまりは弱く肩には不連続の沈線1条をめぐらす。内面の胴部はナデ、頸部は横方向のハケ目の後ナデを加えており一見指頭圧痕様にみえる。外面の大半はミガキであるが部分的とくに底部近くにはハケ目が残し、ハケ目→ミガキということがわかる。底部にはハケ目の後横方向擦過を施す。灰黄色を呈するが黒色を呈する部分が多く黒塗りの痕跡かと思われる。胴部の両側には黒斑も認められる。胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。板付II(古)式に位置付けられる。

碧玉製管玉 (第52図1~15)

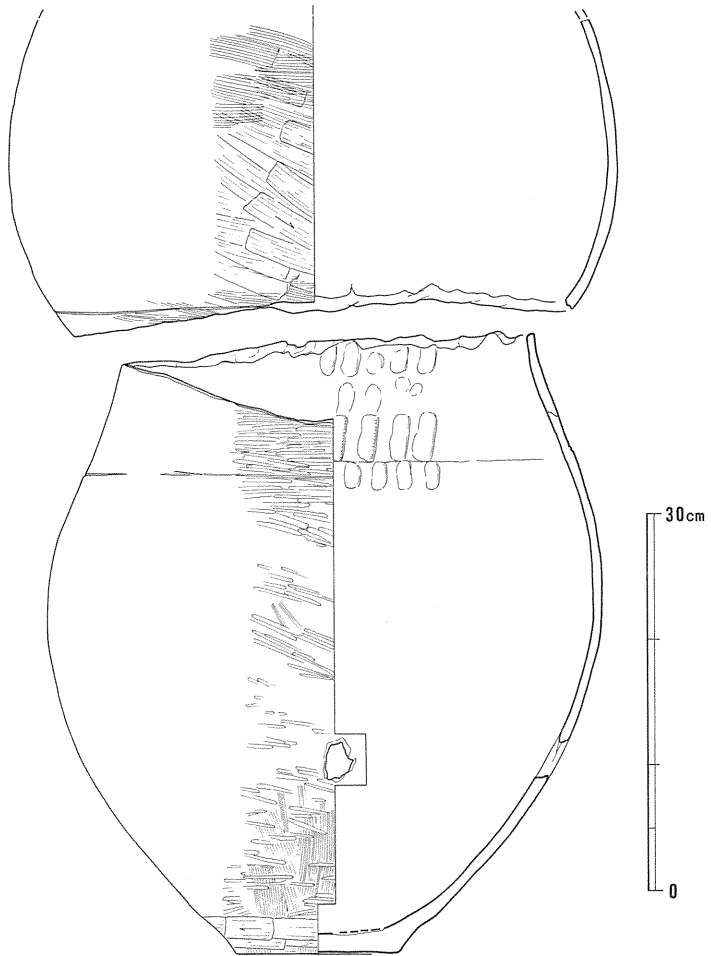
きわめて小さなものから15mm前後のものまで15個が出土した。材質・色・計測値については第2表に記す。

6号甕棺墓 (第34図)

6号甕棺墓は倒立甕棺でかつほぼ直立しているので主軸は決め難い。現状での墓壙の大きさ96×75cm。墓壙中央に遺体を置き甕棺を逆さに被せたものであるが、上半は削平を受けて欠失している。甕棺内からは人骨等は検出されなかった。

6号甕棺 (第35図)

下半部を欠失しており現存高は42cm程、口径は62.7cm。口縁上端には粘土帯を貼付し段をつくる。口縁外側の上下両端には刻目を施す。口縁下と肩部には3条の沈線をめぐらす。内面はナデ仕上げであるが、径4cm強の棒木口によるタタキアテ具痕がありそれにハケ目

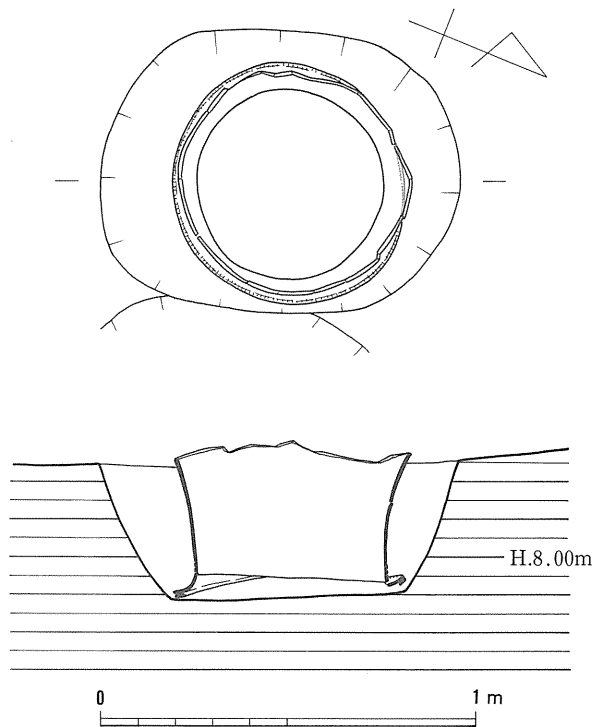


第 33 図 5号甕棺実測図 (縮尺1/6)

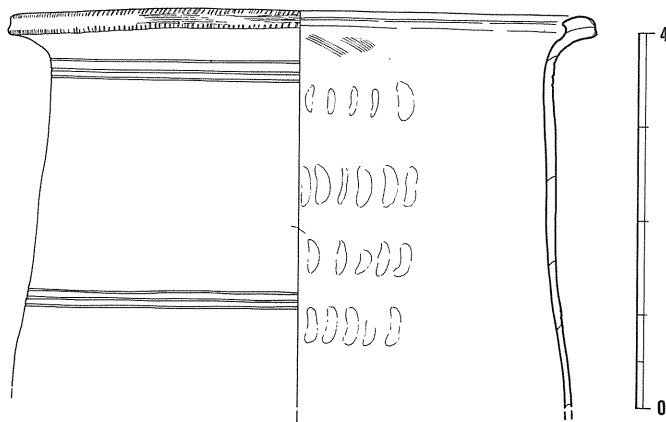
を加え、さらにナデを施すことによってアテ具痕は結果的には半月、三ヶ月状を呈している。外面もナデ仕上げであるが、タタキ痕が各所にみられる。通常のタタキと大形のタタキを併用したものとみられる。淡茶褐色を呈するが両側には大小の黒斑がみられる。胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。もともと成人用に作られた大形棺で橋口の分類によるKIa式に属する。

7号甕棺墓 (第36図)

7号甕棺墓は肩部以上を打ち欠いた下甕に上甕を被せた覆口式の合せ口甕棺である。ほぼ直立しているので甕棺の主軸は決め難い。現状での墓壙の大きさは98×91cm。墓壙の西側に寄っ



第 34 図 6号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)



第 35 図 6号甕棺実測図 (縮尺1/8)

て甕棺を埋置する80×69cm、深さ34cmの穴を掘り下甕を裾え、上甕を被せている。甕棺内からは人骨等は検出されなかった。

7号甕棺 (第37図)

上甕は胴部以下を欠失する。残存高27.5cm程、口径は53.8cm。口縁内側には粘土帯を貼付し段をつくる。口縁端の上下には板木口による刻目を施こし、口縁下と肩部には2条の沈線をめぐらす。頸部内面はナデ仕上げであるがタタキアテ具痕が残る。口縁内面はタタキのアテ具痕の上からナデを加えさらにミガキを施している。したがって内面に残るアテ具痕は変形していき一見指圧痕様にみえる。外面はミガキの後ナデを加えている。淡黄色を呈するが頸部の一側に大きな黒斑がある。胎土

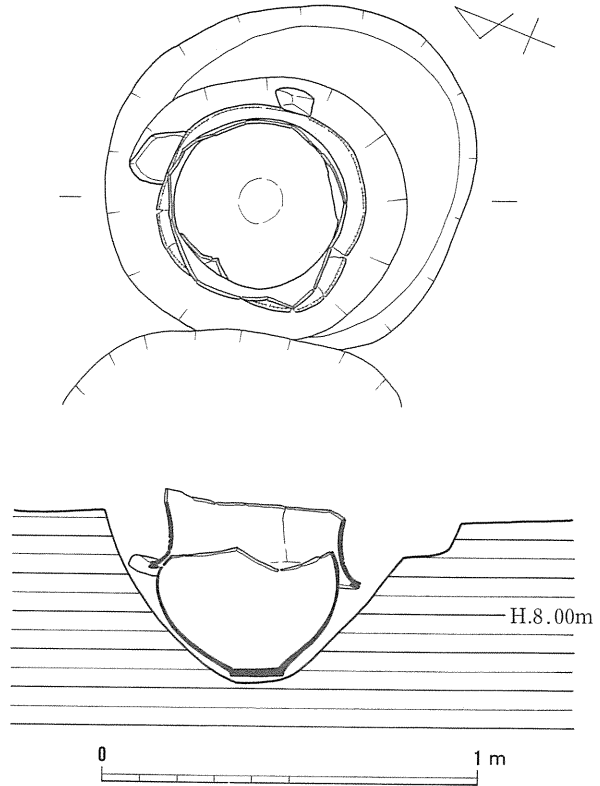
には砂粒、赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。

KIa式に属する。

下甕は口・頸部を打ち欠き残存高は35.5cm、打ち欠き部径47.8cm、胴部最大径49.5cm、底径は13.4cm。内面には一部タタキアテ具痕と思われる径1cm程の不整円形の凹みが並び、その上から板木口による擦過が加えられ、

さらに雑なミガキが加えられている。復原高は65cm弱のものであり甕棺専用のものか、日常器の大形壺かにわかには決し難いが、内面にミガキが加えられているということからすると口・

頸部のすぼまりが弱く、つまり甕棺専用という可能性が強いものかと考える。外面はミガキ。内面はの底部から胴部中位にかけては黒褐色を呈しているが、これは脂肪等の沈着した痕跡かと思われるが黒塗りの痕跡も認められる。また胴部上位にはやや大きな黒斑が、底部には小黒斑が認められる。胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。甕棺専用のものでしたらKIa~b式、大形壺ならば板付II(古)~(中)式に位置付けられる。



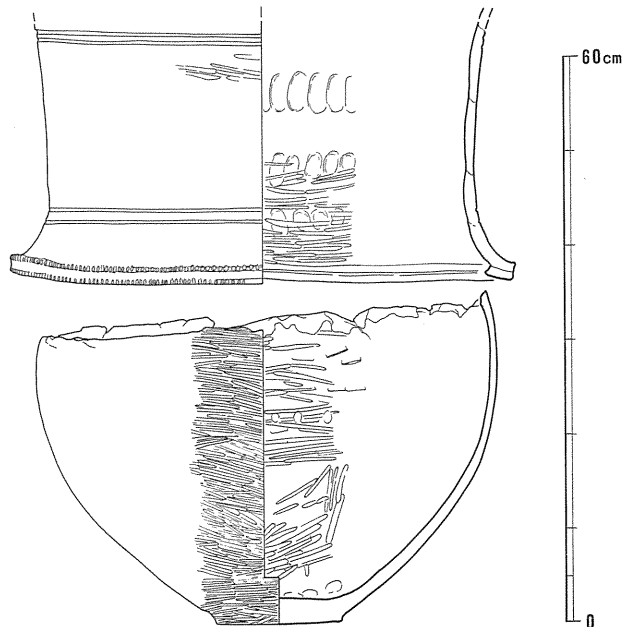
第 36 図 7号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

8号甕棺墓 (第38図)

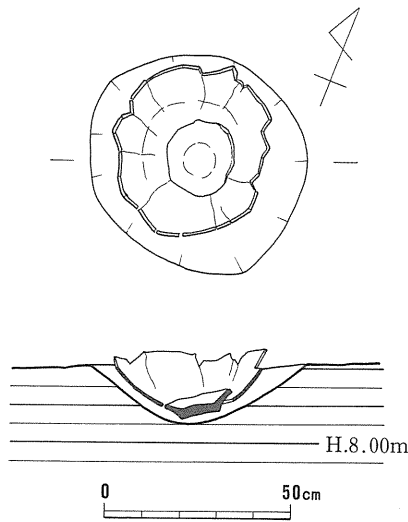
底部近くが残るのみで大半を削平されている。傾斜角は82°とほぼ直立している。主軸は傾斜方向から導き出すとN-68°-Eである。現状での墓壙の大きさは58×58cmのほぼ円形で、深さは17cmと残りは悪い。甕棺内からは人骨等は検出されなかった。

8号甕棺 (第39図)

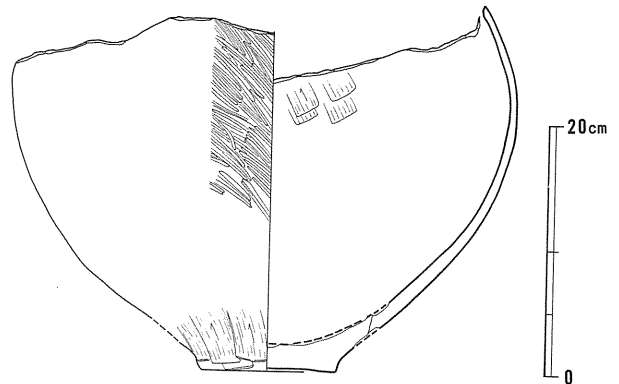
胴部以上を欠失している。現存高は29.7cm、胴部最大径は38.2cm、底径は10.8cm。内面は擦過の後ナデ仕上げ、外面の底部は擦過、胴下半部はナデ、胴上半はミガキ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を少量含み、焼成は良好。日常容器の大形壺を転用したもので板付II(古)~(中)式に位置づけられる。



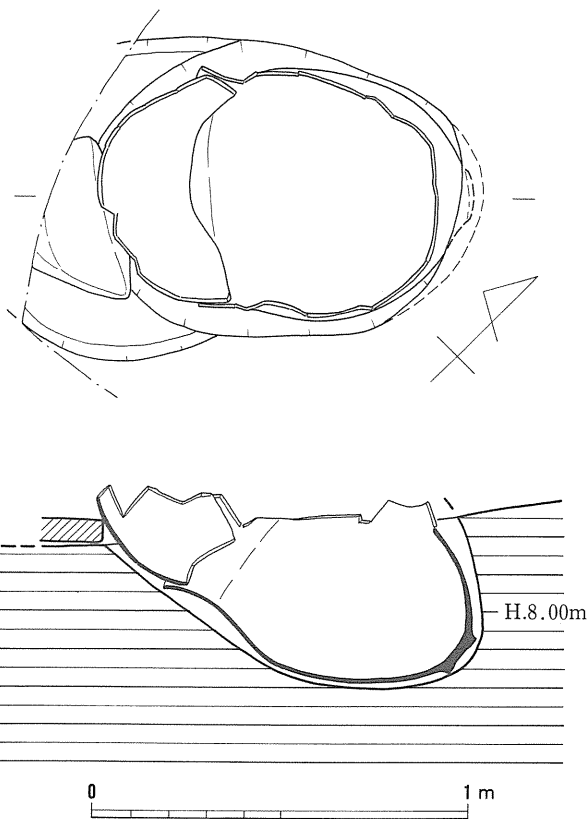
第 37 図 7号甕棺実測図 (縮尺1/8)



第 38 図 8号甕棺実測図 (縮尺1/20)



第 39 図 8号甕棺実測図 (縮尺1/6)



第 40 図 9号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

9号甕棺墓 (第40図)

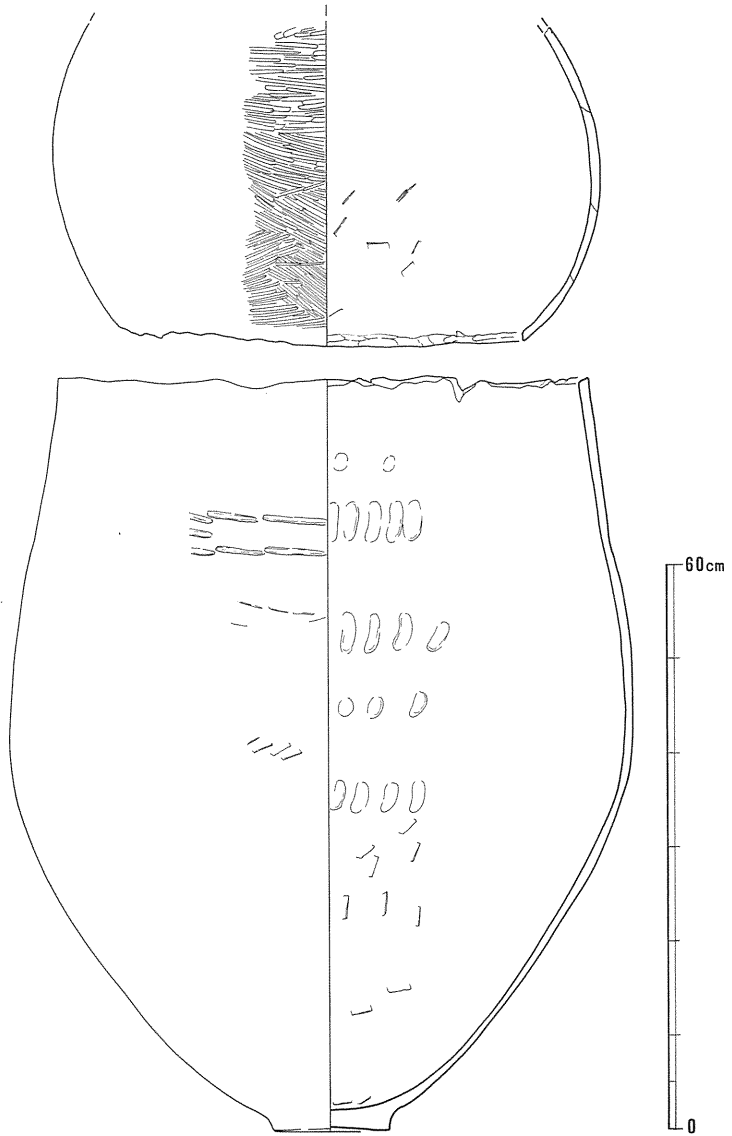
口縁を打ち欠いた下甕に、口・頸部を打ち欠いた日常容器の大形壺を挿入して蓋とした呑口式の合せ口甕棺である。甕棺の主軸はN-45°-E、傾斜角は35°前後である。墓壙は完掘していないが長さは110cm以上でおそらく135cm程と推定できる。幅は86cm。墓壙の西側に97×80cm、深さ38cm程の穴を掘り、下甕を据えて、上甕を挿入しているが、上甕の下には厚さ6cm程の大きな板石を置き安定をはかっている。甕棺内からは人骨等は検出されなかった。

9号甕棺 (第41図)

上甕は胴下半部を欠失し、肩から上は打ち欠いている。現存高は34cm、打ち欠き部径は43.4cm、胴部最大径は58.6cm。内面はナデ仕上げ、外面はミガキ。明るい茶褐色を呈する。胴下半部にやや大きな黒斑がある。胎土には砂粒・角閃石・

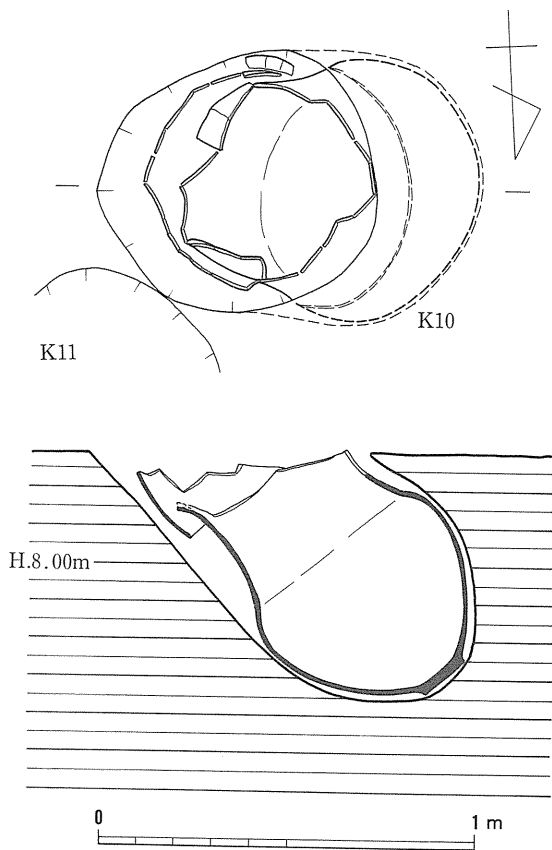
赤色粒子等を多く含み、
 焼成は良好。日常容器
 の大形壺を転用したも
 ので板付II式の古い部
 類に属するものであろ
 う。

下甕は口縁部を欠い
 ており、現存高は80cm、
 打ち欠き部復原径は
 56.4cm、胴部最大径は
 66.6cm、底径12.5cm。
 内面はナデ仕上げであ
 るが、胴下半部には板
 木口によるおそらく擦
 過の起点痕がみられ、
 胴上半部から頸部にか
 けては半月形を呈した
 不整形の指圧痕様の凹
 みが観察される。これ
 はタタキアテ具痕と思
 われるが、本来4cm強
 の円形であったものが、
 擦過・ナデが施されて
 上記のように変形した
 ものと考えられる。外
 面もナデ仕上げである
 が肩の部分に長さ7cm、
 程1条の幅8mm程のタ



第 41 図 9号甕棺実測図 (縮尺1/8)

タキ痕が認められる。甕棺にみられる通常の大形のタタキ痕であるが、肩の段の部分を意識したものかと思われる。内面は淡茶色、外面は淡黄褐色を呈するが、広範囲に黒斑が認められる。胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。肩の段等に不明瞭さを欠くがKIa式に位置付けられる。



第 42 図 10号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

部のすばまりは強く古い要素を示している。内面はナデ仕上げであるが胴上部内面に二列にわたって径2cm程のタタキアテ具痕と思われる凹みが横に連続している部分がある。外面はミガキであるが、口縁下沈線の上部はハケ目の後ナデ、底部には指圧痕様にみえる凹みがあるが、これはタタキ痕もしくはハケ目の痕跡をナデ消した結果と思われる。灰黄色を呈するが、胴部に黒斑が認められる。胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を含み、焼成は良好。

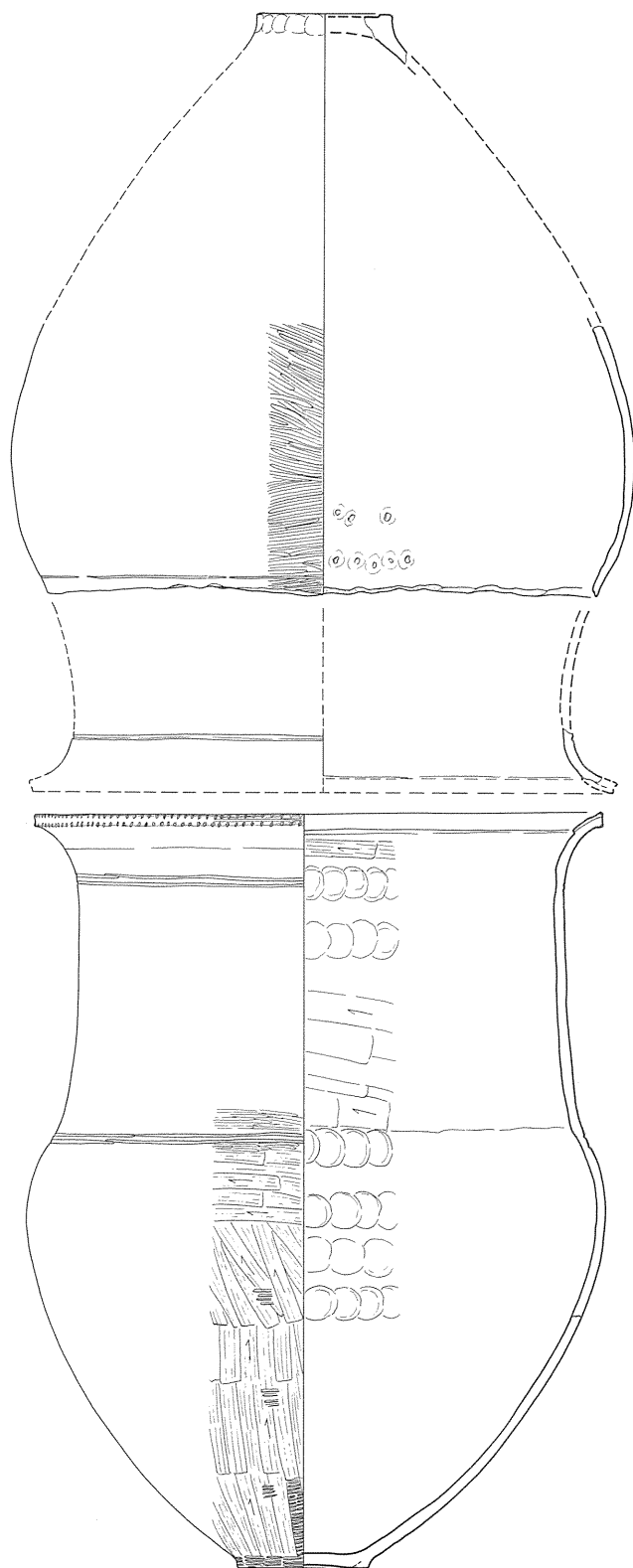
下甕はほぼ完形品である。器高80.5cm、口径61.4cm口頸部内面の最小径50.8cm、胴部最大径62.5cm、底径14cm。口縁内面には粘土帯を貼付し段をつくる。口縁端の上下にはへらによる刻目を施す。口縁下と肩部には2条の沈線をめぐらす。頸部は強くすばまり、胴部はふくらみ壺の形態をよく残し、古い要素を示している。橋口の編年によるKIa式で大形甕棺として最古のものである。内面の胴部下半は擦過の後ナデ、胴部上半には径4cm程の円形の凹みが四列にわたって横に連続している。タタキのアテ具痕と思われるが肩部下の手の届きにくい個所で擦過、ナデ等が弱いことによってよく観察できるものとする。頸部は強い擦過であるが口縁下に二

10号甕棺墓 (第42図)

10号甕棺墓の主軸はN-86°-Wでほぼ東西方向、傾斜角は46°ときつい。現状での墓壇の大きさは75×69cmである。上部は削平されており甕棺を埋置するための穴の部分しか残っていない。甕棺の傾斜角にあわせて深さ65cm以上の斜壇を掘り、下甕を据え、口・頸部を打ち欠いた上甕を被せた覆口式の合せ口甕棺である。人骨については歯のみしか取上げられなかった。中橋氏によると熟年以上の個体で、性別不明という結果が出ている。

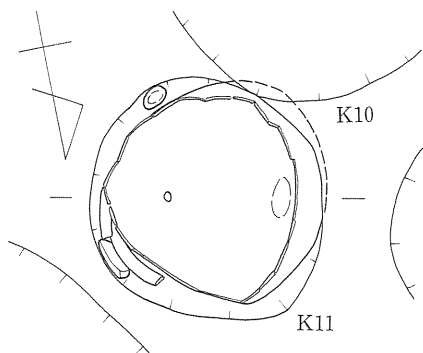
10号甕棺 (第43図)

上甕は口・頸部を打ち欠きかつ上半部を欠失した状態で出土したが、口縁部・底部の残欠等も出土した。高さは80cmをいくらか越すものと復原できる。口縁内面は剥落しているが粘土帯を貼付した痕跡が明瞭である。口縁下および肩には沈線1条をめぐらしている。口縁と肩部から類推すると頸部



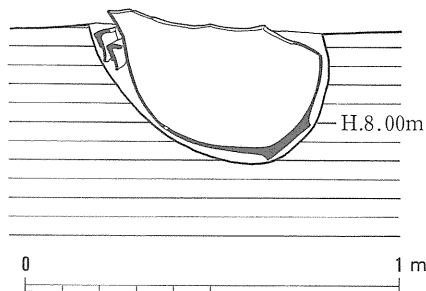
列にわたってアテ具の痕跡が認められる。口縁内面の段の部分はヨコナデ。外面の口・頸部はナデ，肩部以下は擦過を施こすが部分的にタタキ痕が残り，底部にはよく残っている。このタタキ痕は日常容器にみられる通常の小形のものである。内面は灰黄色，外面は灰黄色若しくは明黄色を呈するが，内面の頸部下半から底部にかけて黒色有機物が付着している。又外面の胴下半部を中心にして黒塗りの痕跡が明瞭に認められる。又頸から肩にかけてとその反対側の頸から胴上半にかけて大きな黒斑が認められる。胎土には石英粒・雲母等を含み，焼成は良好。

第 43 図 10号甕棺実測図 (縮尺1/8)



11号甕棺墓 (第44図)

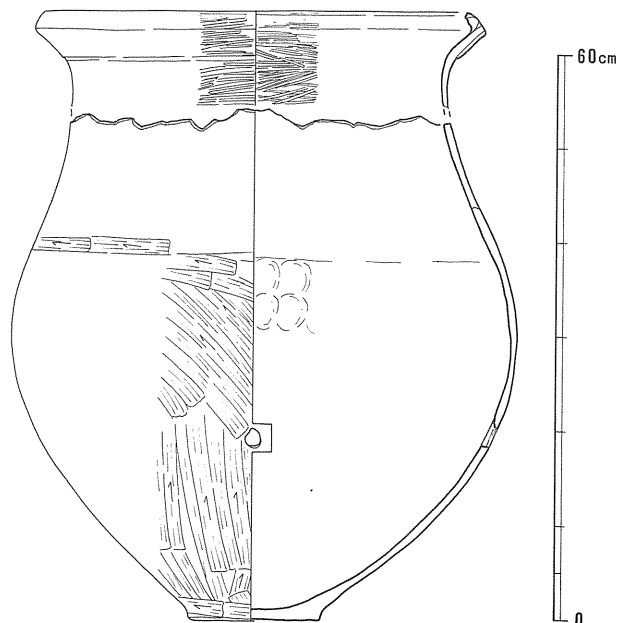
11号甕棺墓の主軸はN-79°-Wとほぼ東西方向といてよい。傾斜角は52°と強い。現状の墓壙は64×64cmのほぼ円形を呈する。上部を削平されており上甕があったか否かわからないが単棺の可能性が高い。墓壙は甕棺がやっと納まる程の穴を掘って、口縁を打ち欠いた甕を裾え、打ち欠いた口縁は頸の下部に置いている。胴中位程のところに穿孔を施している。甕棺内からは人骨等は検出されなかった。



11号甕棺 (第45図)

口縁を欠いているがほぼ完形に復原できる。復原器高は65cm程、打ち欠き部までの現存高は54.6cm、口縁径45cm、打ち欠き部径41.7cm、胴部最大径53.6cm、底径は14.1cm。口縁内側に内傾する部分を上乘せし複合口縁を呈する。口縁外側には段をつくり、頸部はすばまり、胴部は張り古い要素を示す。板付II(古)式の大形壺を転用したものである。内部の頸以下はナデ仕上

第 44 図 11号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

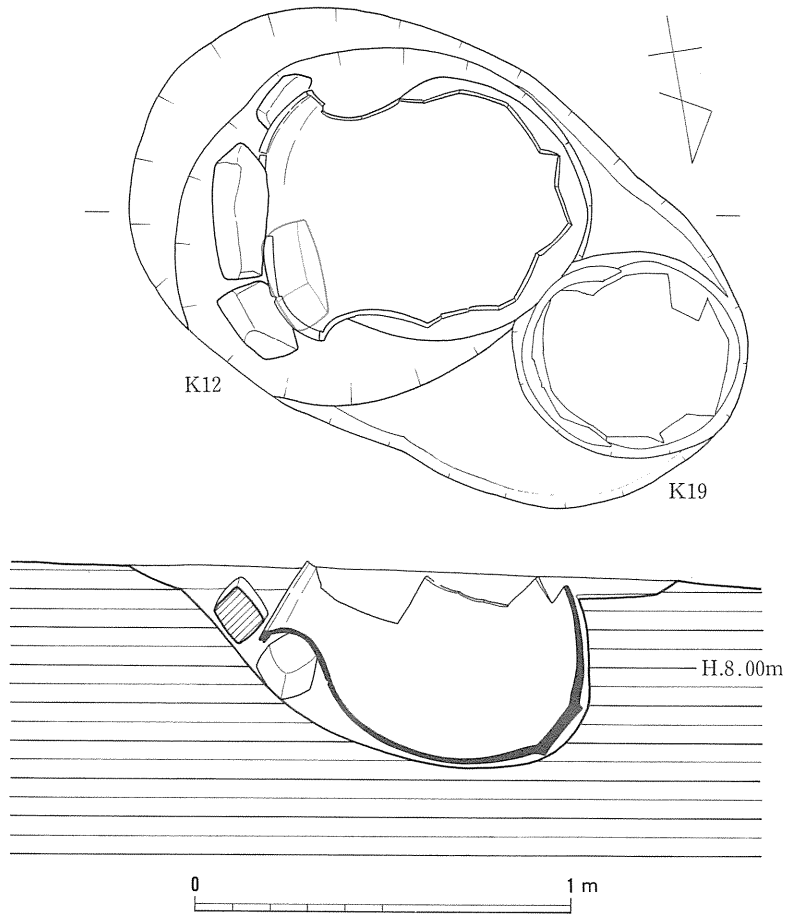


であるが、肩部内面には二列にわたって径4cm程の凹みの連続がありタタキアテ具痕と思われる。口縁部の内面から外面の頸部上半はミガキ、肩部以下は擦過を施す。底部から20cm程の高さのところ径2cm程の外から穿孔した穴がある。茶褐色を呈するが胴部上半に大きな黒斑があり、その反対側の肩部に小黒斑が認められる。又胴部下半を中心にして黒塗りの痕跡が認められる。胎土には砂粒・雲母等を多く含み、焼成は良好。

第 45 図 11号甕棺実測図 (縮尺1/8)

12号甕棺墓 (第46図)

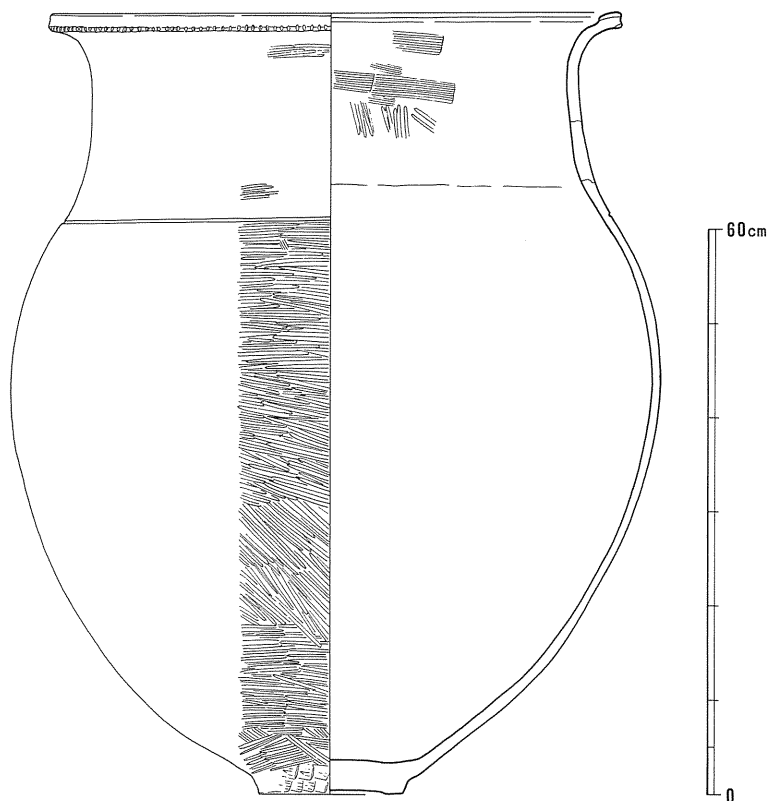
12号甕棺墓の主軸はN-81°-Wではほぼ東西方向である。傾斜角は40°である。墓壙は本来二段掘りであるが上段の墓壙の大部分は削平を受けておりわずかに残るのみである。下段は甕棺がやっとはいり程の斜壙を掘り、甕棺を据え、頸の下、口縁の外に花崗岩の角礫4個を置いている。頸の下の礫は木蓋のおさえにしたものかと思われる。単棺と思われる。棺内からは歯等を検出したが、取上げられたのは数個の歯冠のみであった。中橋氏の鑑定によれば熟年で男性の可能性があるとの結果がでている。



第 46 図 12号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

12号甕棺 (第47図)

12号甕棺は器高83.0cm, 口径60.8cm, 頸部内面の最小径49.5cm, 胴部最大径69.4cm, 底部径15.6cm。口縁内面には粘土帯を貼付し段をつくる。口縁端の下端には板木口による刻目が施される。頸部は強くすぼまり、胴は張り、肩の位置は高く、沈線1条をめぐらす。壺の形をよく残しており古い要素を示す。KIa式に属する。内面の胴部から頸部下半には丁寧なナデが加えられている。頸部下半の上位はミガキが残っている。頸部上半はハケ目の後ナデ、口縁上端はナデ、その他の口縁内外はヨコナデ、頸部から肩にかけてはミガキの後ナデ仕上げ。胴部はミガキ、底部は擦過の後ナデ。内面は灰黄色を呈するが胴部下半に黒色有機物の付着が認められる。



第 47 図 12号甕棺実測図 (縮尺1/8)

壙底には長さ160cm, 幅68cm程の扉板を二つに割って二段重ねに敷き底板としている。二つ折りの扉板の79cm, 幅68cm。その底板に遺体を置き甕棺をさかさに被せたものであるが、底板が浮いてこないように孔2個を穿ち棒杭2個でとめている。人骨の検出はできなかったが、硬玉製の勾玉・丸玉等が出土した。

13号甕棺 (第49図)

13号甕棺は胴下半部以下を欠失しており、現存高44.8cm, 口径63.9cm, 頸部内面の最小径は52cm, 胴部最大径は70.6cm。口縁上端には粘土帯を貼付し段をつくる。口縁端の上下にはへらによる刻目を施す。頸部は強くしまり、肩には1条の沈線をめぐらす。胴部は張り、肩の位置も高く、壺の形をよく残しており古い要素を示している。KIa式の甕棺である。胴部内面はナデ、頸部内面はハケ目の後ナデを加えているが、ハケ目がよく残る。口縁内外はヨコナデ、外面の頸部はナデ、胴部はミガキがよく残る。灰黄色を呈するが頸部から胴部上半にかけて大きな黒斑がある。胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。

外面は淡黄色を呈するが、胴下半部には黒塗りの痕跡が明瞭に残る。又頸部から胴上半部にかけてまだら状の黒斑がみられる。胎土には石英・雲母等を含み、焼成は良好。

13号甕棺墓

(第48図)

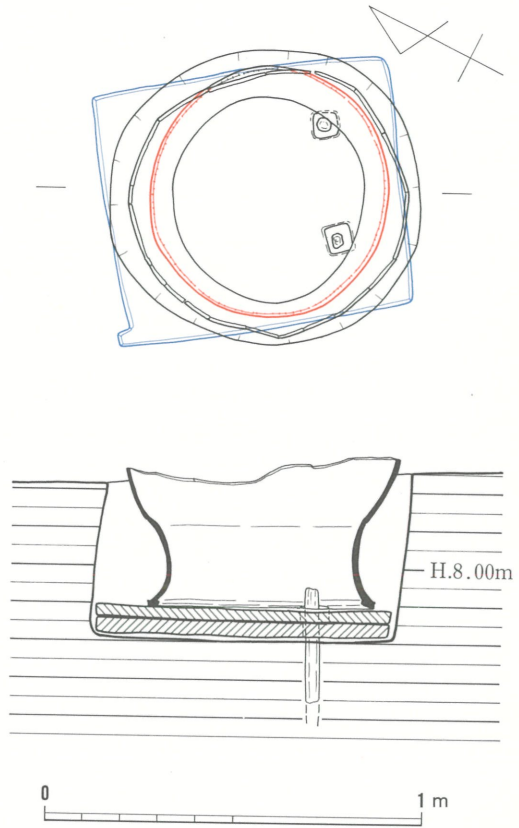
13号甕棺墓は倒立棺である。したがって甕棺の主軸は決め難い。現状での墓壇の大きさは82.5×78cm程の円形を呈するが、

扉板 (第50図)

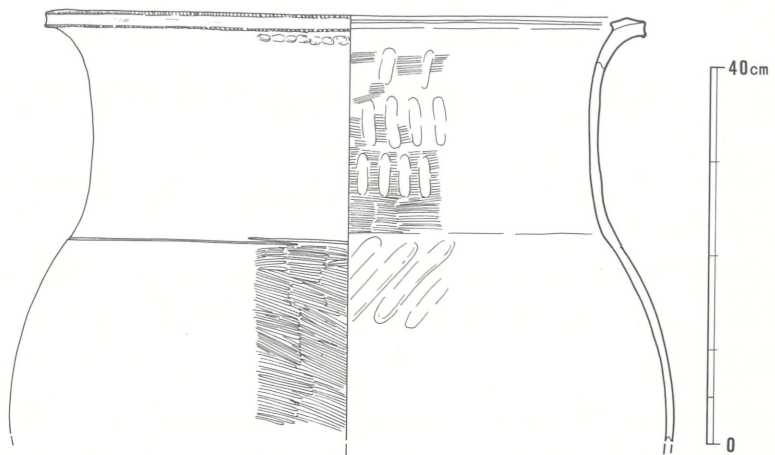
甕棺の底板に用いられていたものである。真中で切断して用いているが、復原長は158.8cm、軸の部分を含めると164cm程と思われる。幅は上部で67.3、中程で66.6cm、下部で66cm、上の軸の長さは3.2cm、下の軸は残存長1cm、復原長は2cm程である。厚さは3.5~3.9cm程であるが、一部薄いところで3cm程のところがある。軸は上下ともに回転した痕跡はあるがあまりすれてなく、使用頻度は少なかったものと考えられる。下部に3.6×3.2cmと2.8×2.5cmの方形の孔2個があり両者ともに木質のものがつめてあるが用途についてはわからない。真中の切断面の両側には5.5×6.5cm、6.0×5.0cm、8.2×5.3cm、4.7×4.1cm程の方形に近い孔が穿たれているが、これは上述したように底板が浮かないように棒杭を打つための孔である。表面にははつりの痕跡が不明瞭ではあるが認められる。また上半分には甕棺口縁の圧痕が明瞭に観察される。その

径は61.5×63.9cmのほぼ円形を呈している。材質については専門家の鑑定を得ていないが広葉樹の類で一見したところカシ材ではないかと思われる。

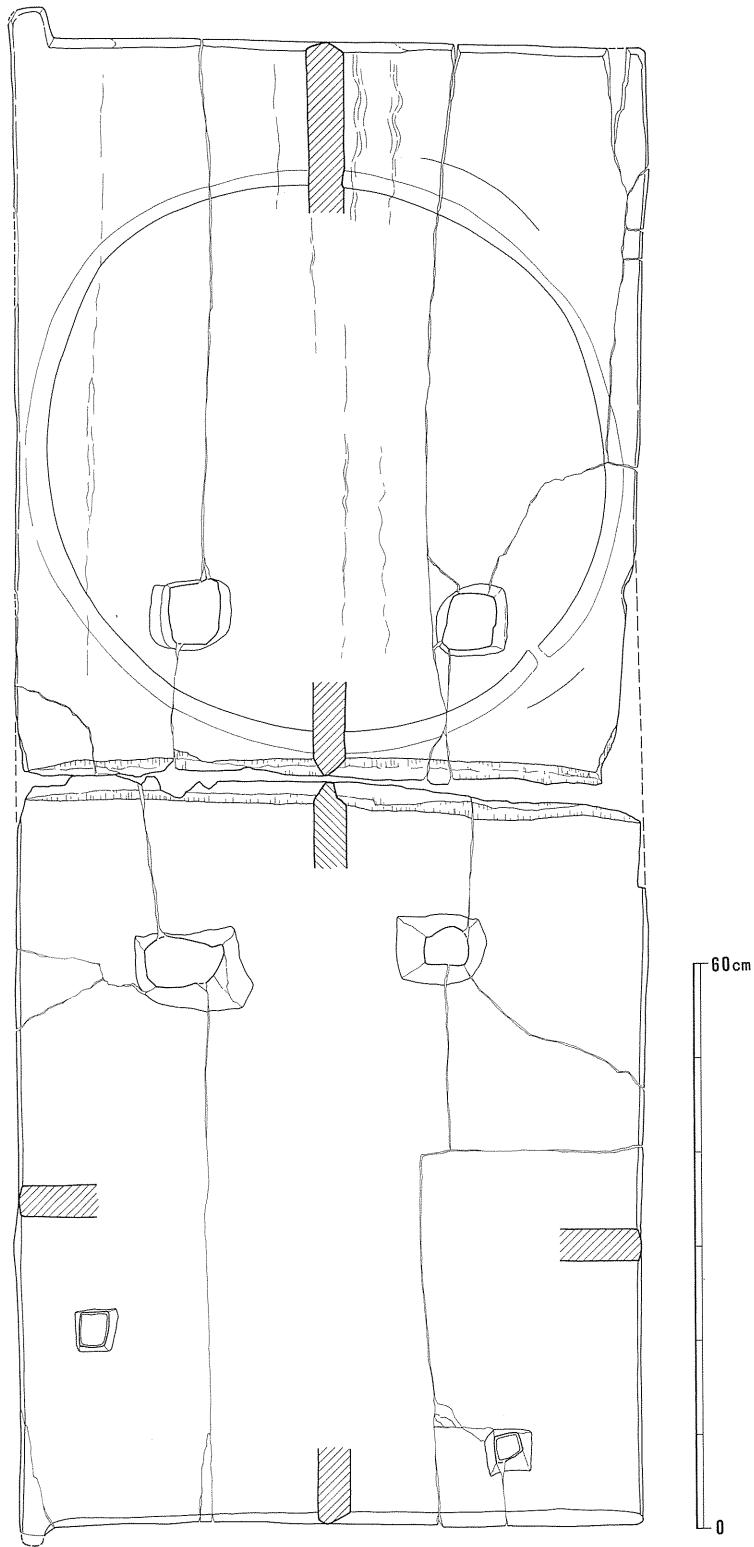
13号甕棺墓の底板に用いられた扉板は掘立柱建物に用いられたもので



第 48 図 13号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)



第 49 図 13号甕棺実測図 (縮尺1/8)



第 50 図 木器実測図 1 (縮尺1/8)

あることはまちがいないであろう。土器とセットになっておりKIa式つまり板付II(古)式に位置付けられ紀元前3世紀中頃と推定されるもので現在のところ国内で最古のものといえる。弥生早期の大形掘立柱建物も近くの上深江西遺跡で調査されており、さらに古いものの発見も期待されるところであるが、この扉板は特筆に値するものである。

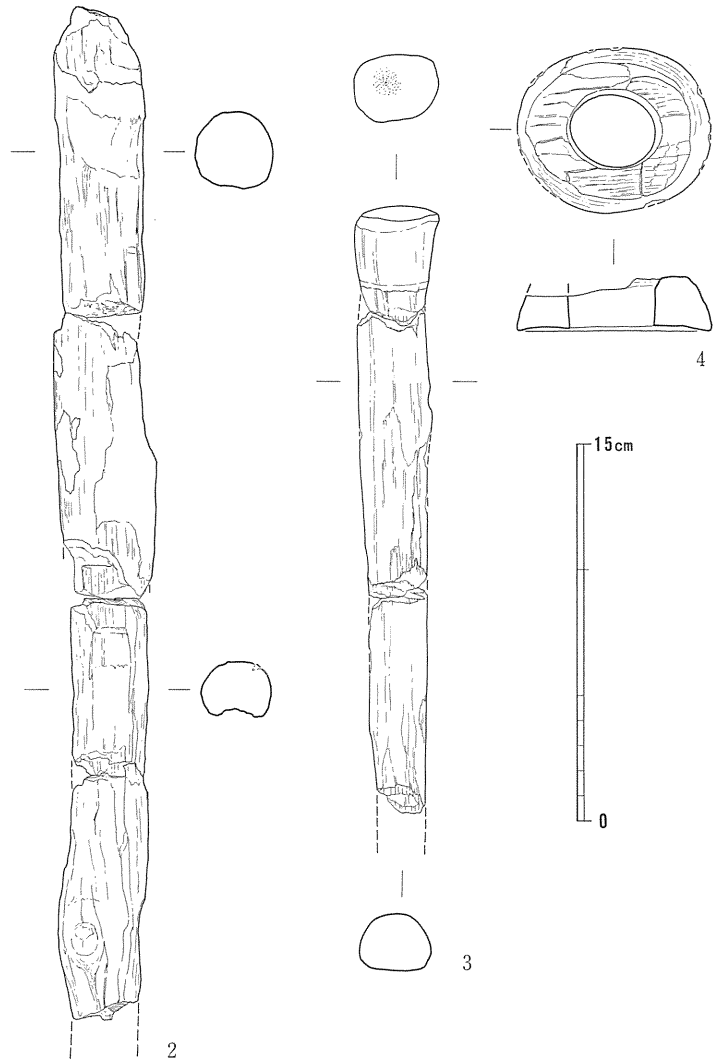
棒杭 (第51図2・3)

2本とも先端部までは取り上げられなかった。

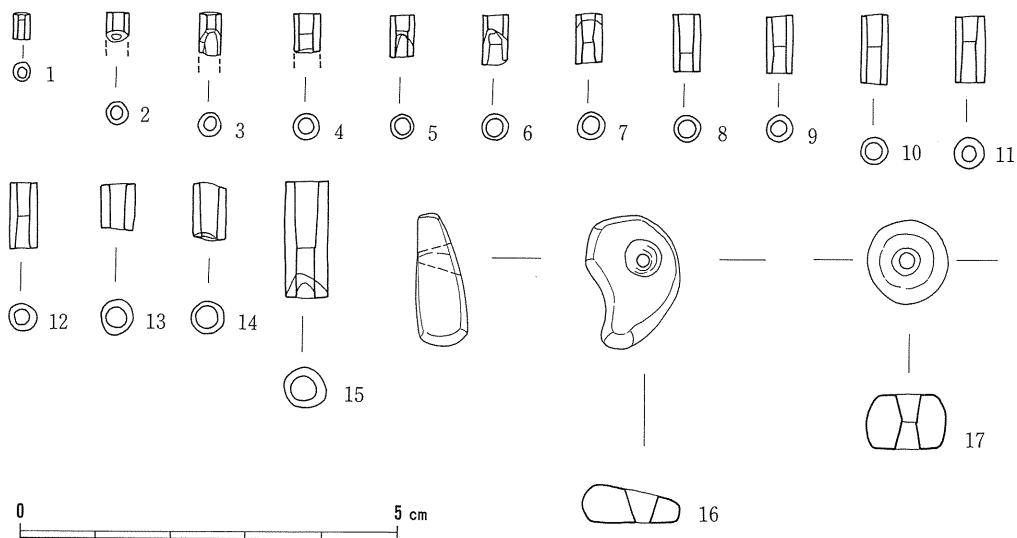
2は扉板より頭の部分が4.5cm程出ており、扉板にはまっていた部分はすれたように若干細くなっている。残存長

40.1cm、径は中程で3.9cm、頭部で3.6cm、扉板にはまっていた部分で3.3cm程、先端部で3cm程である。中程には樹皮が残っており、その分だけ径が大きいものと思われる。広葉樹の類でカシ材と思われるが専門家の鑑定は得ていない。

3も同じく扉板を用いた底板をとめていた棒杭である。残存長24.2cm、径は上端で3.4×2.6cm、上部の断面図の部分で2.9×2.3cmで先端に向かって次第に細くなり、先端側では2cm程となっている。底板より出ている部分は3.2cmで痕跡が明瞭に残っている。広葉樹類でカシ材と思われるが専門家の鑑定は得ていない。断面からみるとやや扁平で、頭部のつくり等からも加工が加



第 51 図 木器実測図 2 (縮尺1/3)



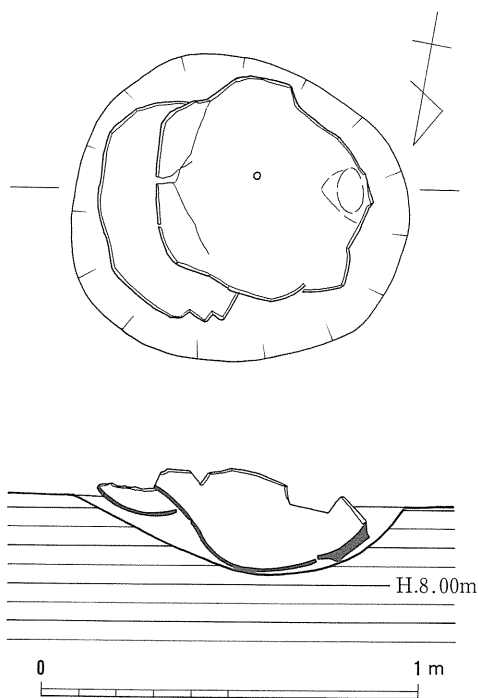
第 52 図 甕棺内出土の玉類 1~15…K-5 (縮尺1/1)
16・17…K-13

えられていることは明らかである。もともとは石斧等の柄であった可能性も考えられる。

玉類 (第52図16・17)

16は硬玉製の勾玉である。形としては定形化されているとはいえない。色は緑半分、白半分である。孔は断面からの穿孔。長さ17.5mm、幅11.9mm、厚さ2.5~6.6mm、孔径2.0~4.6cm。

17は暗緑色を呈する硬玉製の丸玉である。孔は両面からの穿孔である。径は10.8~11.0mm、高さ7.3mm、孔径は3~3.7mm。



第 53 図 14号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

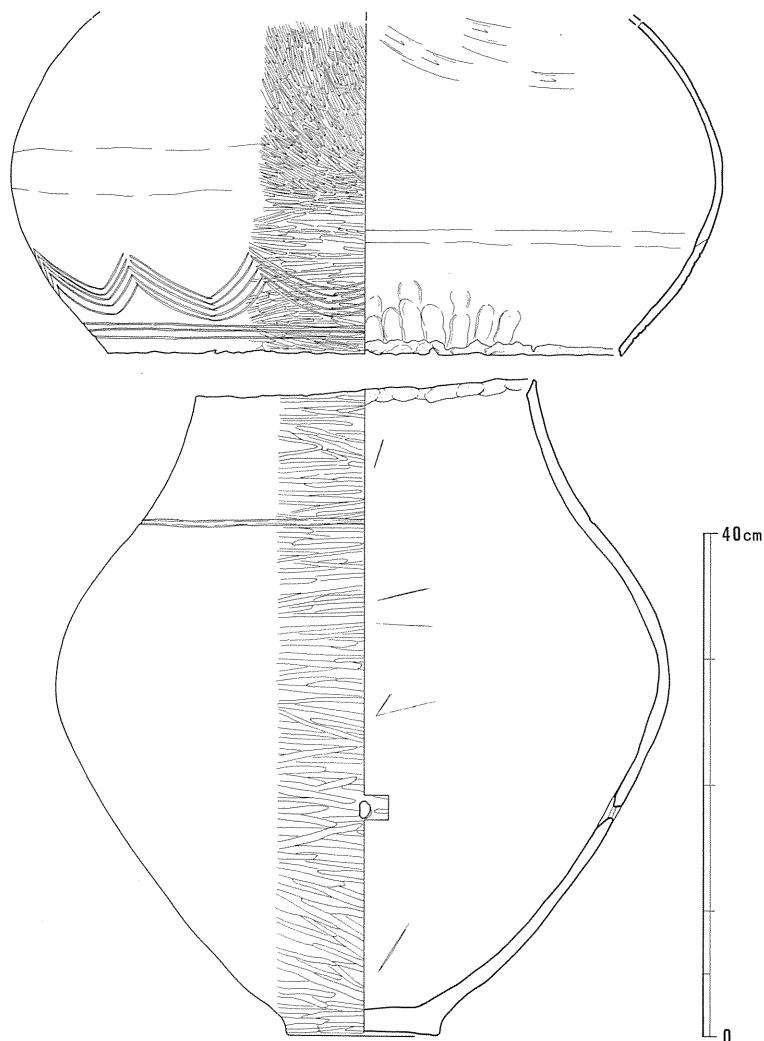
14号甕棺墓 (第53図)

14号甕棺墓の主軸はN-79°-Wでほぼ東西方向、傾斜角は30°~35°の間でややゆるい。現状での墓壇は91×80cm程のほぼ円形を呈しているが、かなり上部を削平されている。口縁を打ち欠いた日常容器の大壺を下甕に用い、口・頸部を打ち欠いた日常容器の大形壺を蓋として被せた覆口式の合

せ口甕棺である。棺内からは人骨等は検出できなかった。下甕には穿孔がみられた。

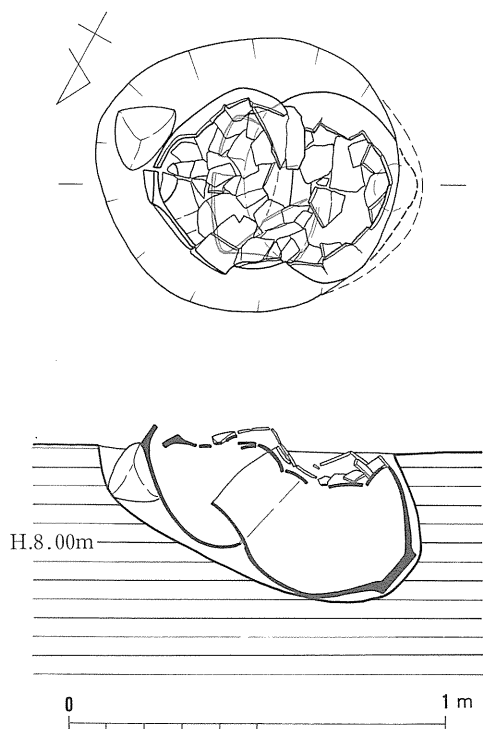
14号甕棺 (第54図)

上甕は口・頸部を打ち欠き、底部近くは欠失している。打ち欠き部の復原径41cm、胴部最大径は56.5cm。内面の胴部下半は擦過、胴部上半はナデ、肩部には指圧痕が残る。外面はミガキ、肩部には3条の沈線をめぐらし、沈線下には5条の複線山形文を施す。文様構成からすると古い要素であり板付I(新)式と位置づけてよからう。内面は灰褐色、外面は褐色を呈するが一部に黒斑がみられる。胎土には砂粒・角閃石・雲母等を少量含み、焼成は良好。



第 54 図 14号甕棺実測図 (縮尺1/6)

下甕は口縁部を打ち欠いている。現存高51.0cm、打ち欠き部の口径27.3cm、胴部最大径49.0cm、底径は12.3cm。頸は強くすぼまり、肩部には太い沈線1条をめぐらす。また肩の位置、胴部最大径の位置は高い。内面はナデ風の擦過を施すが、肩部内面には一見指圧痕様にみえるタタキアテ具の痕跡が残る。外面はミガキ、内面は灰黄色、外面は茶褐色を呈するが胴中位には黒斑もみられる。胎土には砂粒・角閃石・雲母等を多く含み、焼成は良好。胴のやや下位に外から穿孔した径1cm程の孔がある。古い要素を残しており上甕との関係からいえば板付I(新)式もしくは板付II(古)式に位置づけられる。



第 55 図 15号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

15号甕棺墓 (第55図)

15号甕棺墓の主軸はN-62°-W, 傾斜角は37°程である。現状での墓壙は81×73cmでほぼ円形を呈する。本来は二段掘りで一方に甕棺を埋置するための穴を掘ったものと思われるが上段は削平を受けたものと思われる。口縁を打ち欠いた日常容器の大形壺を埋置し, 口・頸部を打ち欠いた日常容器の大形壺を蓋として被せた覆口式の合せ口甕棺である。上甕棺の底部には花崗岩の角礫を置き安定をはかっている。甕棺内からは幼児の歯のみが検出された。

15号甕棺 (第56図)

上甕は日常容器の大形壺の口, 頸部を打ち欠いて使用している。現存高37cm, 打ち欠き部径34.0cm, 胴部最大径47.0cm, 底径13.0cm。内面はナデ風の擦過, 外面はミガキ。淡茶色であるが一部に淡褐色を呈するところがあり黒塗りの痕跡かとも

思われる。又胴部上半の両側に黒斑が認められる。胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を多く含み, 焼成は良好。

下甕は口縁を打ち欠いている。現存高51.4cm, 打ち欠き部径33.0cm, 胴部最大径50cm, 底径14cm。肩部には1条の沈線をめぐらす。内面はナデ仕上げであるが, 胴部上半には径2.5~3cm程の円形の凹みの連続が3列にわたってみられる。タタキアテ具痕と思われる。又頸部には縦方向の指頭圧痕がみられ, 指紋・爪跡等が残っている。外面はミガキであるが底部に長さ3.5cm程, 幅2.0~2.3cm程の通常みられるタタキ痕が左下→右上方向に残っている。内面は茶色, 外面は明茶色もしくは茶褐色を呈するが胴部上半に大きな黒斑がその反対側には小黑斑のいくつかが認められる。胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を多く含み, 焼成は良好。板付II(古)式に位置づけられる。

16号墓 (第57図)

土壙墓と思われるが, 西側は発掘区外にかかっており全掘していない。主軸はN-22°-E。長さは153cm, 深さは15cm程度。床面には杉皮かと思われる樹皮様のものを敷いている。南端に

は長さ47cm, 厚さ13cm程の石を置いている。

17号墓は発掘区外にその大部分がかかるので掘りあげなかった。

18号甕棺墓 (第58図)

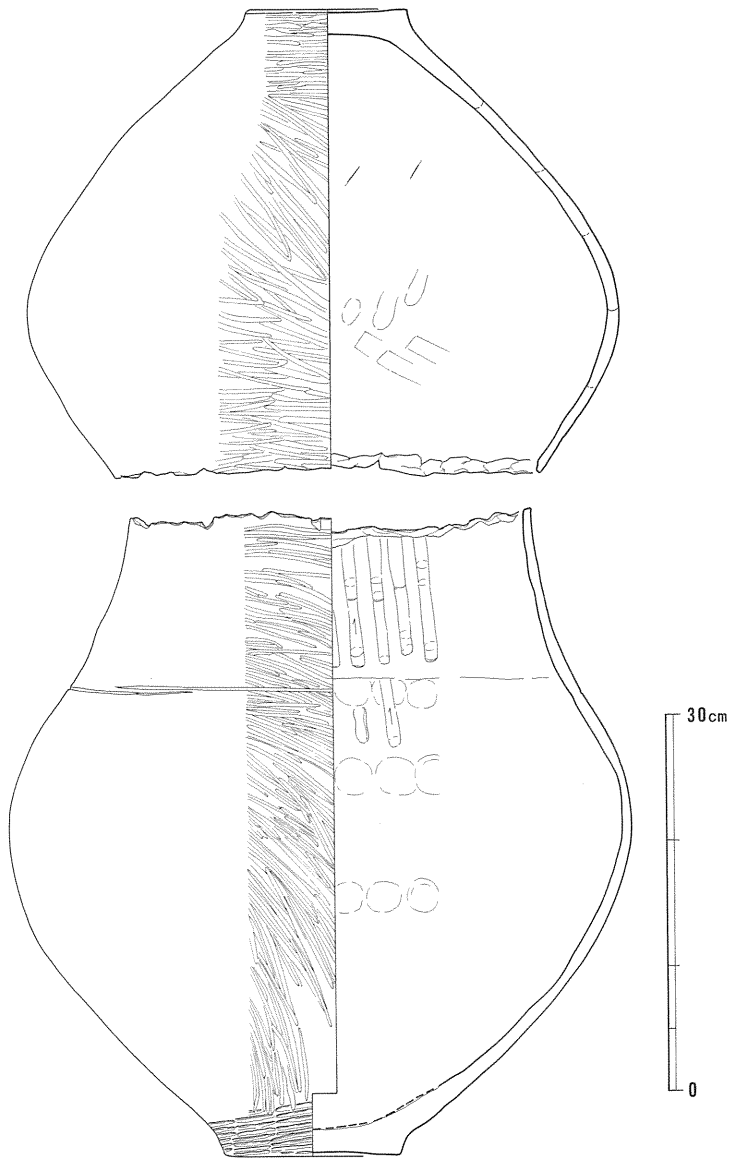
18号甕棺墓の主軸はN-12°-E, 傾斜は57°ときつい。現状での墓壙は48×46cmの不整円形を呈する。口・頸部を打ち欠いた日常容器のやや大形の壺を埋置し, 肩部を打ち欠いた日常容器のやや大形の壺を蓋として被せた覆口式の合せ口甕棺である。下甕の胴中位には穿孔が施されている。棺内からは人骨等は検出されなかった。

18号甕棺 (第59図)

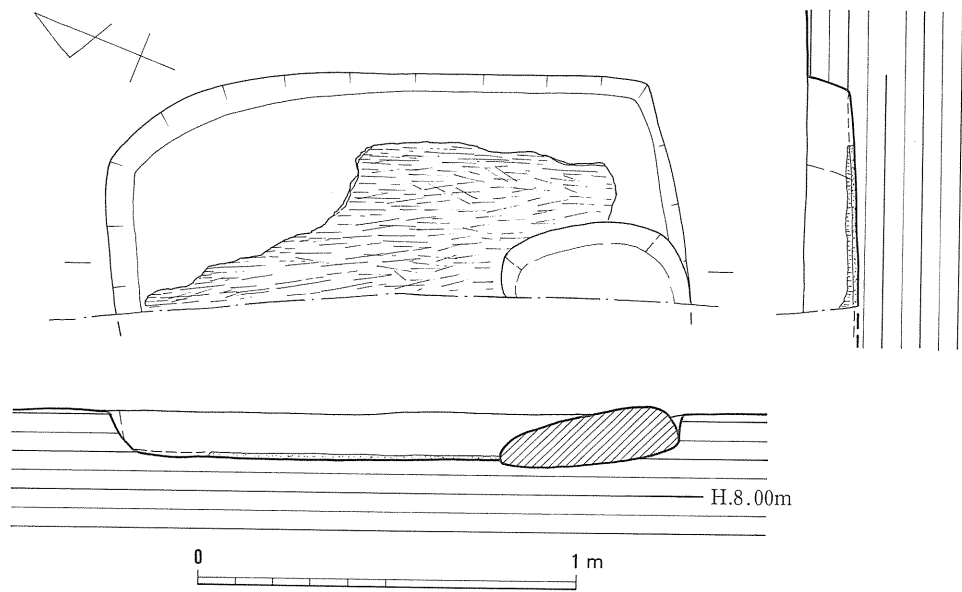
上甕は肩部で打ち欠き, 底部を欠失している。打ち欠き部の復原径は29.0cm, 胴部最大復原径は34.

0cm, 肩には貝殻施文の羽状文と沈線2条がめぐっている。内面はナデ仕上げであるが, 小さな円形の凹みの連続および横方向のハケ目工具が残ることから, タタキ→ハケ目→ナデの順で調整が施されている。外面はミガキ。内面は淡茶褐色, 外面は茶褐色を呈するが, 胴中位に黒斑が認められる。胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を多く含み, 焼成は良好。

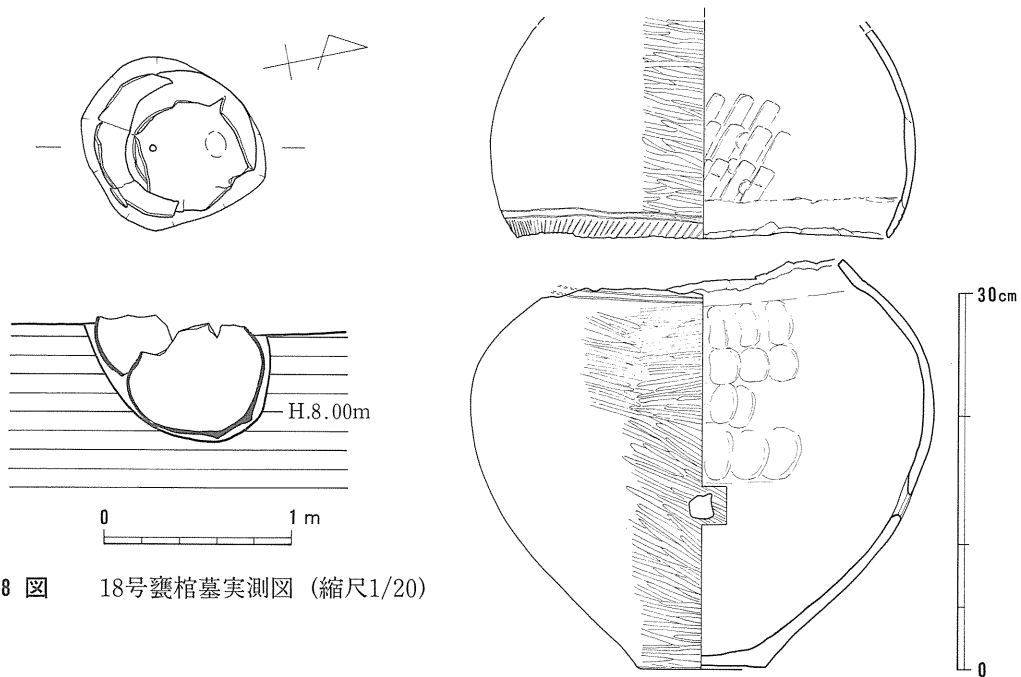
下甕は口・頸部を打ち欠いている。現存高は32.8cm, 打ち欠き部径24.0cm, 胴部最大径は37.



第56図 15号甕棺実測図 (縮尺1/6)



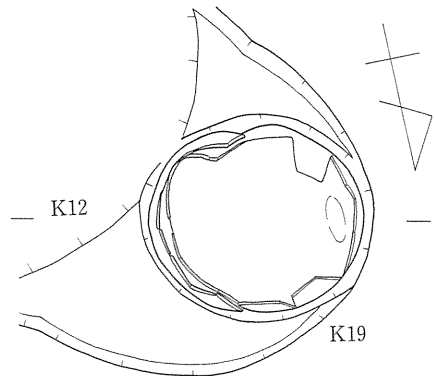
第 57 图 16号墓实测图 (縮尺1/20)



第 58 图 18号甕棺墓实测图 (縮尺1/20)

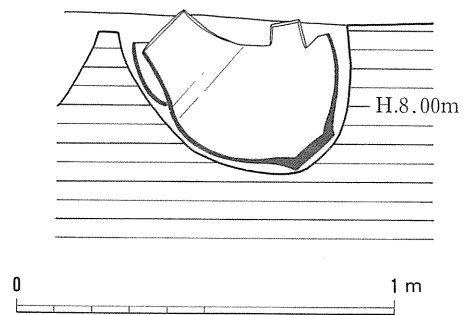
第 59 图 18号甕棺实测图 (縮尺1/6)

0cm。肩部には2条の沈線をめぐらし、段をつくっている。内面はナデ仕上げであるが、径3～4cm程の円形もしくはナデによって変形し指頭圧痕様にみえる。タタキアテ具の痕跡が認められる。外面はミガキ。内外ともに茶褐色を呈するが胴中位から下半にかけて大きな黒斑2ヶ所とその反対側には小黒斑2ヶ所が認められる。胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。胴中位に3cm四方の孔が外から穿孔されている。板付II(古)式に属する。



19号甕棺墓 (第60図)

19号甕棺墓の主軸はN-78°-Eで東西方向に近い。傾斜角は50°程でかなりきつい。墓壇は二段掘りになっているが12号甕棺墓と重複しており全容はわからないが上段は長円形であったと思われる。幅は95cm程、深さは5cm程で上部をかなり削平されている。墓壇の西端に下甕を裾えるための62×55cm程のほぼ円形の穴を掘り、口縁を打ち欠いた



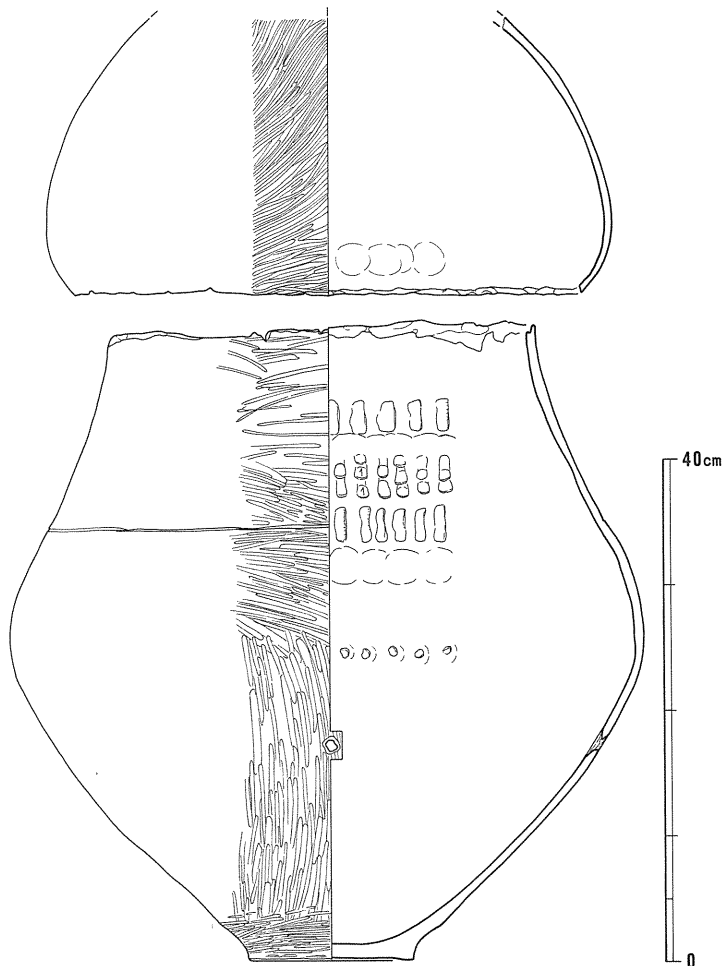
第60図 19号甕棺実測図 (縮尺1/20)

日常容器の大形壺を下甕として埋置し、肩部から上を打ち欠いた日常容器の大形壺を蓋として被せた覆口式の合せ口甕棺である。棺内からは歯のみしか取上げられなかったが、中橋氏の鑑定によれば3・4歳の乳児で、歯冠の大きさから男性の可能性が高いという結果が出ている。

19号甕棺 (第61図)

上甕は肩部で打ち欠かれ、下半部を欠失している。打ち欠き部の復原径40.4cm、胴部最大部の復原径45cm。内面はナデ仕上げであるが、打ち欠き部直下には径2.5cm程の円形の凹みの連続が認められる。タタキのアテ具痕かと思われる。外面はミガキ。暗赤色の丹塗りを施しているが、一部に黒斑が認められる。胎土には砂粒・角閃石・雲母・赤色粒子等をやや多めに含み、焼成は良好。

下甕は口縁部を打ち欠いている。現存高50.8cm、打ち欠き部径33.4cm、胴部最大径50.4cm、底径13.1cm。肩部には1条の沈線をめぐらす。内面はナデ仕上げであるが、胴部上半には、2列にわたってタタキアテ具の痕跡が残る。胴部最大径付近のものはナデが強く、アテ具痕とはわからない程に変形しているが2～2.5程のほぼ等間隔で横に連続しておりタタキアテ具痕であ



第 61 図 19号甕棺実測図 (縮尺1/6)

ることは明らかである。肩部内面のものは径3cm程の円形の凹みの連続であり、通常みられるタタキアテ具痕である。頸部内面には横方向のハケ目がナデ消され、起点の深い部分のみが残ったものと、縦方向の指圧痕があり、爪跡が残るものがある。外面はミガキ。内面は明褐色、外面は明茶色を基調とするが、胴上半の両側に小黒斑があり、胴部片側の頸部から底部近くにかけて大きく赤変してまだら文様になったいわゆる赤斑部分がある。胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を含み、焼成は良好。胴部中程に径7~8mmの外から穿孔した孔が認められる。板付II(古)式に位置づけら

れる。

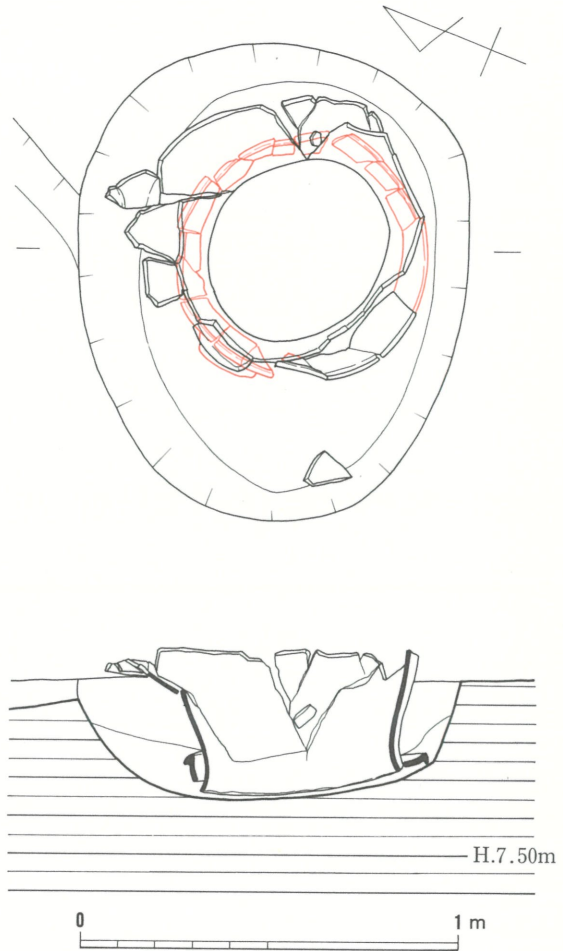
20号甕棺墓 (第62図)

第4トレンチの発掘で検出した甕棺墓で倒立甕棺である。したがって甕棺墓の主軸については決め難い。傾斜はやや北側に低くなっている。現状での墓壙の大きさは125×104cmの長円形を呈する。墓壙を掘り、遺体を置き、甕棺をさかさかさに被せたものである。口縁部は割れて頸部がその中にずれこんでいる。西側の口縁下には10×20×7cm程の角礫を置き固定した部分もある。また壙底には12~13cm程の厚さに粘土をつめ、甕棺の固定をはかっている。胴部から上部は削平を受けていた。棺内からは頭頂骨が検出された。中橋氏の鑑定では成人であるが性別・

年齢等については不明という結果がでている。

20号甕棺 (第63図)

口径64.5cm, 胴部最大径64.5cm, 現存高は52cm。口縁上端には三角粘土帯ともいべきものを貼付している。頸・肩には段・沈線等による明瞭な区分はないが、頸は強くすばまり、胴部は張り壺の特徴をよく残しており古い要素を示す。KIa式に位置づけられる。内面の頸・肩の境目付近には横方向の擦過の痕跡が残っているが、ナデを加えて仕上げている。外面は頸に甕棺に通常みられる大形のタタキ痕が一部にみられ、胴部にはハケ目もあり、肩を中心にしてミガキも認められる。胴部についてはさらにナデも加えられている。灰黄色を呈するが頸部には黒塗りの痕跡が認められ、また頸部から胴部にかけての大黒斑があり、その反対側の胴部にはやや大き目の黒斑がある。胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を多く含み、焼成は良好。



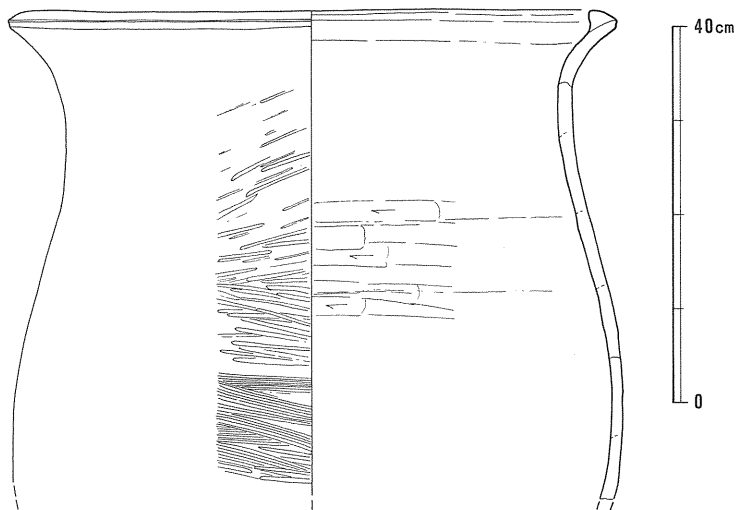
第 62 図 20号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

21号甕棺墓 (第64図)

21号甕棺墓の主軸N-53°-W, 傾斜角は35°程のものであるが、上部を削平されており、大半を欠失している。現状での墓壙の大きさは73×70cm程で円形を呈している。甕棺には穿孔がみられた。甕棺内からは歯の小片のみしか取上げられなかった。

21号甕棺 (第65図)

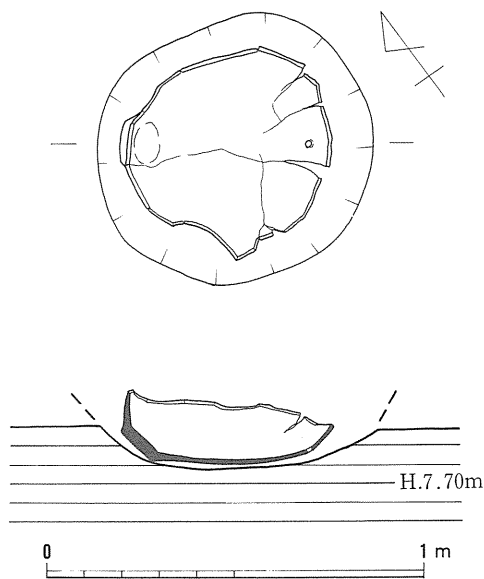
現存高は47.5cm, 胴部最大径53.2cm, 底径12.4cm, 復原高は60cmをこえるものと思われ、1号甕棺と同程度の大きさのものと思われる。甕棺専用か日常容器の転用が決め難いが、頸部のすばまりが日常容器としては弱いようにみられ、中形の甕棺と考えてよからう。したがってKIa式もしくはKIb式と位置付けてよい。内面はナデ仕上げであるが、胴部最大径付近に径1~1.5



第 63 図 20号甕棺実測図 (縮尺1/8)

cm程の円形の凹みの連続がありタタキアテ具痕と考えられる。肩部内面には指圧痕様の痕跡があるが、これは横方向ハケ目の起点痕付近の凹みがナデを加えられて変形したものと思われる。外面はミガキ。内面は明茶色、外面は明茶色および淡灰褐色でところどころ灰黒色を呈する。また胴部中位には丹塗りの痕

跡かと思われる部分がある。胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。胴部最大径付近に外から内へと穿孔した1.5×3 cm程の孔がある。



第 64 図 21号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

22号甕棺墓 (第66図)

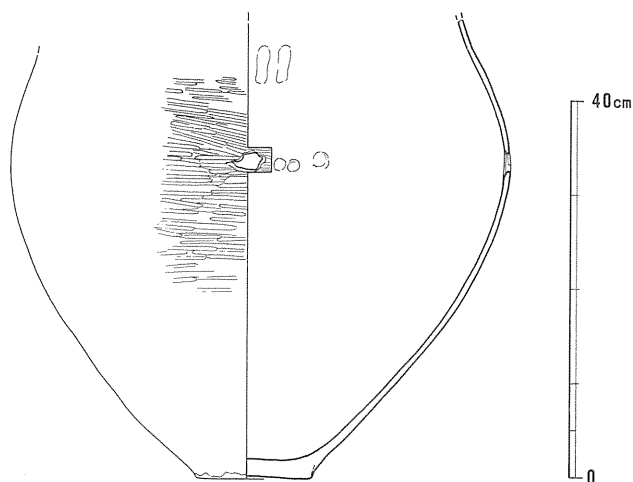
22号甕棺墓の主軸はN-10°-W、傾斜はほぼ水平である。現状での墓壙の大きさは86×68cm程で、長円形を呈する。合せ口甕棺で合せ口部の墓壙底は少し高く盛りあがっている。上部を削平されている。棺内からは人骨等の出土はなかった。

22号甕棺 (第67図)

上甕は日常容器の大形壺を転用したものである。図は略した。

下甕は口・頸部と胴部は直接接合しなかったので図上で復原した。口・頸部の残りは約3分の2周程、胴部の残りは約5分の2周程である。復原高53.5cm、口径30.9cm、胴部最大径は復原して43.3cm、復原底径は13cm。口縁外側は明瞭ではないが段を形成しており、古い要素を残す。板付II(古)式に位置付けてよい。口縁内面にはハケ目、ミガキが認められるが、内面の他の部分はナデ仕上げ。肩部内面には径3 cm程の円

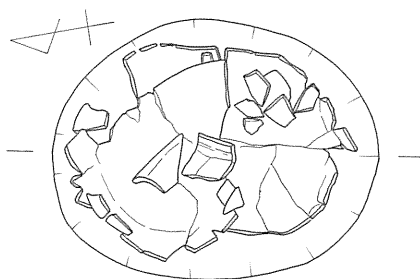
形の凹みの連続がみられタタキアテ具の痕跡と思われる。頸部内面は指圧痕が残る。外面はミガキであるが、口縁外側には一部ハケ目が認められ、ハケ目→ミガキの順で調整が施されている。淡黄色を呈するが頸部に小黑斑がある。胎土には砂粒・雲母・角閃石・赤色粒子等を含み、焼成は良好。



第 65 図 21号甕棺実測図 (縮尺1/8)

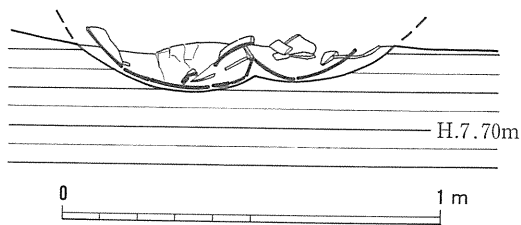
23号甕棺墓 (第68図)

23号甕棺は主軸を東西方向にとり、傾斜角は31°でややきつい。現状での墓壙の大きさは69×60cm程で、ほぼ円形を呈する。口縁を打ち欠いた日常容器の大形壺を下甕として埋置し、胴部上半以上を打ち欠いた日常容器の大形壺を蓋として被せた覆口式の甕棺である。上部を削平されており上甕の大半と、下甕の一部を欠失している。棺内からは人骨等は検出されなかった。



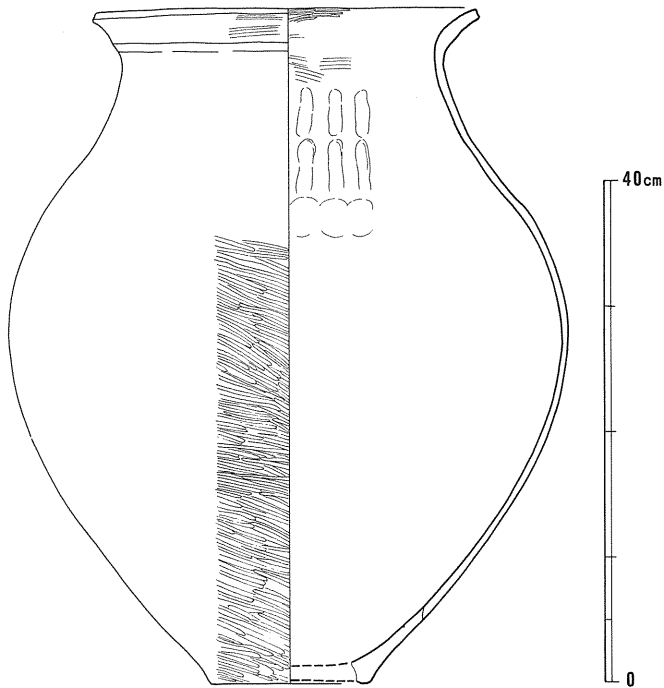
23号甕棺 (第69図)

上甕は胴部上半以上を打ち欠いている。内面には指圧痕が一部に残りナデ仕上げと思われるが器壁の剥落がいちぢるしい。外面はミガキ、内面は淡茶褐色、外面は丹塗りで暗赤色を呈する。また黒斑が3ヶ所に認められる。胎土には砂粒・雲母・赤色粒子等を含み、焼成は良好。



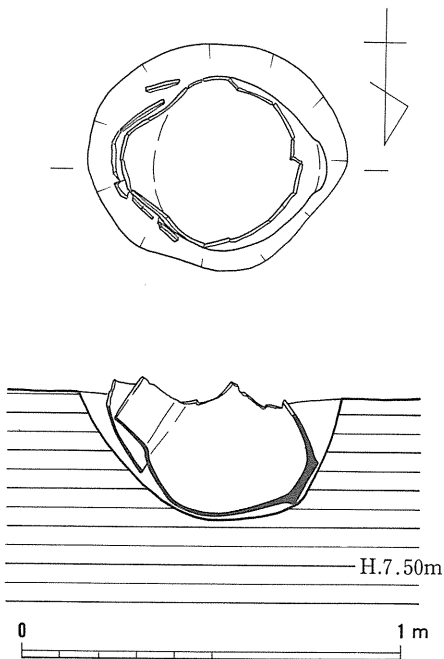
第 66 図 22号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

下甕は口縁を打ち欠いている。現存高54cm、打ち欠き部径25cm、胴部最大径46.5cm、底径13.4cm。頸部は強くすぼまり、肩は張り、胴部最大径も肩に近い高い位置にあり古い要素を示している。夜臼式に位置づけられるが、夜臼式としては古い形態をもつものである。肩には沈線状の段をつくっている。内面の底部はナデ、胴部の大半はハケ目、肩から頸にかけては横方向の

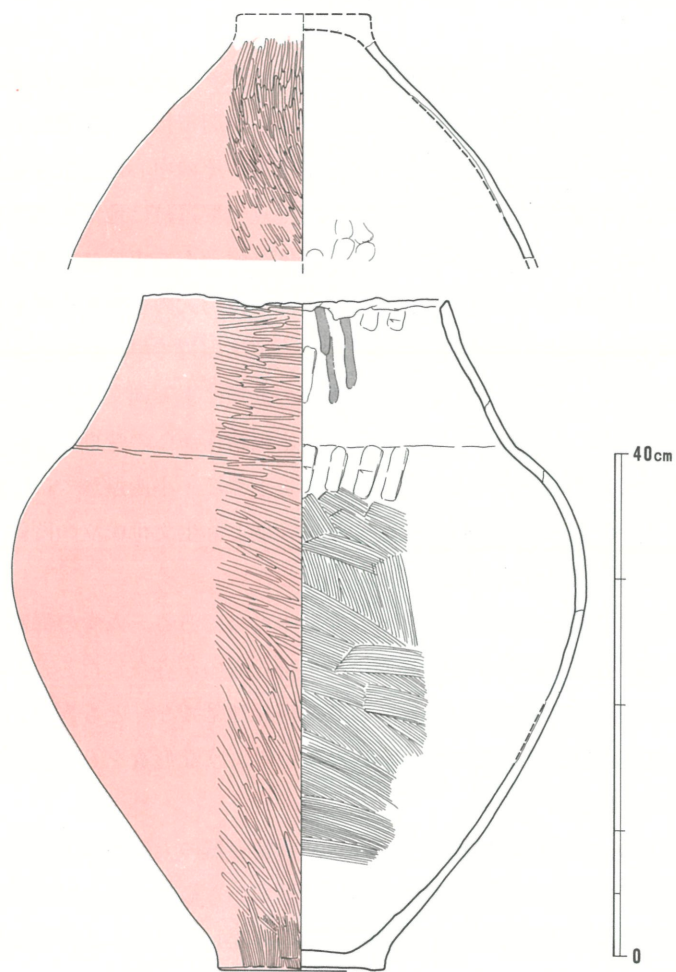


第 67 図 22号甕棺実測図 (縮尺1/6)

ハケ目の後でナデを加えているがハケ目の起点痕付近の凹みが変形して指圧痕様にみえる。外面はミガキ、底部付近はハケ目が残る。内面は茶褐色で一部に黒色部分あり。外面は丹塗りで暗赤色を呈する。丹は頸部内面にもたれている。また大きく頸から底ぶにかけて黒斑がありこの部分は黒色磨研のようになっている。胎土には砂粒・雲母・角閃石等を含み、焼成は良好。



第 68 図 23号甕棺実測図 (縮尺1/20)



第 69 图 23号葬棺实测图 (縮尺1/6)

3. まとめ

1. 石崎地区遺跡群のなかではかつて国道202号今宿バイパスの建設に伴なって発掘調査した曲り田遺跡は水稻耕作開始期のものとして唐津市菜畑遺跡、福岡市板付遺跡等とともに著名になっている。しかしながら石崎地区遺跡群のなかでは南半部がその中心地となると思われ、曲り田はその一角を占めるにすぎない。今回調査した第VI地点大坪遺跡は地形的条件等からその中心地の一部と考えてよかろう。当初述べたように今回は全面調査を実施せずトレンチ調査と一部の甕棺墓を発掘したのみであったが、甕棺墓のなかにも夜臼式の古い形態のものがあり、遺物のなかには弥生早期の各種土器・石器等があり、この地区周辺で早期の遺構が検出される可能性はきわめて大きい。さらに期待できることは橋口の分類による縄文晩期V・VI式の遺物も包含層上部でかなりみられ、この時期の遺構の検出、水稻耕作がこの時期まで遡り得るか検討できる可能性があることである。さらに西に隣接する上深江・小西遺跡では縄文後期の住居跡等も発掘されており、この石崎地区周辺は縄文後、晩期と弥生文化成立の関係を解明する有力な地域であると私は考えている。今後の調査に期待したい。

2. 発掘調査した甕棺は1基をのぞき大形甕棺成立期のものである。人骨の保存状態は悪かったが、いくらかを取上げることができ若干計測にたえ得るものが存在したことは幸いであった。福岡市雀居遺跡でも同時期の人骨が調査されており、砂丘地帯でなくとも人骨を調査できる展望が開けたことである。弥生文化成立を担った人々がどのような形質をもったものであるかさらに資料の増加することに期待したい。

また大形甕棺の成立当初から大形甕棺には成人が、日常容器の大形壺を転用した小形甕棺には乳・幼児が埋葬されていることが明らかになった。早期から板付I式までの段階では木棺墓には成人を、壺棺には乳・幼児をという埋葬法の分化が確立しており、これを大形甕棺成立に伴っても踏襲している。

3. 大形の扉板が甕棺に伴い、時期が確定できた。弥生前期中頃のもので現在のところ日本最古の資料である。掘立柱建物に伴うことは明らかであり、前期末～中期初頭頃に出現する大形掘立柱建物の先がけをなすものであろうか。掘立柱建物は西に隣接する上深江・小西遺跡で1間×6間、粕屋町江辻遺跡では1間×5間の弥生早期のものが調査されており、扉板は今後さらに古い資料が発見されることであろうが、現時点では特筆できることはいうまでもない。

III. 自然科学的調査

1. 福岡県糸島郡二丈町，大坪遺跡出土の弥生時代前期人骨

中橋孝博（九州大学大学院比較社会文化研究科）

はじめに

北部九州からは周知の様にこれまで大量の弥生人骨が出土し、その形態的特徴や地理的分布等については既に多くの研究がなされてきた。彼ら高顔、高身長を主特徴とする弥生人達が、渡来人、もしくはその遺伝的影響を受けた人々であるとの認識が近年急速に一般化しつつあり、日本人の成立過程で果たしてきたその役割の大きさについてもかなりのコンセンサスが得られつつあると言えよう。

しかしまたその一方で、これら北部九州弥生人に関し、依然として幾つか重要な疑問点が未解決のまま残されていることも指摘されている。その一つに人骨資料の時代的偏りという問題がある。つまり、数千体を越すと思われる当地出土の弥生人骨のほとんどは、弥生時代でも中期段階に入ったもので占められ、渡来人問題や弥生文化の伝播、発展を考える上でより重要な意味を秘めていると思われる弥生時代初期の資料がごく限られているということである。しかも、近年、糸島半島新町遺跡の支石墓下から出土した弥生時代初期の人骨が、いわゆる土着タイプの形質と抜歯風習をもっていたことが報告され（中橋・永井，1987）、この地で新しい時代への扉を開いたであろう初期渡来者達の実像については、むしろ疑問が深まった状況にあると言ふべきであろう。

1988年、上記の糸島半島にも近い福岡県二丈町所在の大坪遺跡から、問題の弥生時代前期所屬の人骨が新たに出土した。残念ながら回収されたのは歯のみで、骨格形態についての詳しい検討は出来なかったが、甕棺葬の開始期にあたる資料であり、時代的にも地理的にもその出土の意義は大きい。以下に検討結果を報告しておく。

遺跡・資料・方法

遺跡：大坪遺跡は、福岡市の西方、糸島郡二丈町石崎の田園地帯に見いだされた遺跡である。糸島半島の付け根にあたる当地域には、弥生時代開始期の様々な遺物、遺構が検出されたこと

で知られる曲り田遺跡があり、当遺跡はその曲り田周辺遺跡の一つとして(橋口, 1994), 1988年, 福岡県教育委員会によって発掘調査された。

人骨資料: 当遺跡からは21基の甕棺墓の他, 2基の土壙墓が検出されているが, 人骨片は10基の甕棺墓から回収された(表1)。K-20号甕棺で頭蓋片が出土した他は, いずれも歯冠のみで, 歯根や歯槽骨なども遺存していない。

所属時代: 当遺跡の甕棺は橋口による編年(1979)で甕棺墓の最も古い段階にあたるKIa期を中心として、板付I式期からKIb期までのもので占められている。前期末から中期にかけて急増する、いわゆる大型甕棺は存在しない。

方法: 歯冠サイズの計測は、藤田(1949)に従った。

結果

K-1号(男性?, 小児)

歯冠のみ遺存している。歯の計測結果を、比較群(北部九州弥生人, 西北九州弥生人, 縄文人: いずれも男性平均値)と共に表2に示した。

以下に歯式を示す。

$\begin{array}{cccccccc} / & (M^2) & / & P^2 & / & / & / & I^2 & / & / & / & / & (P^1) & P^2 & M^1 & / & / \\ / & (M_2) & M_1 & P_2 & (P_1) & / & / & / & / & / & / & / & (P_1) & P_2 & M_1 & (M_2) & / \end{array}$	$(() : \text{未萌出}, / : \text{欠落})$
--	-------------------------------------

第一大臼歯は少し咬耗が進んでいるが、第二大臼歯には殆ど咬耗が認められず、その他の小臼歯等の咬耗も弱い。乳歯の破片が見あたらないことなども考慮に入れて、小児期末ころのものと推察される。また、表2に示したように、歯冠サイズが非常に大きく、いずれも北部九州の男性平均値を上回っている状況から判断して、男性である可能性が高い。

K-3号(性不明, 幼児)

歯の小片のみ遺存。歯冠の形成状況から、幼児期の4, 5歳児と推察される。

K-4号(性不明, 成人)

歯の小片のみ遺存。咬耗の進行が認められ、若くはない個体であると考えられるが、詳しい年齢、性は不明である。

K-5号 (男性?, 幼児)

歯のみであるが、乳歯も含めてかなり遺存している。計測結果を表2に示す。

$\diagup \diagup (M^1)m^2 (P^1) (C) (I^2) (I^1)$	$(I^1) (I^2) (C) (P^1) m^2 (M_1) \diagup \diagup$
$\diagup \diagup (M_1)m_2 (P_2) P_1 (C) (I_2) (I_1)$	$(I_1) (I_2) (C) m_1 m_2 (M_1) \diagup \diagup$ $(P_1)(P_2)$

第一大臼歯に咬耗は見られず、歯冠の形成状況から、4、5歳の幼児骨と見なされる。歯冠サイズがかなり大きく、一応男性の可能性が考えられるが、K-1号ほど明確ではなく、やや疑問も残る。

K-10号 (性不明, 熟年)

歯冠の破片が幾つか遺存しているのみで、咬耗状態から熟年以上の個体と見なされるが、性などは不明である。

K-12号 (男性?, 熟年?)

歯冠部破片が幾つか遺存している。計測結果を表2に示す。

$\diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup I^2 \diagup$	$\diagup I^2 \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup$
$\diagup \diagup M_1 \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup$	$\diagup \diagup \diagup P_1 \diagup M_1 \diagup \diagup$

歯のサイズから男性の可能性があり、咬耗状態から熟年期のものであると推察される。

K-15 (性不明, 幼児)

乳歯を含め、歯冠部のみ遺存している。

$\diagup \diagup (M^1) \diagup \diagup \diagup (I^2) (I^1)$	$(I^1) \diagup \diagup \diagup \diagup (M^1) \diagup \diagup$
$\diagup \diagup (M^1) \diagup \diagup (C) (I_2) (I_1)$	$(I_1) \diagup \diagup \diagup m_2 (M_1) \diagup \diagup$

歯冠の形成状況から3歳前後の幼児と推察される。歯冠サイズは比較的大きいが、大臼歯はやや小さく、他に推定の根拠となる部分が見あたらないので、ここでは判定を保留しておく。

K-19号 (男性?, 幼児)

1本の乳臼歯の他、永久歯片が幾つか遺存している。計測値を表2に示した。

$\diagup \diagdown (M^1) \diagup \diagdown (C) \diagup \diagdown$	$\diagup \diagdown (I^2) (C) \diagup \diagdown (M^1) \diagup \diagdown$
$\diagup \diagdown (M_1) \diagup \diagdown (C) \diagup \diagdown (I_1)$	$\diagup \diagdown (I_2) \diagup \diagdown m_1 \diagup \diagdown (M_1) \diagup \diagdown$

歯冠の形成状況から、3、4歳の乳児と推察され、また、犬歯などの歯冠サイズがかなり大きく、男性の可能性が高い。

K-20号 (性不明, 成人)

唯一、5センチ大の頭頂骨片が遺存し、歯は存在しない。
骨厚がかなり大きく、成人のものと見なされるが、性、年齢の詳細は不明とする他ない。

K-21号 (性不明, 年齢不明)

歯の小片のみ遺存。僅かに確認できる歯冠咬合面の磨耗はごく弱いようで、まだ未成人の可能性はあるが、確言は困難である。

考察

大坪遺跡のある糸島郡一帯は、魏史倭人伝において伊都国としてその名を現す地域とされ、曲り田遺跡や新町遺跡など、弥生時代の幕開けを考察する上で重要な遺跡が散在する地域である。また、北部九州特有の大型甕棺墓の発生に関しても特に注目されている地域であり(橋口, 1993), 今回出土した人骨がその甕棺墓発生初期のものである点は、埋葬されている人骨形質との関連において重要な論点となろう。当地にて甕棺墓という特有の埋葬を発展させていった人々が具体的にどのような形質の特徴を持った人々だったのかを問うことは、いわゆる渡来人問題とも不可分の課題になるはずである。

残念ながら今回の出土人骨は保存状態が極めて悪く、ある程度検討できたのは歯のみに留まった。詳しい検討は今後の資料蓄積を待つほか無いが、しかし、今回得られた結果の中で注目される点として、ここでは特にその歯冠サイズの大きさを指摘しておきたい。近年、北部九州の甕棺から集中して出土するいわゆる渡来系の弥生人は、歯冠サイズが時代的、地理的に異なる他集団、特に先行の縄文集団との比較においてかなり大きいことが松村(1993)らの研究によって明らかにされている。表2での比較結果を見ると、大坪弥生人歯牙の多くは、西北九州弥生人(小山田, 他, 1995)や縄文人の平均値を上回っており、北部九州弥生人のそれさえ凌ぐ歯が目立つ。歯のみの出土例なので、性判定に問題が残されるが、この大坪弥生人の中に女性も混在している可能性のあることを考慮すると、そのサイズの大きさがより明確に認識されよう。

頭蓋骨や体部骨がまだ出土していない以上、結論は保留するしかないが、今回の結果は、甕棺葬発展初期の被葬者もまた、当地の弥生中期以降の人々と同様、高顔性、扁平性の強い高身長を主特徴とする人々であった可能性を示唆するものとする。先に大陸由来の支石墓の被葬者が土着系の人々であったことを報告したが(中橋、永井、1987)、そうした人々との関連も含めて、今後、弥生時代前期、特に縄文時代からの移行期の当地の住人形質の解明はさらにその意義を増していこう。いずれにしろ資料の蓄積が先決問題であり、容易ではなからうが、今後ともその努力の継続が望まれる。

謝辞

当人骨を研究する機会を与えて頂き、種々ご教示頂いた福岡県教育委員会の諸先生に深謝致します。

文 献

- 藤田恒太郎 (1949)：歯の計測基準について。 人類学雑誌, 61。
 橋口達也 (1979)：甕棺の編年の研究。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告, 30。
 橋口達也 (1993)：甕棺—製作技術を中心としてみた諸問題。考古学研究, 40。
 橋口達也 (1994)：曲り田周辺遺跡IV。二丈町文化財調査報告書, 7。
 Matsumura,H.(1994)：A microevolutional history of the Japanese people from a dental characteristics perspective. Anthropol.Sci.,102:93-118。
 中橋孝博・永井昌文 (1987)：福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨。志摩町文化財調査報告書：7。
 Oyamada,J., Y.Manabe, Y.Kitagawa, A.Rokutanda and S.Nagashima(1995):Tooth size of the protohistoric Kofun people in southern Kyushu, Japan.

表 1. 大坪遺跡出土人骨一覧

番 号	性	年 齢	時 期	甕棺サイズ	備 考
K-1	男?	小 児	板付II (古), KIa	中形	10-11歳
K-3	不明	幼 児	板付II (古-中)	小形	4-5歳
K-4	不明	成 人	KIb	大形	
K-5	男?	幼 児	板付II (古)	小形	4-5歳 管玉
K-10	不明	熟 年	KIa	大形	
K-12	男?	熟 年?	KIa	大形 (単棺)	
K-15	不明	幼 児	板付II (古)	小形	3歳前後
K-19	男?	幼 児	板付II (古)	小形	3-4歳
K-20	不明	成 人	KIa	大形 (単棺)	
K-21	不明	不 明	KIa~b	中形 (単棺)	未成人の可能性あり

表 2. 齒冠計測値の比較

	Ohtubo					N-Kyushu ¹⁾		NW-Kyushu ²⁾		Jomon ¹⁾	
	K-1	K-5	K-12	K-15	K-19	Yayoi♂		Yayoi♂		♂	
						N	Mean	N	Mean	N	Mean
Mesiodistal											
UI1	-	9.0	-	8.8	-	57	8.81	18	8.21	108	8.51
UI2	-	8.0	7.5	7.4	-	50	7.44	16	6.93	106	7.10
UC	-	-	-	-	9.0	65	8.17	13	7.59	68	7.55
UP1	8.2	-	-	-	-	77	7.59	20	6.89	153	6.90
UP2	8.3	-	-	-	-	67	7.10	18	6.57	183	6.46
UM1	11.3	10.5	-	10.4	10.7	68	10.68	18	10.55	190	10.28
UM2	-	-	-	-	-	60	9.86	15	9.63	172	9.12
LI1	-	5.9	-	5.7	5.9	54	5.44	11	5.03	61	5.27
LI2	-	6.2	-	6.2	7.0	71	6.19	18	5.39	91	5.72
LC	-	-	-	7.1	-	85	7.24	25	6.65	112	6.73
LP1	7.9	-	8.0	-	7.8	79	7.38	27	6.72	172	6.91
LP2	8.3	-	-	-	-	84	7.49	24	6.95	190	6.94
LM1	12.6	11.7	-	11.1	11.7	66	11.82	14	11.72	210	11.61
LM2	12.1	-	-	-	-	67	11.35	17	11.18	201	10.80
Buccolingual											
UI1	-	-	-	-	-	68	7.56	18	7.37	125	7.29
UI2	-	-	-	-	-	60	6.87	16	6.71	118	6.69
UC	-	-	-	-	-	72	8.68	13	8.26	71	7.96
UP1	10.3	-	-	-	-	77	9.74	20	9.43	153	9.27
UP2	9.9	-	-	-	-	72	9.52	20	9.13	184	9.00
UM1	12.1	11.7	-	11.2	11.9	76	12.06	19	11.82	189	11.78
UM2	-	-	-	-	-	61	11.84	14	11.49	175	11.45
LI1	-	-	-	-	-	59	6.02	11	5.88	79	5.93
LI2	-	-	-	-	-	79	6.47	18	6.22	108	6.20
LC	-	-	-	-	-	86	8.13	25	7.63	115	7.44
LP1	8.5	-	8.0	-	-	83	8.35	28	7.64	173	7.79
LP2	9.1	-	-	-	-	86	8.76	23	8.24	193	8.33
LM1	11.4	-	12.1	-	10.7	79	11.33	15	11.39	218	11.23
LM2	11.7	-	-	-	-	70	10.73	17	10.74	207	10.47

1) Matumura (1994) 2) Oyamada et al, (1995)

石崎大坪遺跡出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本 田 光 子

はじめに

石崎大坪遺跡出土の4号甕棺内に残っていた赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、蛍光X線分析を行った。

墳墓出土例に関する今までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄：赤鉄鉱（Hematite）を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）：辰砂（Cinnabar）を主成分とする朱の二種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹がある。これら三種類の赤色顔料を考えて分析を行った。

1980年度に調査された石崎曲り田遺跡11号甕棺出土の赤色顔料についても顕微鏡観察を行ったので、今回併せて報告する。この赤色顔料については、九州大学医療技術短期大学部教授上原周三氏により、蛍光X線分析がなされており朱であることが報告されている。（1983）。

試 料

赤色物を実体顕微鏡下で調整（混入土砂等の除去）し、針先に付く程度の量について顕微鏡観察を行った。その残りをそのままX線分析に供した。通常、X線分析用の粉末試料は、研和して粒度を揃えるのだが、試料の量が非常に少ないので、遺物としてそのまま残すために取って粒度は揃えなかった。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・落射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。

試料には赤色顔料として朱の特徴を持つ粒子を認めた。やや角張った形状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等である。朱の粒子径は、大坪試料が約0.5～70 μm 、曲り田試料が約0.5～60 μm の範囲にあり、分布は不均一である。ベンガラの特徴（質感、透明度等）を持つ赤色顔料粒子は認められなかった。ただし、きわめて微粒のものについてはどの赤色顔料であるか光学顕微鏡だけからは判断しにくい、経験的には朱であるように見受けられた。また、今回の2試料の特徴として、これらの微粒子

が比較的大きな粒子にまぶされたような状態で観察された。(写真参照)

蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。九州産業大学総合機器センター設置の理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置システム3511を用い、X線管球；クロム対陰極，印加電圧；50kV，印加電流；50mA，分光結晶；フッ化リチウム，検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。

試料には赤色顔料の主成分元素としては水銀と鉄が検出された。この他主として混入の土砂に由来する元素は省略した。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断することになる。本試料では水銀に対する鉄の強度比は極めて小さいので、赤色の由来と考えられる主成分元素は水銀であると考えられる。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

結 果

顕微鏡観察，蛍光X線分析の結果から，4号甕棺内から出土した赤色物は粒子径範囲約0.5～70 μm の朱である。石崎曲り田遺跡11号甕棺出土の朱と似通った粒子径分布を持つ。

考 察

甕棺墓出土朱は時期によりその粒子径分布が異なる可能性がある。調査例が少ないので確かでないが，前原市三雲遺跡出土1号甕棺，春日市門田遺跡北24号甕棺等前漢鏡を伴う時期の甕棺内出土朱は非常に細かく，粒子径範囲は約0.5～20 μm と狭いが，福岡市飯氏遺跡の後漢鏡を伴う後期中頃の7号甕棺出土朱はそれに比べて粒子径範囲が約0.5～30 μm と広い(写真)。今回の2試料はそれらよりさらに粒子径範囲は広くしかも均一性に欠けることが認められる。また，福岡市拾六町ツイジ遺跡出土漆塗の木製腕輪(前期後半)の塗膜断面から観察される朱の粒子径分布は本例に似ていると思われるが，微粒子は除外されているようでもある。

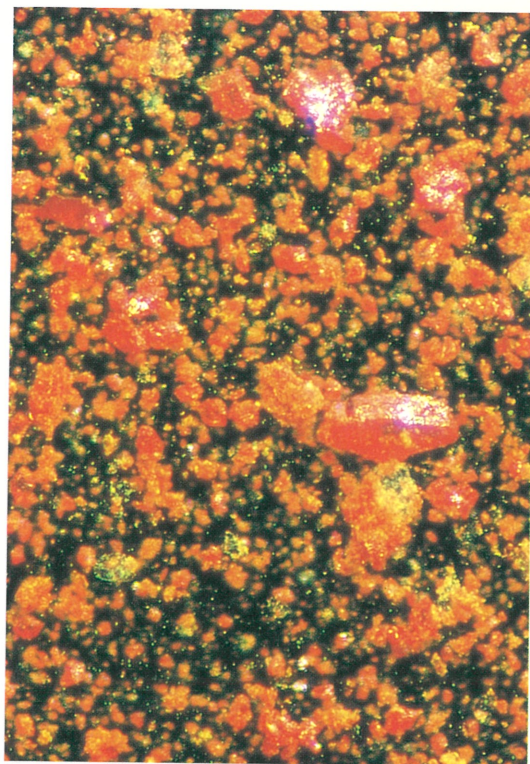
赤色顔料の入手や流通，精製や使用方法等を考える上で，非常に興味深い事例であり，今後の類例の調査に期待される。

謝 辞

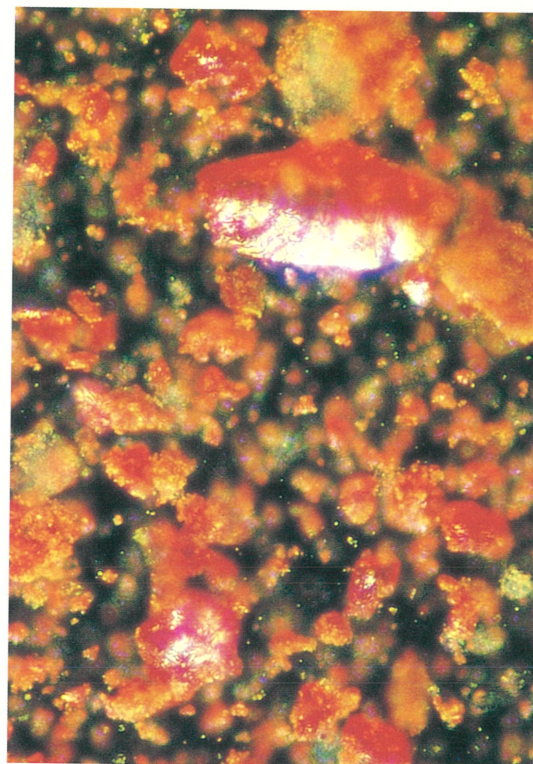
石崎大坪，曲り田遺跡出土赤色顔料調査の機会を載いた福岡県教育委員会橋口達也氏に感謝致します。X線分析は九州産業大学総合分析センターで行ったもので，ご協力いただいた同センター助手古賀啓子博士に感謝致します。



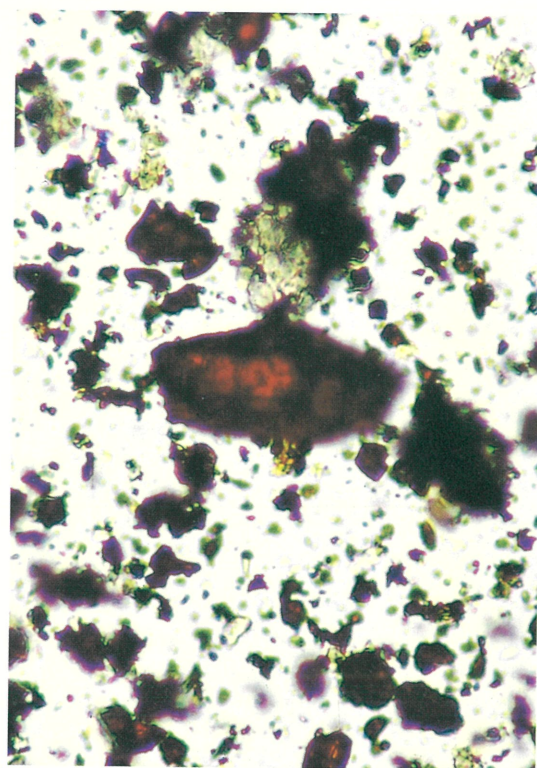
1. 石崎大坪4号甕棺出土朱 (約10倍)



2. 石崎大坪4号甕棺出土朱 (約185倍)

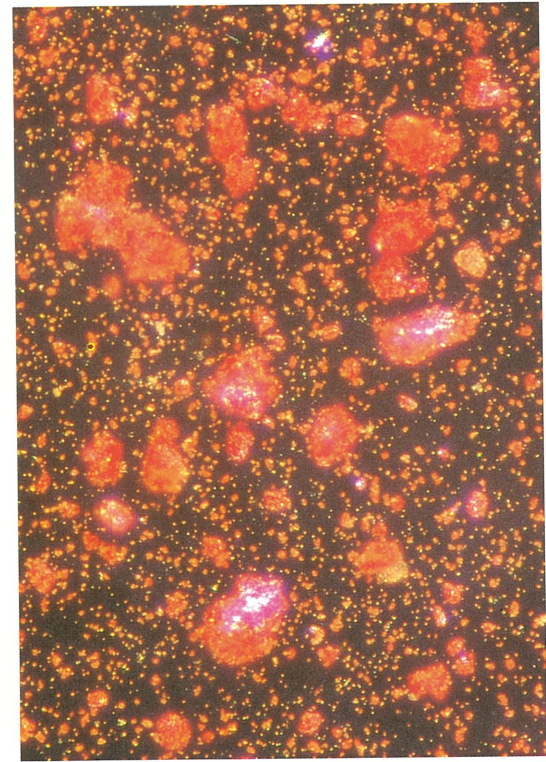


3. 石崎大坪4号甕棺出土朱 (約370倍)

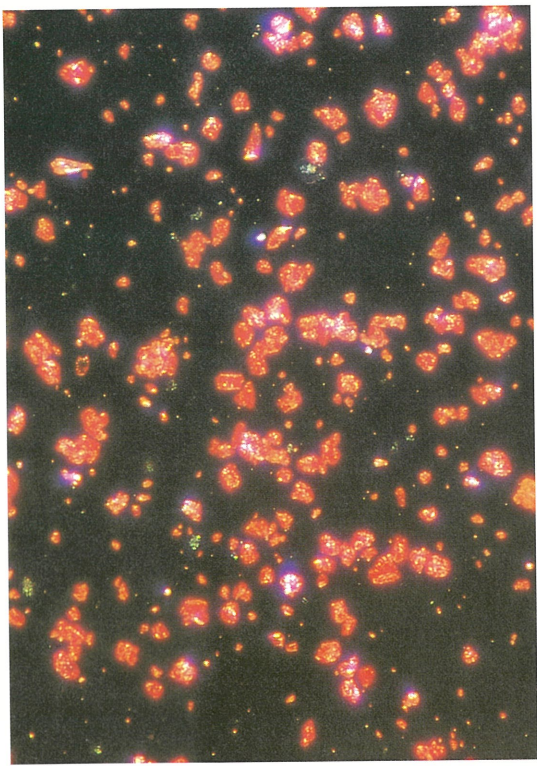


4. 石崎大坪4号甕棺出土朱 (約370倍)

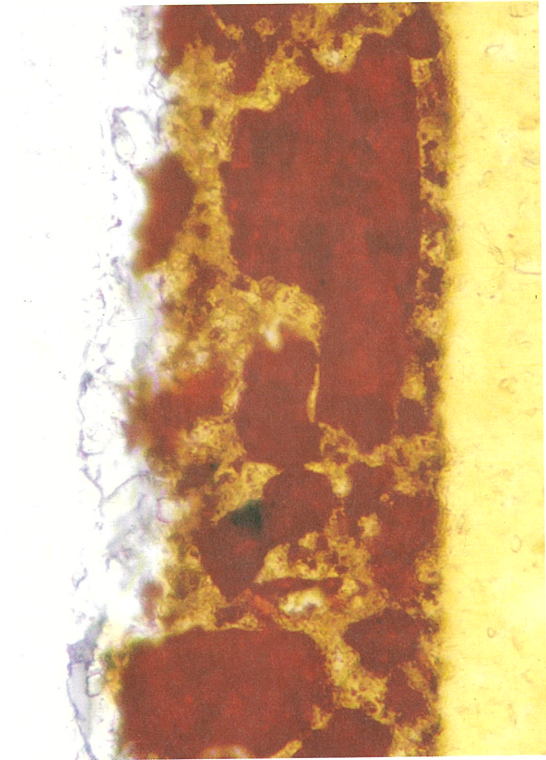
出土赤色顔料の顕微鏡写真



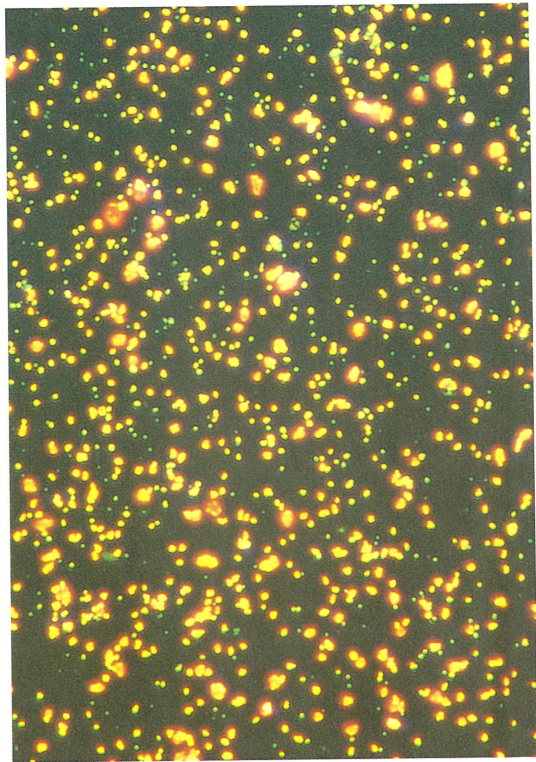
5. 石崎曲り田遺跡11号甕棺出土朱 (約185倍)



6. 飯氏遺跡3次調査7号甕棺出土朱 (約185倍)



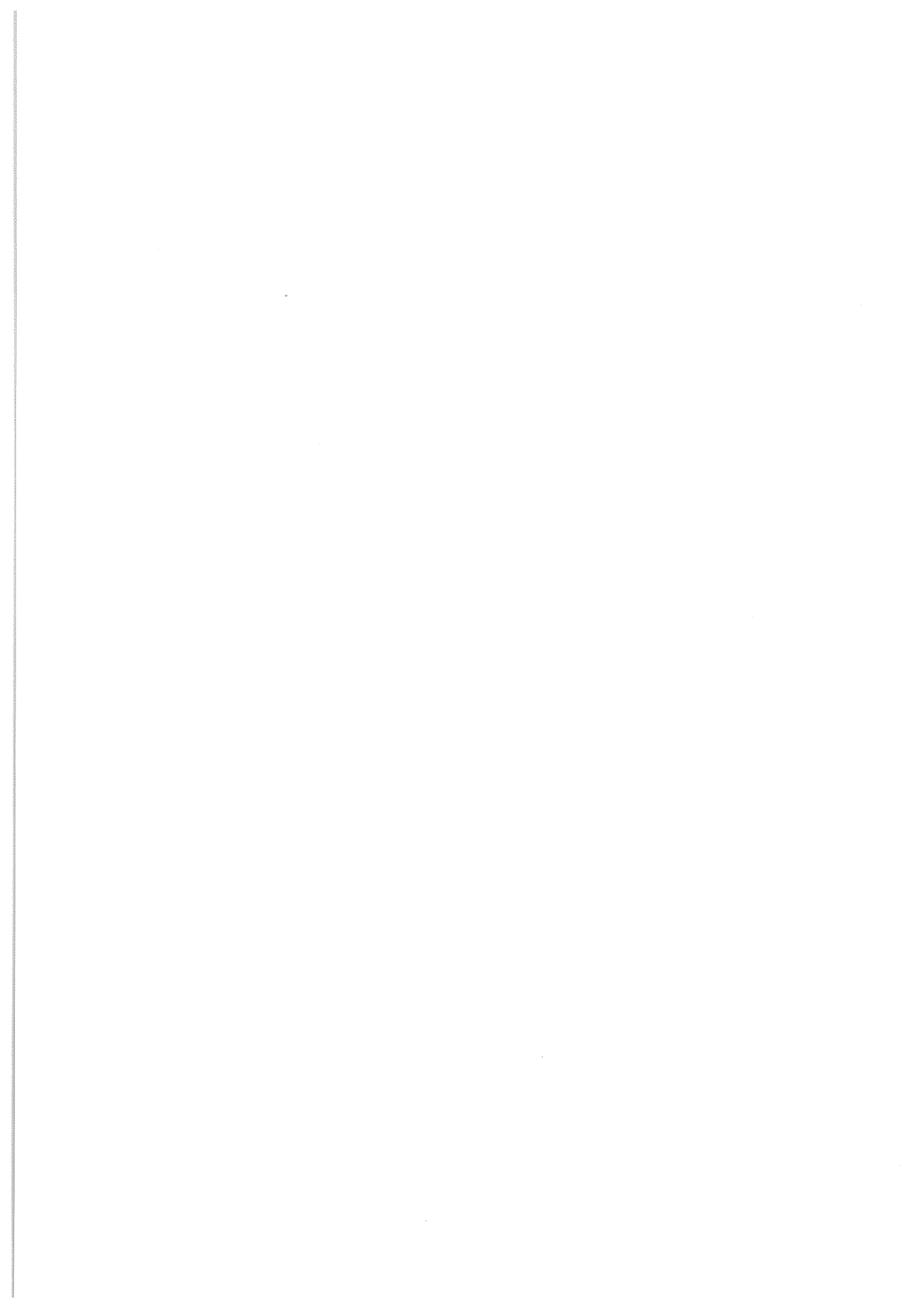
7. 拾六町ツイジ遺跡出土漆器塗膜断面 (約820倍)



8. 門田遺跡24号甕棺出土朱 (約370倍)

出土赤顔料の顕微鏡写真

版 圖





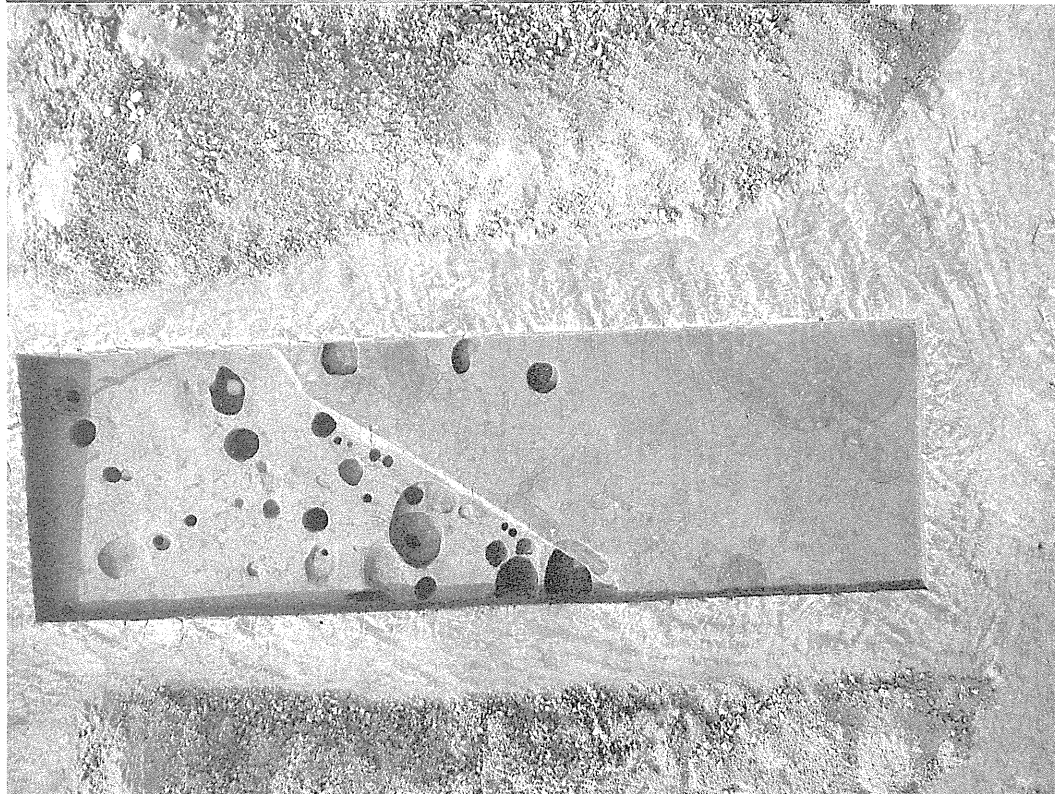
a. 一貴山・上深江地区を南側上空より望む



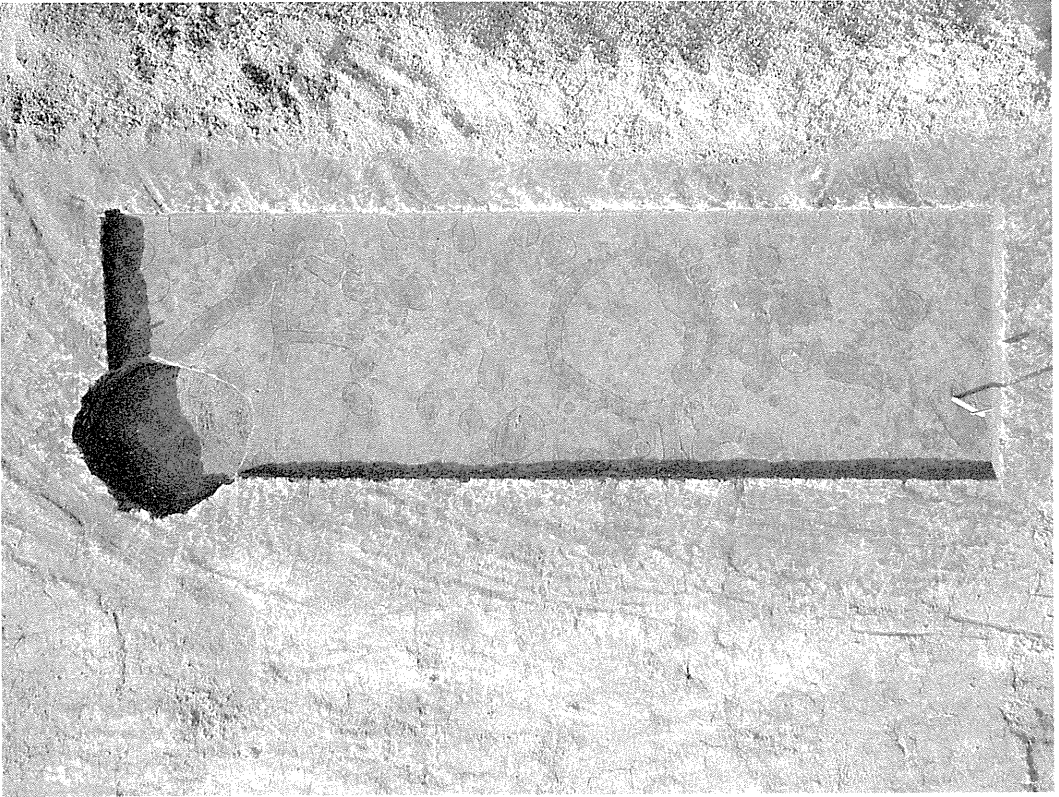
b. 大坪遺跡上空より可也山を望む



a. 遺跡全景（空中写真）



b. 第2トレンチ全景（空中写真）



a. 第3トレンチ全景（空中写真）



b. 第4トレンチ全景（空中写真）

図版 4



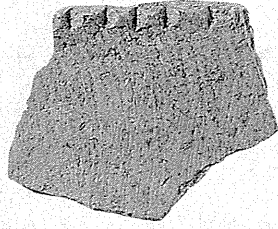
a. 第4トレンチ杭列等出土状態



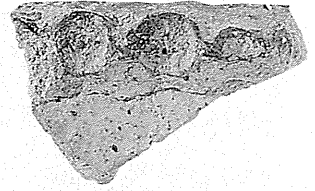
b. 甕棺墓群全景（空中写真）



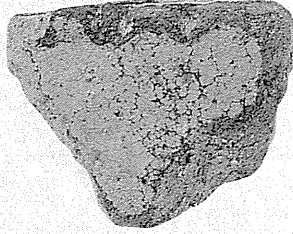
5



46



51



47



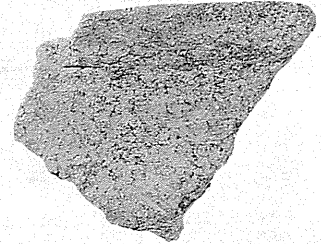
52



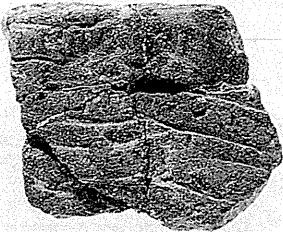
14



48



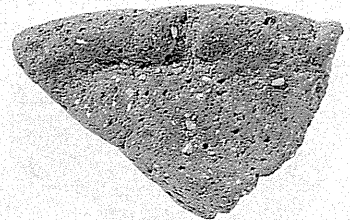
53



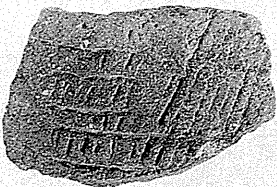
17



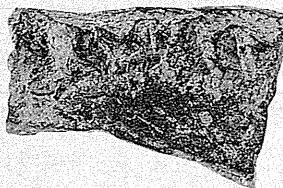
49



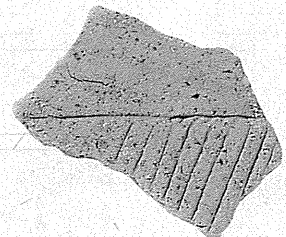
78



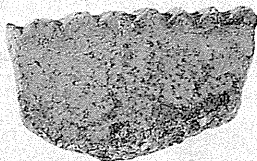
18



50



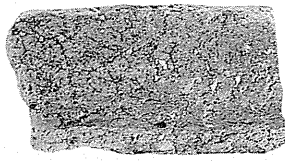
82



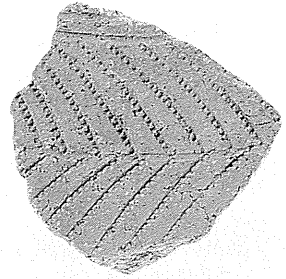
45



84



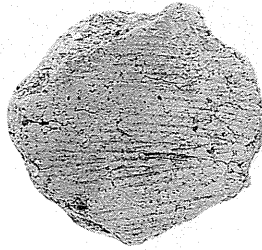
95



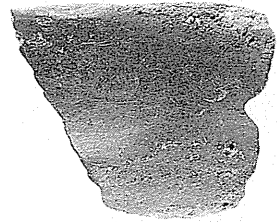
101



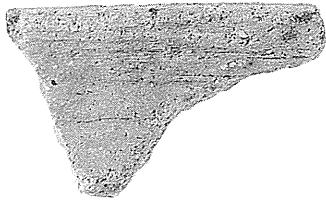
85



97



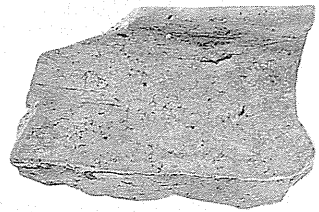
120



86



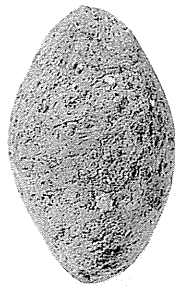
98



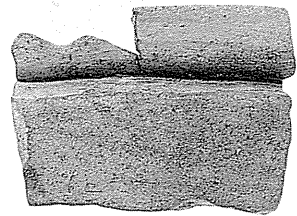
121



87



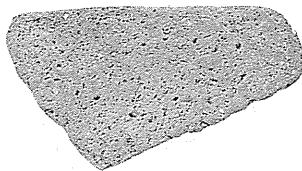
99



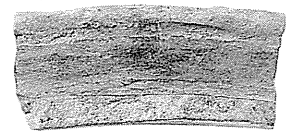
122



93



100



124



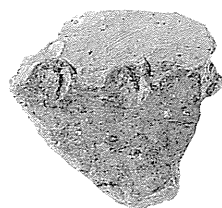
125



126



131



133



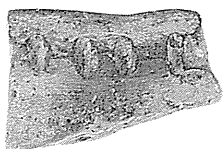
129



131



134

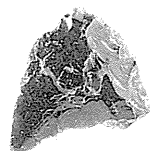
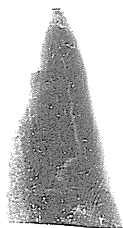


130

a. 出土土器 3



1



2



6



10



15



20



11



16



21



3



7



12



17



22



4



8



13



18



23



5



9



14

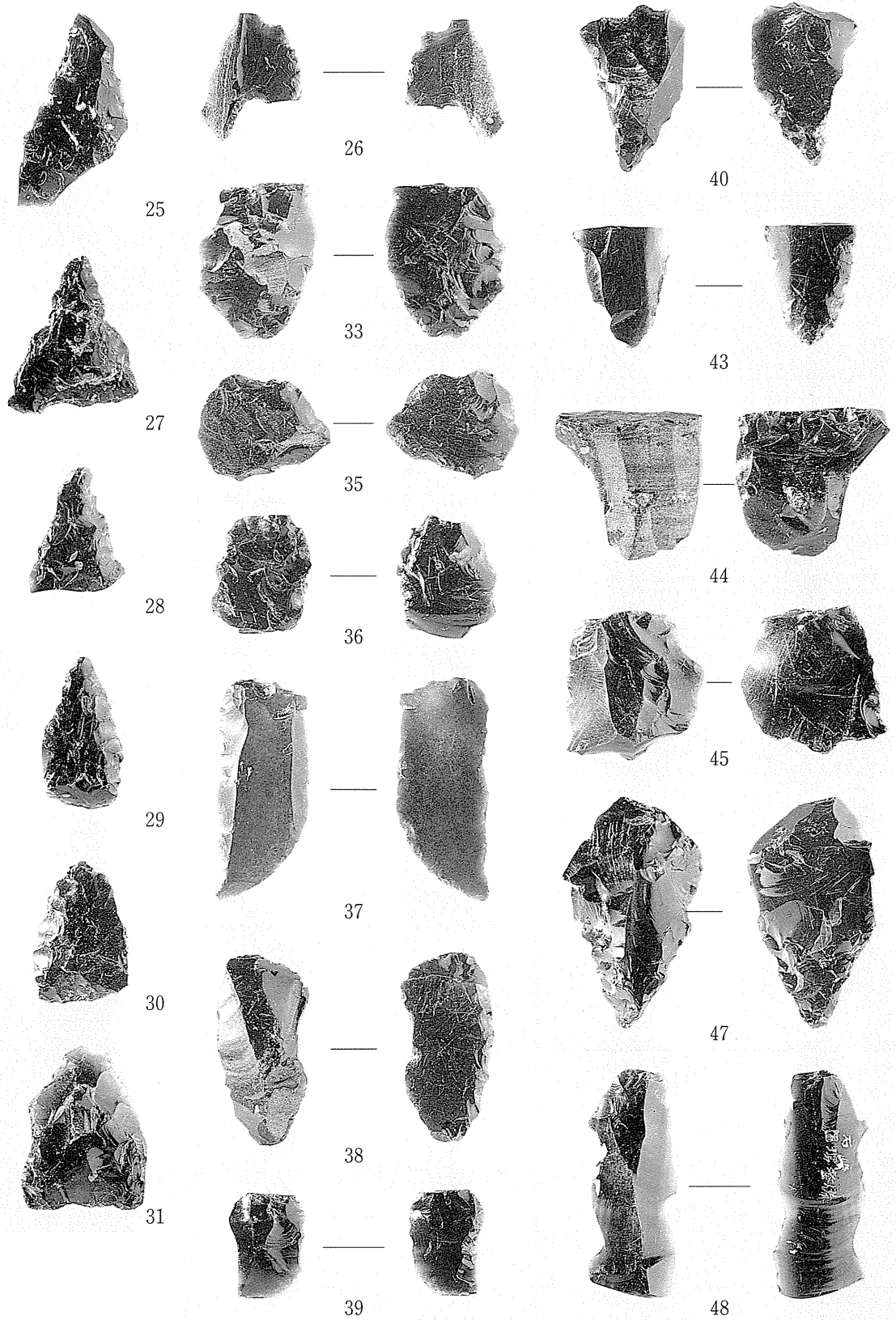


19

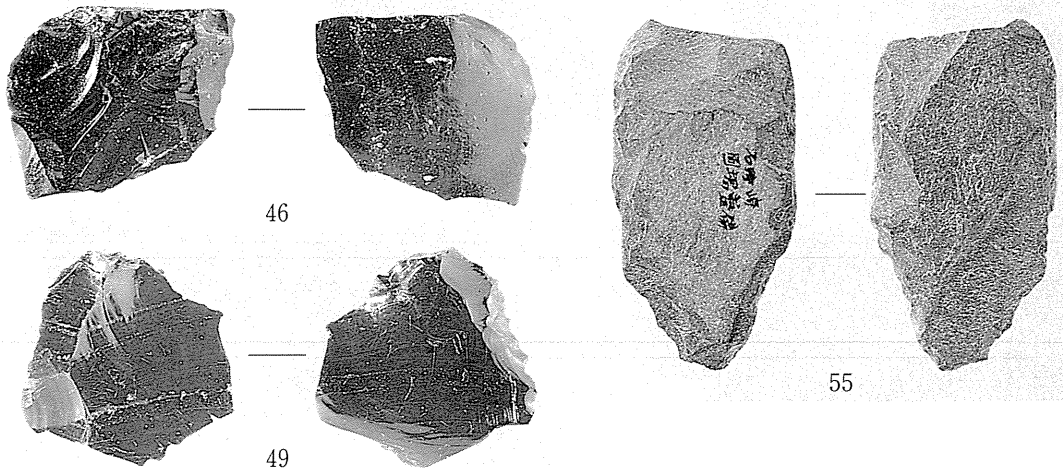
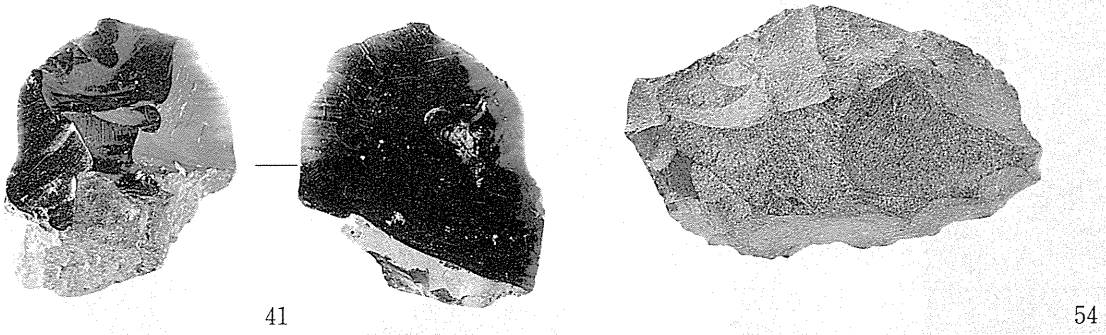
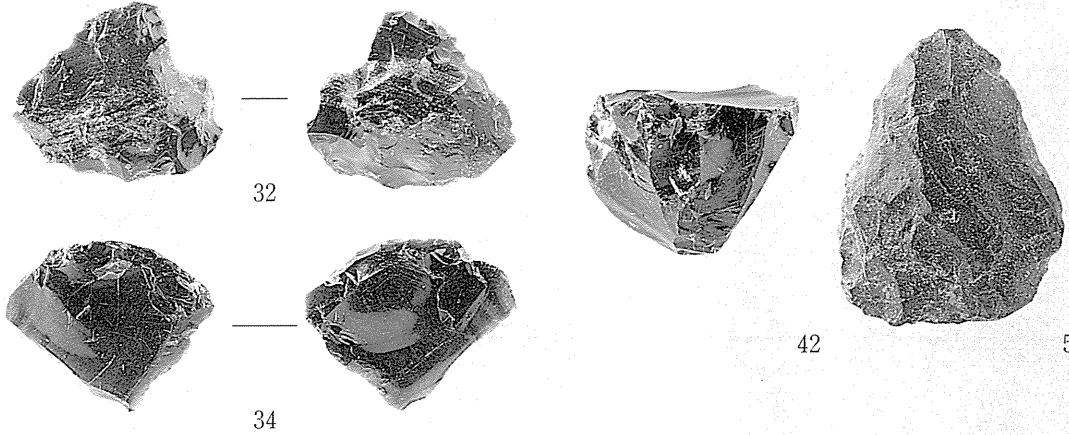
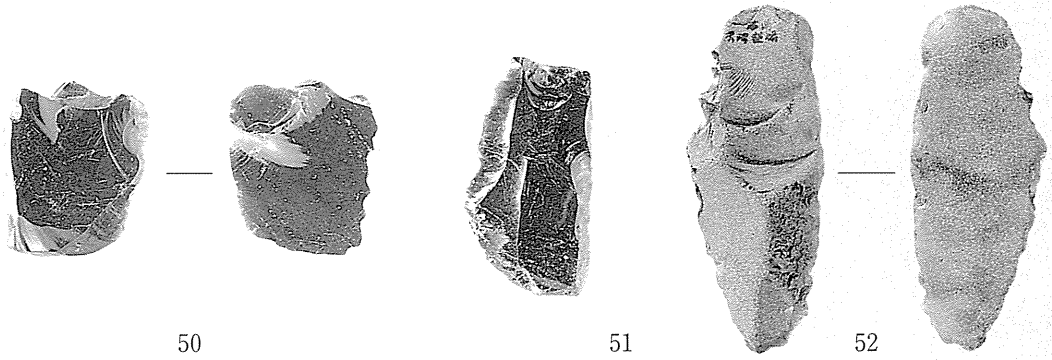


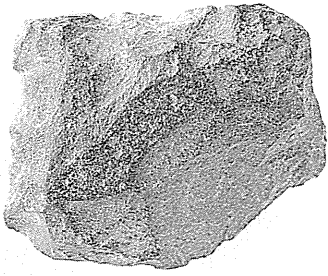
24

b. 出土打製石器 1

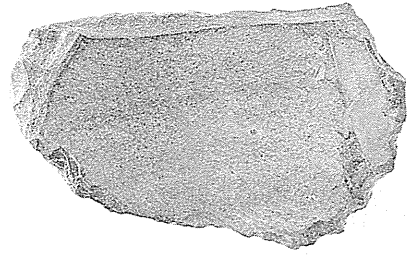


出土打製石器 2





56



57

a. 出土打製石器 4



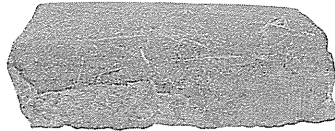
1



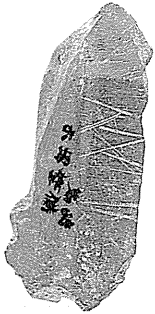
4



5



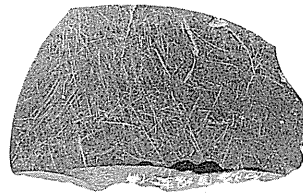
6



2



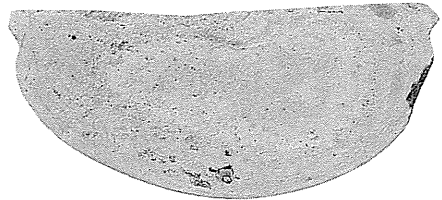
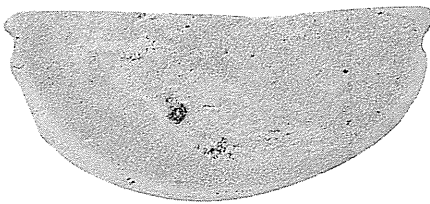
3



8



9



7

b. 出土磨製石器 1



10



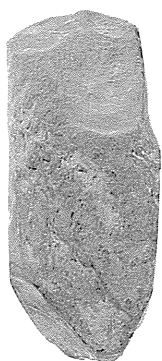
11



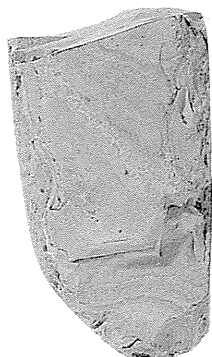
14



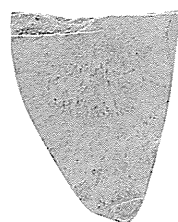
17



12



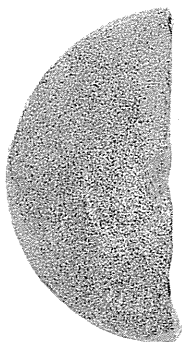
13



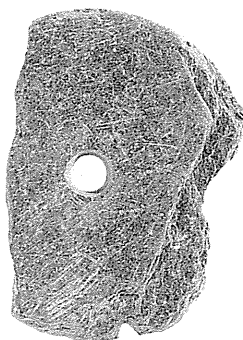
15



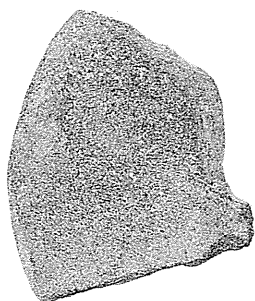
16



18



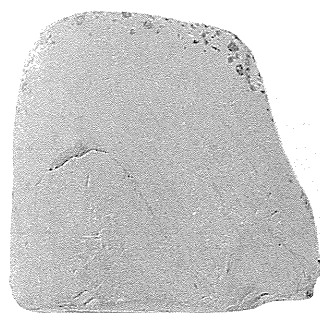
19



20



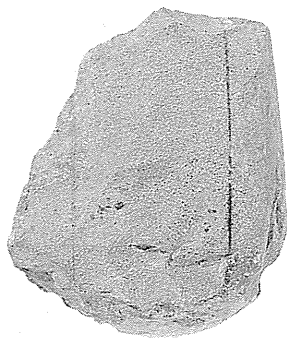
21



22



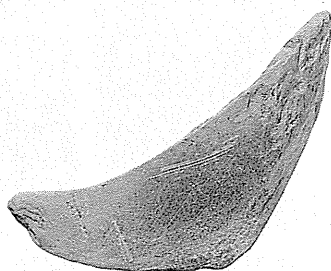
23



24



25



26



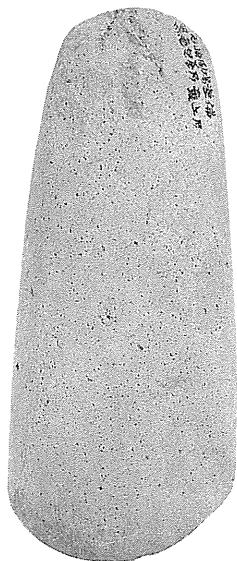
27



28

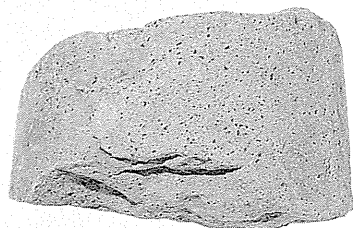


29

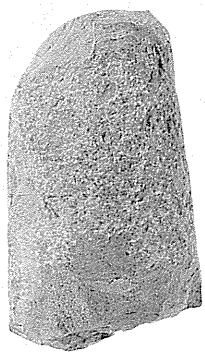


31

出土磨製石器 3



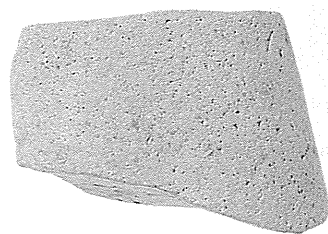
30



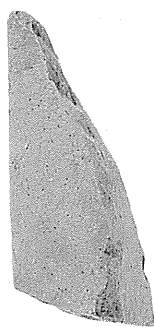
32



36



39



33



37



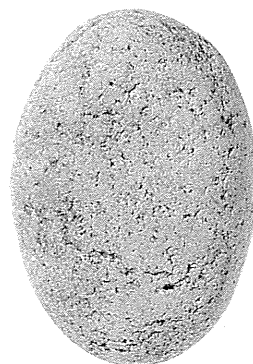
40



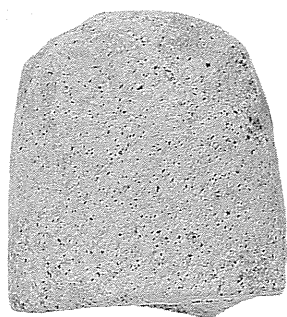
34



38



41



35



42





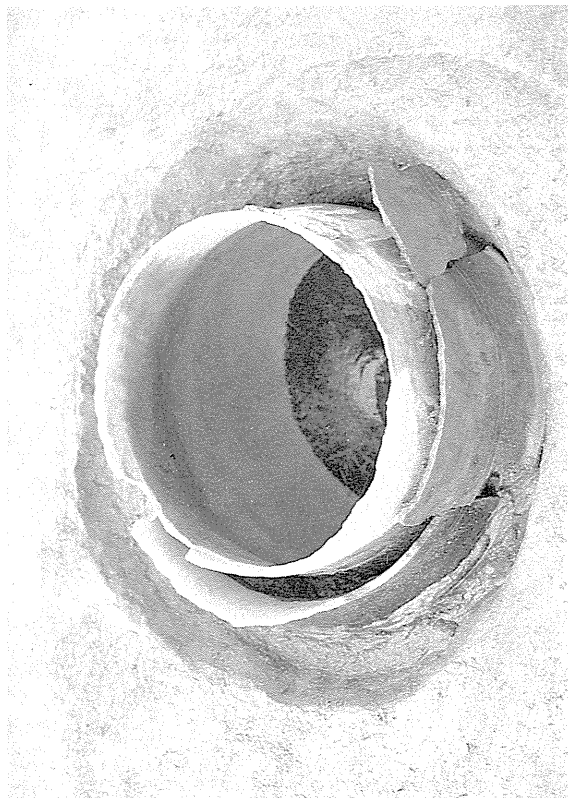
a. 1号甕棺墓出土状态



b. 2号甕棺墓出土状态



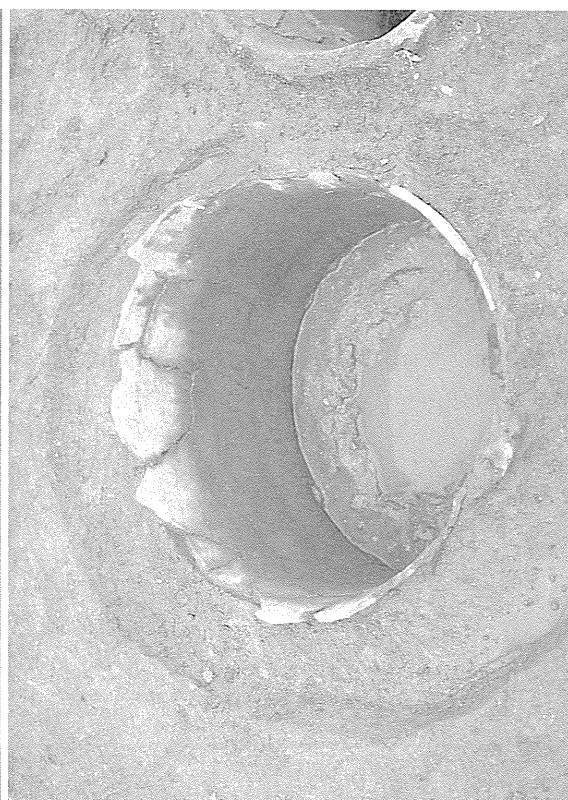
c. 3号甕棺墓出土状态



d. 4号甕棺墓出土状态



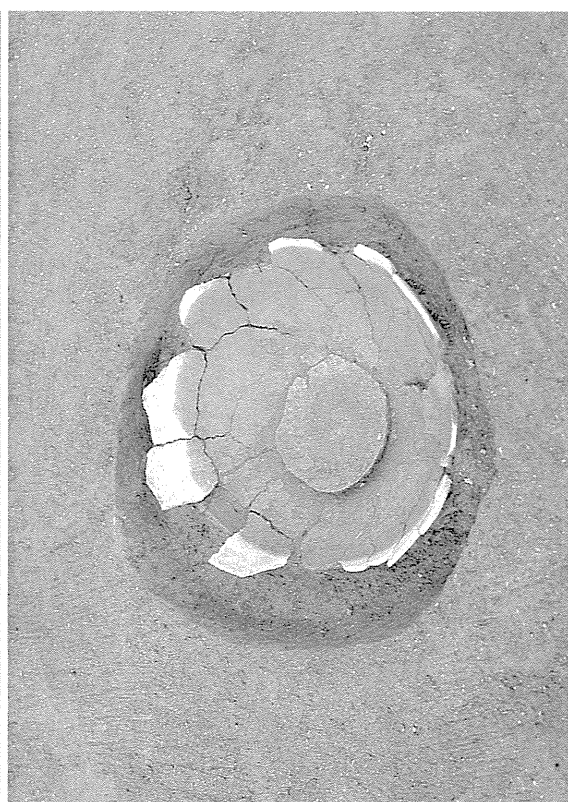
a. 5号甕棺墓出土状态



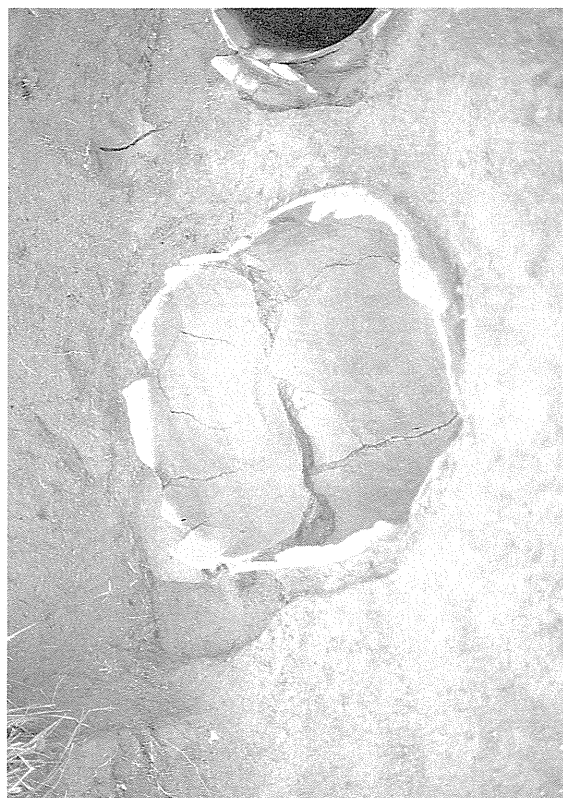
b. 6号甕棺墓出土状态



c. 7号甕棺墓出土状态



d. 8号甕棺墓出土状态



a. 9号甕棺墓出土状态



b. 10号甕棺墓出土状态



c. 11号甕棺墓出土状态



d. 12号甕棺墓出土状态



a. 13号甕棺墓出土状态



b. 13号甕棺墓底板出土状态



a. 14号甕棺墓出土状态



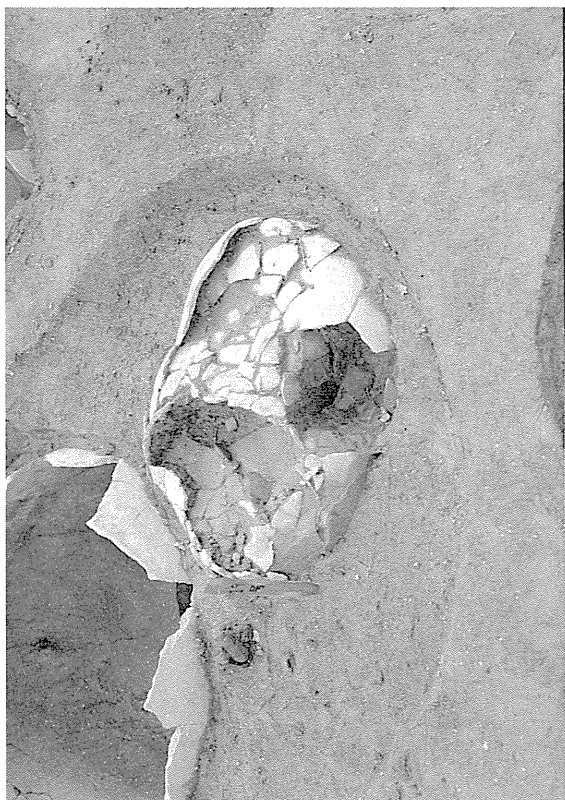
b. 15号甕棺墓出土状态



c. 16号墓出土状态



d. 18号甕棺墓出土状态



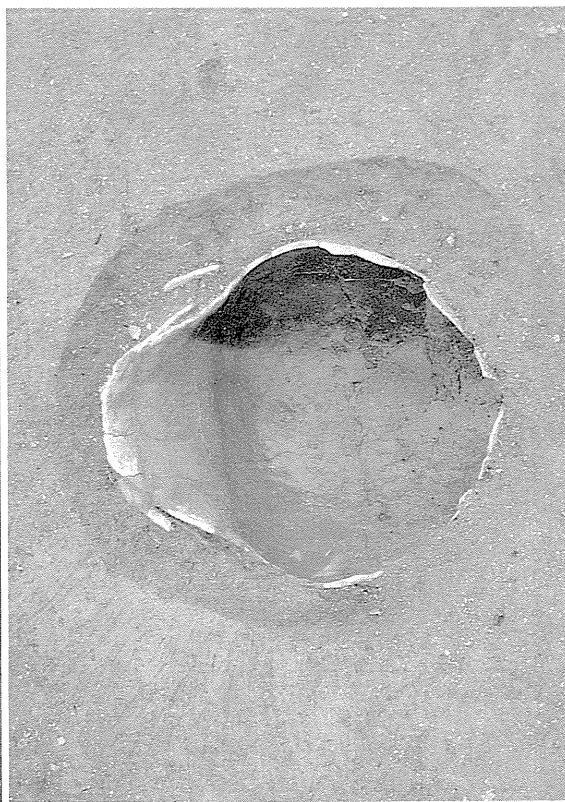
a. 19号甕棺墓出土狀態



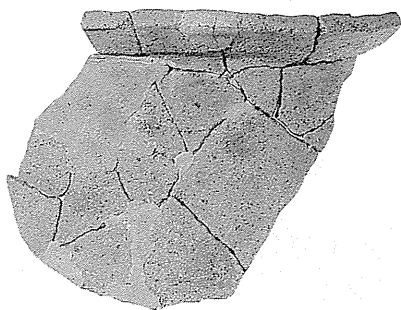
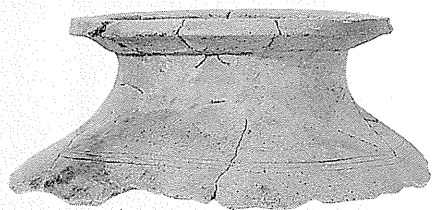
b. 20号甕棺墓出土狀態



c. 21号(左)・22号(右)甕棺墓出土狀態

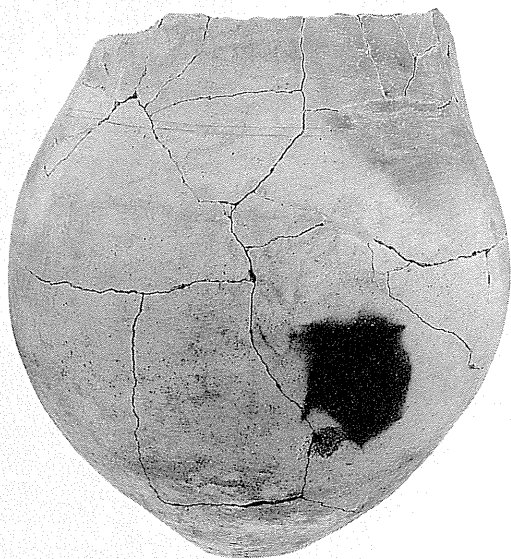
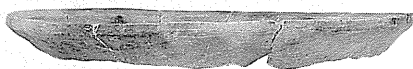


d. 23号甕棺墓出土狀態



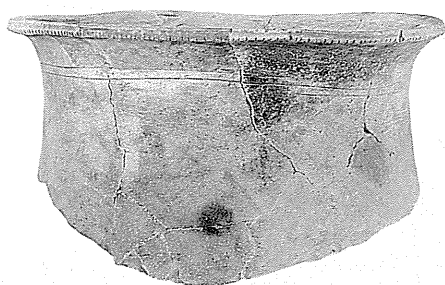
K-1上

K-2



K-3

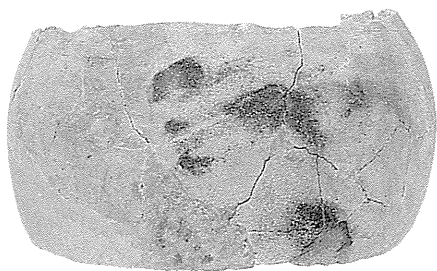
K-1下



K-4上



K-4下



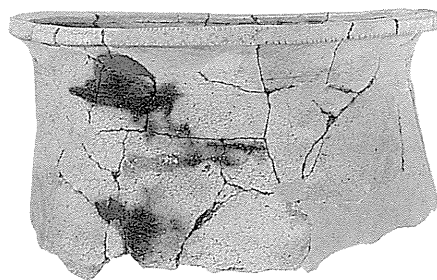
K-5上



K-5下



K-4下



K-7上



K-8



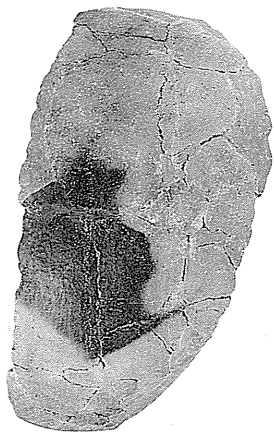
K-7上



K-9上



K-9下



K-10上

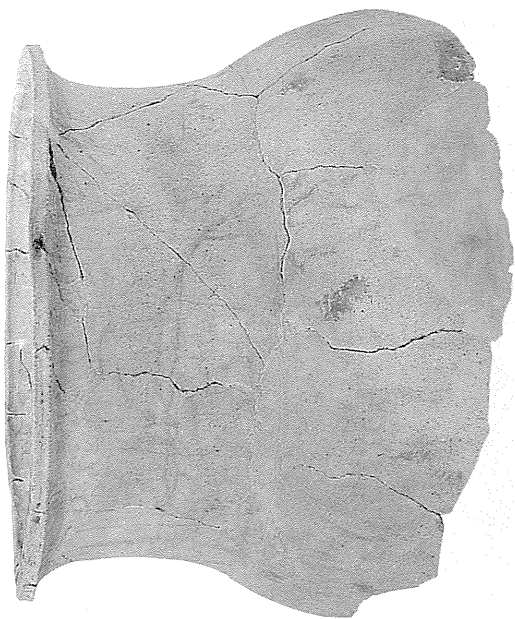


K-10下
出土甕棺3

K-6



K-13



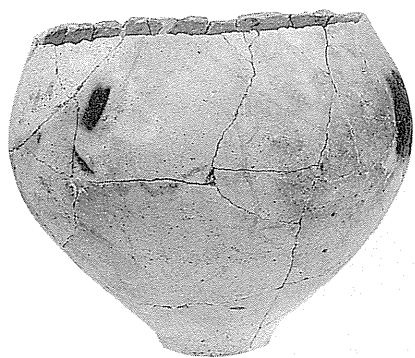
K-12



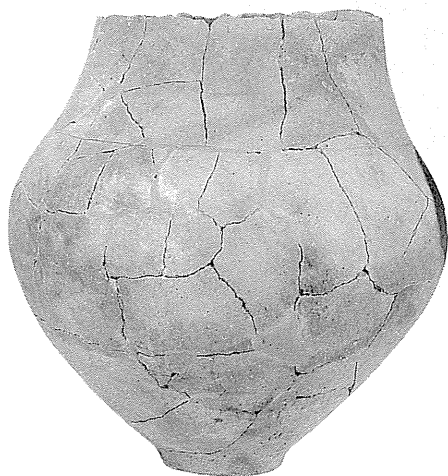
出土甕棺 4



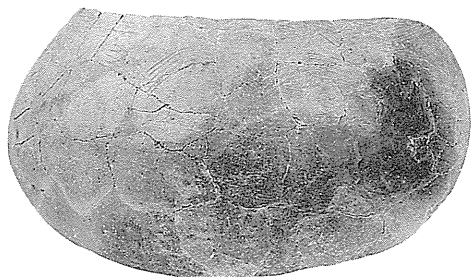
K-11



K-15上



K-15下



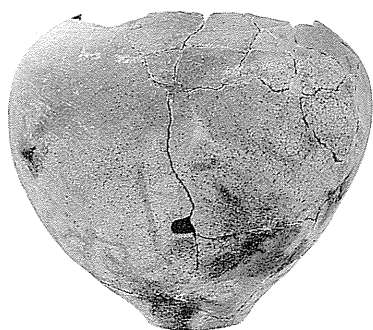
K-14上



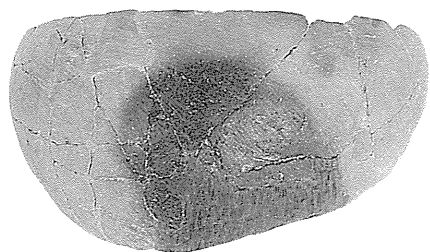
K-18上



K-14下



K-18下



K-19上



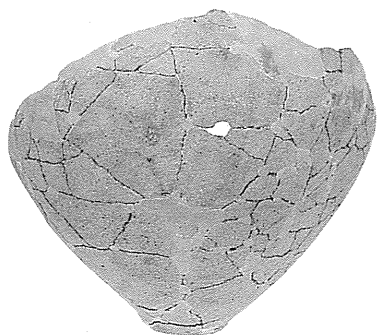
K-20



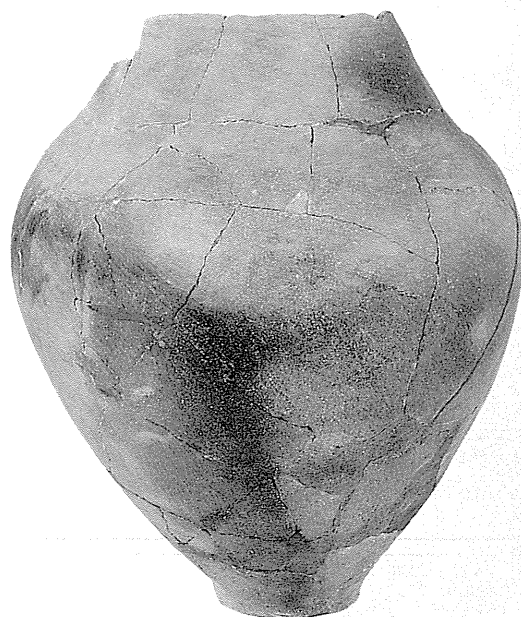
K-19下



K-23上



K-21



K-23下



K-22



a. 4号甕棺下甕の黒塗り



b. 4号甕棺下甕内面に付着した黒色顔料



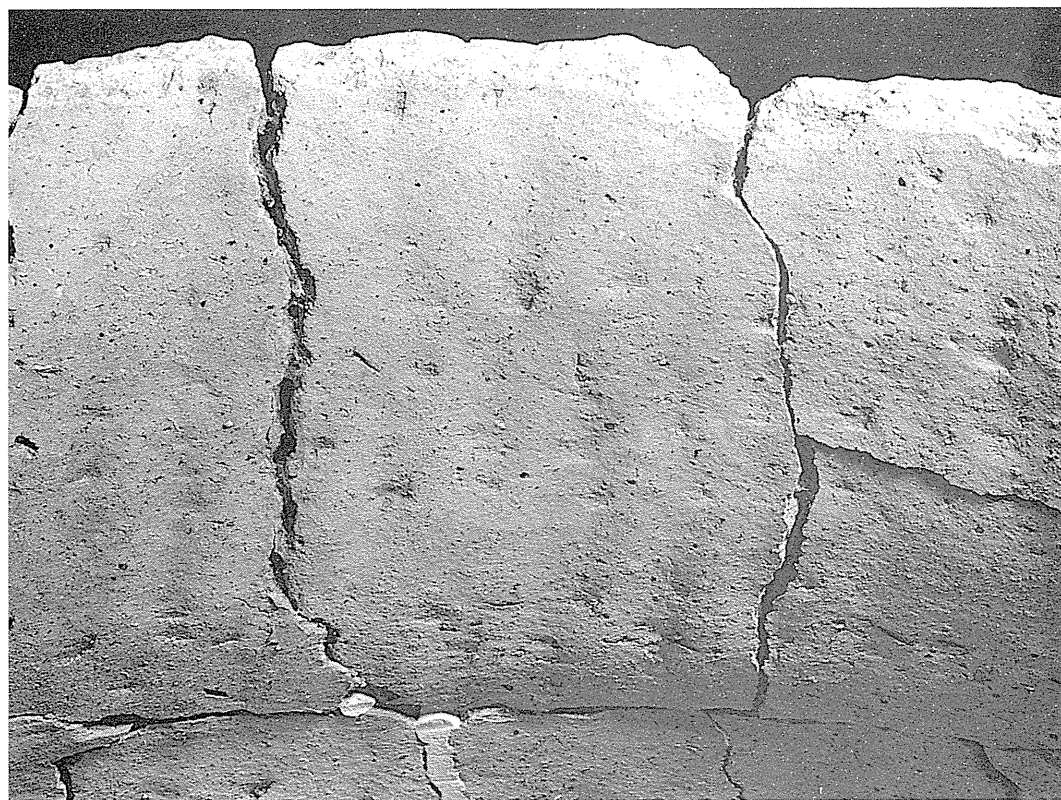
a. 6号甕棺内面の調整痕



b. 7号甕棺下甕内面の調整痕



a. 10号甕棺下甕のタタキ痕ほか



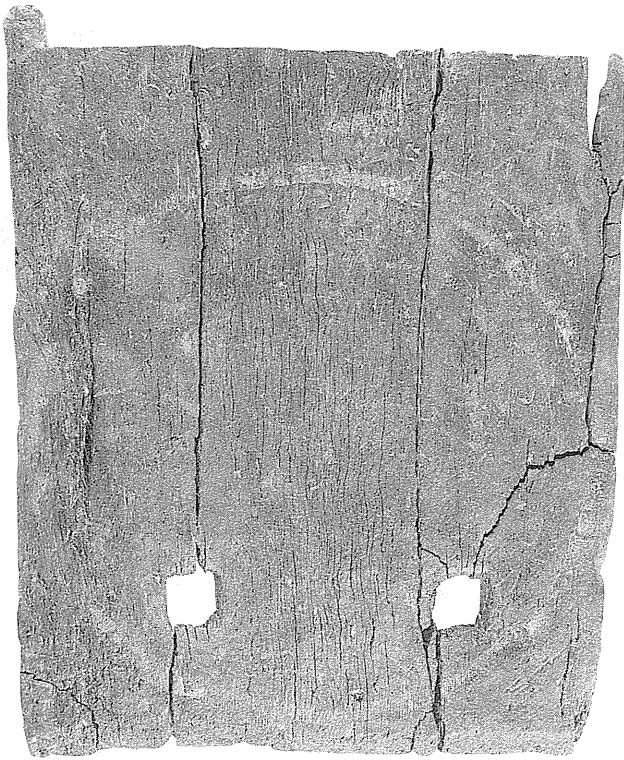
b. 15号甕棺下甕内面の調整痕



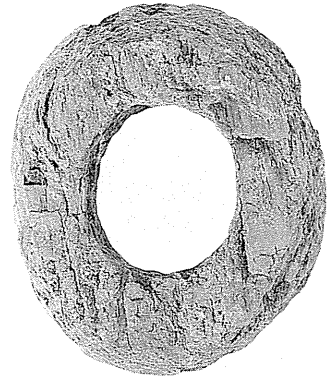
a. 19号甕棺下甕内面の調整痕



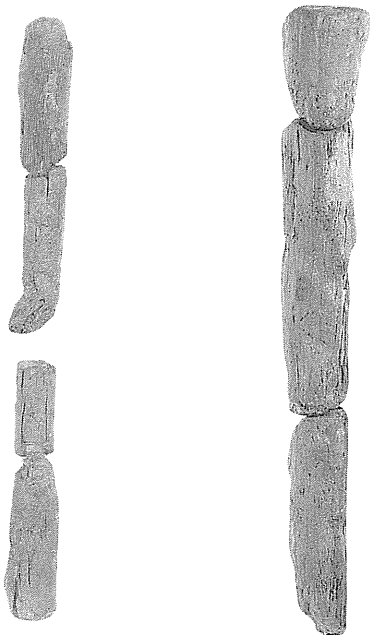
b. 2号甕棺底部付近のタタキ痕



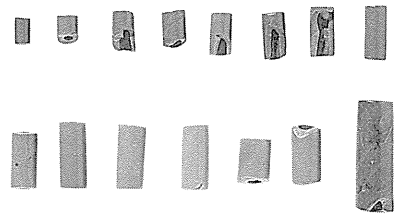
a. 13号甕棺墓底板



c. 出土木器



b. 13号甕棺墓底板のとめ杭



d. 5号甕棺出土玉類



e. 13号甕棺出土玉類

報告書抄録

ふりがな	いしざきちくいせきぐん おおつばいせき							
書名	石崎地区遺跡群 大坪遺跡							
副書名	福岡県糸島郡二丈町大字石崎所在遺跡群の発掘調査							
巻次	I							
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	橋口達也							
編集機関	二丈町教育委員会							
所在地	福岡県糸島郡二丈町大字深江1071番地 TEL092-325-1111							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
大坪遺跡	福岡県糸島郡二丈町大字石崎	40462	600090	33度30分50秒	130度10分2秒	880927～881224	4,700	県営一貴山地区圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
大坪遺跡	集落跡墓	縄文晩期～弥生前期	住居跡 甕棺	1棟 21基 等	甕棺 磨製石器 打製石器 扉板	縄文晩期～弥生中期の遺物が出土した。甕棺の底板に用いられた扉板は最古の資料である。		
印	刷	(株)西日本新聞印刷 福岡市博多区吉塚8丁目2-15						

石崎地区遺跡群

大坪遺跡 I

二丈町文化財調査報告

第10集

平成7年3月31日

発行 二丈町教育委員会
福岡県糸島郡二丈町大字深江1071番地

印刷 株式会社西日本新聞印刷

